

# 地名研究会報

第37号

平成5年3月7日

鹿児島地名研究会

I. 第37回例会 平成4年6月7日 於教職員互助組合会館和室  
(出席者) 青柳俊二・池田信夫・市来亦久・大田照夫・納栄蔵・熊平さん・木場武則・平田信芳  
藤浪三千尋・松田誠(計10名)

## 大隅国・薩摩国の駅路と伝路

平田 今日は大隅国・薩摩国の駅路と伝路について集中的に話したいと思います。青柳さんの資料もありますので、これら三つの資料で話を進めたいと思います。

「西海道の駅馬と伝馬」という資料、これは『延喜式』のコピーです。大隅国の駅馬と薩摩国の駅馬大隅国には伝馬がありません。これはあとで使います。それからローマ数字のⅠ・Ⅱ・Ⅲというのは、鹿児島県の駅路についての資料です。それと、石清水文書にある史料。「当宮御宝殿」というのは正八幡宮の御宝殿のことです。「丑寅の方、行くこと三町許り、往古の大路宮坂麓において」とありますから、宮坂麓を駅路が通っていたということが史料に残っていることになります。「顯現八幡の御名の二字、御石跡二基に現わる、奇特を給う」と。これが石跡神社の由来になっています。石跡神社の由來の史料として有名なものです。これは以前から気が付いていたのですが、北へ抜ける道ばかりを考えていました。

現在、国学院大学2年生の橋村修君という人物がいます。小川先生の姪御さんの息子になるのですが大隅国・薩摩国の駅路を専門にやるとのこと、私のところに訪ねてきました。彼が蒲生～大隅国府の間の駅路復元案を持って来ましたので、その時この

石清水文書の史料と結び付けることが出来ました。蒲生駅というのは、大体八幡宮あたりだと見当が付きますが、もう一つのポイントとして宮坂というのが史料的に明らかになって来ました。ちょうど、石跡神社の所から坂道を登って鹿児島女子大学の所に出る道になります。

③は長門本平家物語に記されている俊寛たちの配流の道。前回、小園先生が話された島津の庄から夏影、赤坂、止上を通り、景色の森に着いて正八幡宮をよそながら見て行く道。それから流された島について「さつまがたとは惣名也、きかいは十二の島なれば」、鬼界島のことですね。「くち五島は日本に隨へり、おく七しまはいまだ我が朝に従はずといへり」、その次は何と読むのですか、「白石、あこしき、くろ島、いわうが島、あせ納、あせ波、やくの島とて、ゑらぶ、おきなは、きかいが島といへり、くち五島の内、少将をば三のとまりの北いわうが島に捨て置く、康頼をばあこしきの島、しゅんくわんをば白石が島にぞ捨置ける———」それから長門本の卷五。「さつまがた房の泊り」、これは坊之津のこと、「といふ所より、鹿児島」、これは鹿籠だと思います。島はあとから付けたもので枕崎の鹿籠のことだと思います。「逢の浜」これは頬娃あたりだと思うのですが、「木入津」、喜入

ですね、「向島をも押過ぎて、鳩脇、八幡崎にぞ着き給ふ、それより取りあがりて宮中の馬場」、帰りは硫黄が島から坊津にあがって枕崎、頬杖を通って喜入、桜島を経由しています。鳩脇は長浜の手前、八幡崎というのは蛭兒神社のある所。そして、宮内馬場にあがる。こう云った経路が考えられる。

その次、右側の資料の説明になります。これは木下良氏の説明を要約したもので、彼とは三十年近くつきあっているのですが、国学院大学を今年定年でやめられました。さっき話した橋村君の直接の先生ということになります。日本古代交通史研究の第一人者になります。3週間後の6月27・28日に古代交通研究会というのが発足します。現在の日本古代交通史研究が駅路・駅伝制についてどのような理解をしているかを示すもので、それを箇条書きにしてみました。

まず駅制というのは律令国家が採用した中央集権的な交通制度である。伝制はそれ以前の豪族の交通制度を再編成したもので、すべての郡に伝馬が置かれているのが原則である。それから、駅馬は駅家に伝馬は郡家に置かれている。

駅路は大体幅10m.以上の直線道路が多い。ここでは駅馬のみが通過する。それから駅伝路というのがあって駅馬も伝馬も利用する交通路がある。それから、郡伝路というのは郡と郡を結ぶもので記録には出て来ない道路である。

本来は国府にも駅家が置られていた。ところが、段々負担軽減の意味で別に置かれるようになった。大隅国・薩摩国の場合地名からみて国府に置かれていたと考えられます。大隅国の場合、馬草田という地名が府中にありますし、薩摩国の場合日駒(ひこま)という小字がありますから、薩摩国も国府に置かれていたとみられます。全国的にみると郡家と駅家は近接した例が多い。

古代の道路は渓谷を避けて峠道を通る例が多い。

これは挟み撃ちを避けるため見晴らしの利くところを通る。

10m.以上の道幅の道路というのは軍用道路でもある。鹿児島県では国分市の国分寺の西側を掘った時に大きな溝が出来たのですが、反対側の溝、対となる溝が確認出来なかった。反対側に溝が出来れば道路と確認出来たのですけど。全国の発掘例をみてありますと、大体、溝と溝との間に幅10m.ぐらいの道路がある。その溝というのが国分市で出て来たような溝です。だから、あれも詳しく調べたら国分寺の北側に大きな道路が通っていたというの、大隅国の場合早く確認出来たのだろうと思います。残念ながら溝は北側しか出でていなくて、南側の溝は現在の道路からはずれていたので調査されていません。どこかで調査されるだろうと思いますが。全国の例からみると大体溝と溝の中心の距離が12m.ぐらいの道路が直線的に走っている。そんなのが駅路になります。

この幅10m.の大路は、奈良時代は全国的に維持されていたけれども、平安時代になって来ると消滅していきます。それから全国的にみていくと、古代の駅路は、現在、縦貫道：高速自動車道というのが山の中を通っていますが、これが大体昔の道と一致している例が多いということです。古代的事象の現代的回帰ともいべき事柄だといわれています。

駅館：駅家の建物は、調査例では朱塗り・白壁の建物であったといわれます。中には瓦葺きの建物もあったと云います。

駅名の記載順は順路にしたがうとは限らない。例えば、さっき配った資料の日向国の駅馬・伝馬を見ると大体その順番になっていますが、駅馬は去飛・児湯の順、伝馬は児湯・去飛の順になっていますから順序が入れ代っています。

駅路関係の地名として、全国的には馬込(まごめ)・立石(たていし)・車路(くるまじ)ななどの地名が多い。蒲生

駅と大隅国府の間では、先程の橋村君が持つて来た地図に溝辺台地の馬立と立岩をマークしてあった。それを延長して行くと、真下に宮坂籠があったのでこれは大隅国府と結びつくと云って、彼の手柄を誉めてやった次第です。大隅国・薩摩国の駅路について概略そういうことが云えます。

次に、最も資料がそろっている出雲の駅伝路については青柳さんが資料を用意しておられますので、説明をお願いします。

### 出雲国の駅伝路

青柳 地図をもとに話をします。これが島根郡。ここが半島部ですね。ここに洲があります。なんと云う所——。

平田 夜見の浜？

青柳 夜見の浜という砂洲が境港まで続いています。伯耆国から出雲国に入って、そして石見国に出るコースで、駅は1枚目の下のところに書いてあります。国府から野城駅、それから黒田駅、宍道駅、狹結駅、多岐駅です。下に書いてある距離が出雲国風土記の卷末に書いてある距離です。使った資料は吉野裕さんの訳された『風土記』という本で平凡社の東洋文庫にあります。現代文に訳されているので僕らでも使い易くて、解説が豊富です。地名の対照もわりと丁寧にしてありました。

全国に北陸道とか東海道とか、中山道とか南海道とかあります。九州は西海道ですが、出雲国は一応山陰道に属すると思います。時代は下って、延喜式には「出雲国駅馬、野城・黒田・宍道・狹結・多岐・千酌」などが駅馬各五疋とあります。それから、さっき説明された伝馬はこの中には存在していません。だから伝馬と駅馬の関係について、どういうふうにされていたのか、郡の交通は馬には頼らなかったのか。その辺はよく判らないし、それと出雲国風土記を見ていても馬の記事が見つからないのです

牧があるとか、それから馬に関する伝説とか民話とか、そういうのはほとんど見かけません。既と書いてあるから馬がいたのでしょうという程度です。はっきり馬がいたというようなことは、ちょっと出て来ていなかったようです。注意して見ていかからかも知れませんが。

それで、千酌駅というのは、ここが出雲国府ですけど、松江のここは渡津海の渡しと云って中ノ海・宍道湖から水が出ていく所です。そこを越えて日本海側に出て、ここに隠岐国府がありますから、こちらに船の連絡がありますから、そのための駅ということです。

次に1枚目の下の表を使って、距離というか里程をちょっと説明したいと思います。さっき云ったように各駅の間の里数が示されています。解説では一里は三〇〇歩ということです。一里は何メートルかを理解するために下の表を作りました。伯耆国から石見国の境ですね。これがいくらかというの出雲国風土記には違った数値が出ているのです。それが出雲国風土記の一番最初のところに出来ているわけです。国全体の形は東の方をはじめと西南の方を終りとする。東と南は山で、西と北とは海に接している。東西は37里19歩、南北は183里19步である。東西は、もし伯耆国と石見国との境を結んでいる駅路を示したとすれば、僕があげた147里299歩と、10里ぐらい差が出来ます。何故147里299歩を出したかというと、卷末に国全体の道のりを表しているのですけど、その中に伯耆国との境、野城駅との間が20里180歩。それから野城駅と黒田駅が21里ですね。国府からというか、黒田駅と国府は同じ場所ですから、そこから意宇郡衙も同じ場所と書いてありますから、そこから石見国の境に抜けるということですけど、その道のりが106里34歩というふうに書いてあります。それは合せた数字です。途中に渡し場が二つあって、それも加

えてあります。そういう数字になっています。それにもとづいて、ものさしで測って入れた数字です。どこに不足が出ているかを見てみたら、宍道駅と狭結駅の間が26里 299歩とあって約9里の不足が出ているようです。この9里の不足を、表にして求めてみました。黒田駅と狭結駅との間を結んで数字を入れてみました。野代の橋まで12里、それから玉造の街まで7里、玉造から米待の橋まで9里。来待の橋から宍道駅のところで、10里というものが脱けているようです。それから宍道駅から郡境に至る3里。この2区間は郡家を中心解説した里程表にはその部分が脱けているみたいです。あとは表のよう解釈しました。

地図で見てみると大体そういうふうだなあということです。私の計算では 147里 299歩になります。そして、実際にあり得る数字かというのをちょっと計算するために、JRの山陰本線の距離を調べてみたら、80.5kmという数字が出ました。その前に書いてある79.1kmというのが、1歩は6尺；1.718m。1里 = 300歩、ですね。これが534.5m。これがいわゆる天平尺ということで解説してあります。これでいくと、三十里 = 16.0km。になります。その説明で147里 299歩を換算したら79.1km。という数値が出たので、地図でみたところ鉄道の方にもかなり湾曲している部分もありますが、納得できる数値のようです。

出雲国の駅伝路は、駅と駅の間が三十里を標準とする数値のようです。6つの駅の間を平均したら、16km。に少し足りないくらいの数値になっておりました。あとで地図を回しますから、足りないところは確認して下さい。

次に2枚目の説明に入ります。巻末の里程表・日程記録によって大体の道を示してみました。郡の数は9つですか。半島部が東から島根郡、秋鹿郡、橋縫郡、それから出雲郡。内陸部が南から意宇郡・大

原郡、飯石郡。そして隣国との境の山奥の方が仁多郡、神門郡になっています。黒く塗ってあるのが駅です。風土記・延喜式にも出て来る駅と比べても、駅の名前は変わっていません。○で表したのが、一応風土記に出ている郡家の位置です。に○を合わせた○が、郡家と同じ場所にある駅ということです。風土記に出ている郡家というのは黒田駅と狭結駅。黒田駅は意宇郡家のあるところで、しかも出雲国庁のある所です。狭結駅というのは神門郡の郡役所のある所と同じ所にあると書いてあります。△で印したのが関所で、それぞれの道に設けられています。

この地図を作った意味は、駅があつてはじめて郡役所があり得るのではないだろうか、ということを強調するというか、大切だと思ったから作ってみたわけです。それで、一番最初の駅、能義駅というのはどうなっているかというと、プリントは能美駅になっていますが、能義郡家の誤りです。能義郡に能義郷というのがあって、多分能義駅のところに郡家もあったと思われます。

次に、駅伝とありますけど「伝」というのは何を指しているのか。駅の他に「伝」という施設があるかも知れないと思って、駅と伝とははっきり分けて考えた方がいいのじゃないかと思って、延喜式の駅伝に関する記事を調べみました。「伝」という字が一度だけ出てきました。正税帳の書類を作るための書式というか、サンプルの中に「伝若干所」という字が一度だけ出ていました。それで、私が思うに駅というのは馬ということです。伝というのは人べんの字ですから人についての駅というか、そういう意味じゃないかなということで、必ずしも馬はいなくとも「伝」というのがあり得たのではないか。馬が日本に入って来る前には人が歩いて伝えていくような「伝」というのが先にあって、それから馬を使った通信手段、交通手段、旅行手段というのが出来ていくんじゃないかなという気がして、とりあげて

みたわけです。それで、郡家が「伝」の役割をになっていたというふうに理解した方がいいのじゃないかと思っています。そうしたら、各郡家を結びながら求めしていくと、他の国に出て行く道のこともわりに理解し易いのではないかと考えます。

最後に、出雲国は三十里 = 16km。説が当てはまりそうですけど、薩摩国・大隅国について16km。を厳密に適用して調べていくのは少し難しいようです。20km。程度を標準に考えていくのがいいのじゃないかと思います。距離の長い駅もあれば、短い距離の駅もありますので、平均して20km。程度ということです。30km。を超すような長い駅間もあるかも知れません。長い駅があったら次は短い距離で調節するというようなことで、一応20km。程度を標準に考えてよいのではないかと思います。

次に、南九州の駅伝の特徴は伝馬が駅に置かれていることであると書きましたけれども、それについては先程配られた資料の延喜式をちょっと見て下さい。西海道について、まず筑前国を見て下さい。筑前国の駅として独見、夜久——それからずっと行って一番最後の方、把木、広瀬、隈崎、伏見、網別各五疋とあります。それが駅馬についての記事です。伝馬は下に、御笠郡十五疋とあります。その場合の伝馬は郡についています。次の筑後国を見てみると、筑後国駅馬、御井、葛野。狩道各五疋。伝馬は御井、上妻郡、狩道駅各五疋。筑後国の場合には伝馬は郡に付けられている場合と駅に付けられている場合とがあるということです。豊前国は伝馬はありません。豊後国は伝馬は全部、郡に付いています。肥前国は駅に付いています。肥後の場合は、伝馬が大水、江田、高原、蚕養、球磨、豊向、片野、朽網、佐色、水俣駅各五疋となっています。大隅国は蒲生、大水とあって伝馬はありません。薩摩国に入っても同じように、伝馬が市来、英祢、網津、田後駅に付いています。全国的にみると、大体豊後国

にあるように郡を中心に伝馬が付いていて、どうしようもない時に駅に伝馬が付くみたいです。

南九州の場合は駅というのがわりと政治的な意味があったのではないか。郡と対立するというか、同等のような位置にあって、それが南九州の歴史に、後の時代と大きく関係して来るのではないかという推測をしています。というのは、郡の仕事として旅行者に食料を給付することがありますけど、それも駅の方で行なっている場合があるのではないか。駅が旅行者に対して食料を給付するという形で財政的に独立しているのじゃないか、というような感じを持っています。それを調べているのですけど、まだよく判りません。

それと、先程の⑦。駅名の記載順は順序にしたがうとは限らないとありましたけど、大体順序にしたがっていると私は見ています。現在の地名と対照した場合に、そういうずれが出て来るのはその後のいろんな歴史的経過によるもので、そもそもは大体きちんと順序通りに書いてあるのではないか。そうでないと、いざ何か事件があった時にどう対処するかという時に、順番にしたがっていない部分があまりにも多いと、命令を伝える人たちが対策に困るという面もあるのです。わりときちんと書いてあるのではないかと思います。

それと、駅の分岐点についてはちょっと見方が必要だと思います。地図に表しましたけど、はっきりしないところがあります。肥後の一つのルートは大水、江田、それから阿蘇の方に抜けて豊後国に行く道。もう一つはずっと南に下って行って田之浦の手前で人吉の方へ出て行く道ですね。そして日向の方へ出て行く道です。肥後に球磨駅というのがあり、日向国に救麻駅ということがあります。それが道の曲(くま)：曲り道を示しているか、あるいは人吉の球磨に行く経路を示しているかだと思います。

もう一つは、ずっと下って行って佐敷から大隅

国府へ直接出る道が、大隅国府へ最短距離で出て行く道があるのではないかというような想像をしています。というのは仁宗という駅があり、それを使わないとどうにもならないという面があるということです。それと、どうしても最短距離というのは必要ではないか。その根拠は大宰府に向かう調や庸を運ぶ日程というのが延喜式にあります。薩摩国も大隅国も日向国も、往きが十二日で帰りが六日、と同じになっています。そういう意味からすると薩摩国・日向国とほぼ同じ時間で着くようなコースというのが考えられるのではないか、ということです。

もう一つは薩摩の方に抜ける道です。大隅と日向の間を結ぶ道は駅があんまり多いので、どうしても2コースになるのではないか、という気がしています。そのコースについては海岸寄りを通るか山寄りを通るかによって違うと思うのですけど、一応都城から通山を通って国分に出る道ですね。それがまず一つ必要ではないかということ。それから夷守駅と真所駅ということがあります。真所駅というのは一応あちらに付いていますけど、今の真幸に付いています。というのは、ちょっと距離的に遠いし、距離をみると駅の位置ではないからです。これで、一応終ります。

(質疑応答) 平田 今日配られた資料について質問があったら出して下さい。

納 ちょっとお尋ねします。一里は三百歩ですか。一步というのはどれくらいになるのですか。

平田 一步は六尺。ここに書いてあるとおりです。

納 六尺?

平田 はい。この一尺はですねーーー

納 六尺といえば、現在の六尺ですか?

平田 大体同じですが、天平尺は一尺が29.7cm. ですから現在の30.3cm. より短いわけです。

納 ちょっと短いですね。でも、ほとんど一緒とみてよいですね。

平田 ちょっと違いますけどね。

長谷川 0.98ですね。

平田 うん、それくらい。

長谷川 ほんの少しですね。

平田 しかし長距離になれば大分違って来ます。青柳さんが計算された三十里=16km. という数値、これは出雲国の例でしょうが、大隅国・薩摩国・日向国などの場合は大体駅と駅との距離が20km程度。前回の小園さんの説明では25kmということでした。まぁ20km前後で駅を探していくばよろしいと思うのです。

大隅国・薩摩国の駅について、この会でもここ一年ばかりの間に、花田さんが市来駅を説明され、その後小園さんが『長門本平家物語』をもとに止上から大隅大川原を経て都城(島津駅)に抜ける道をとりあげ、大隅大川原が大水駅という説を提起されたわけです。前回、青柳さんも薩摩国の駅路についての話をされましたので、これは徹底的に取り組まなきゃならんと思いました。

今まで薩摩国府・国分寺とか大隅国府・国分寺は大体つかまえてきました。それから多執国府についていろいろな説がありますが、検討を始めました。そうなって来ると、あとは薩摩国十三郡と大隅国八郡の郡衙をきちんとおさえなければならない仕事が残っている。郡衙(郡家)について今までのところ情報として判って来ているのは、薩摩郡衙は隈之城の西ノ平遺跡がそれに当たると発掘担当者の池畠氏が発表しています。それから最近の例では橋牟礼川遺跡が揖宿郡衙になるのではないかという説が出来ています。

先程配りました『長門平家物語』に出ている藤原成經・平康頼が帰る道:坊津から鹿籠、それから知覧・喜入と通って来た道がありますから、駅路で

ない道もある例としてこの史料は使えると思います。

それから今年はひょんなことで出水中央高校に加勢に行くことになりましたけれども、出水に行った意味は肥後国から薩摩国に入る道は必ず出水を通るはずだからということで、出水の事情を現地でよく見る必要があると思ったのも一つの理由です。まず着いた日、昼飯食いに出ました。そうしたら自分の影が道路と平行なんです。頭をあげたら真っ正面に鳥居が見えるのです。それでびっくりしました。その道路というのは南北に向いているわけですから。真っ正面に鳥居があるので、その神社を訪ねたわけです。それが箱崎八幡だったのです。その灯籠を調べておりましたら、この前新聞に出ました通り、ペリーの艦隊が浦賀にやって来た時、江戸警固にかけた出水の郷士たちが無事に帰還できたことに対する感謝の意味で灯籠を建てたものに出あったのです。

その辺を歩き回ると、政所(ぼごろ)という地名は出て来るし、馬溜(うまだり)という地名も出て来る。その南北道路を中心として山王、天神、春日、稻荷と、いろんな神社が囲んでいるのです。したがってあの辺に出水郡家があったに違いないと考えた次第です。それと、その地域の南の方に「市来」という小字があります。これが市来駅の対象地と云われていますから、西出水一帯に出水郡家とそれの伴なう市来駅があったとみられます。(市来駅についてはその後平成4年12月の鹿大史学会で異なる見解:否定的な見解を発表した)

それと、土地利用の色分けを現在進めています。2万5千分1図に色分けをしてみました。黄色は田圃です。ミドリのところは畑、オレンジ色は果樹園です。先程話した八幡様は、ここになります。出水高校前を東西に走る長い直線道路がありますが昔はずーっと松並木が続いていた参勤交替道路だったということです。この道は単に近世の道だけで

なく昔からの古道に違いないと考えます。この道が野田・阿久根・川内にどうつながるか、ということが今後の問題になります。

出水で聞いた話でまだ現物は見ていないのですが『西出水小学校百周年記念誌』に川内へ修学旅行に行行った思い出が書いてあるそうです。どういう道を通ったかというと、柴尾山に登って行くのです。そして藤川天神に降りて、東郷に出る。それから川内に行ったというのです。この道は地図をみればよく判ります。ちょっとこっちへ来て見て下さい。

それから、水俣に行くには出水からは二通りあります。タクシーの運転手にどっちが近いかと聞くと海岸の方: 加茂久利神社の方を通るのが近いと云います。山手には芭蕉越えという道があって、昔は湯出に出る間道として使われたものです。

(地図を見ながらの説明) 先程話をしたのはこの道です。出水麓を通り、石坂のところを通る。出水高校の前が、花立という地名。それから、上り立。これは「あがりたて」と読んでいますが、本来は「のぼりたて」だらうと思います。そして、柴引を経て野田に着きます。芭蕉越えは、この山道です。それから藤川天神を通る道というのが、これです。この道を通って、昔、川内に行ったというのです。ここに古道が一つあったということですね。

木場 今、道が出来よですな。  
平田 ここに? ああ、そうですか。それから参勤交替路は野田から天神を通ってこっちの方に出る。阿久根の方に出るこっちの道のようです。

それと、出水・阿久根の地図を見ているうちに思いつきまして、神社の印をずっとマークして行きました。そうしたら集中的に見られるわけですね、神社が。出水郡で集中的にみられるのが5か所であります。加茂久利神社周辺、いわゆる米之津に7~8ヶ所かたまって出て来ます。それから出水で出て来ます。その次、野田で出て来ます。もう一つは、

脇本・折口の所です。それと阿久根。このように神社がかたまっている所に昔の「郷」があったと考えられるわけです。そうすると、加紫久利神社一帯に借家郷が考えられるわけです。出水にかたまっているのが大家郷。これが出水郡家があった所です。

出水郡家のところに市来という地名がありますから出水郡家と市来駅は結びついているのだろうと思います。その次に神社のグループがあるのは野田ですが、これは山門郷ですね。中世の山門院になります。もう一つ勢度郷というのがあります。これは黒之瀬戸と長島だと考えられていますけれども、長島は元々肥後国ですから黒之瀬戸一帯が勢度郷と考えられます。そして国形郷というのが残りますが、これは阿久根を考えればよいわけです。

神社をグループで抑えていくことによって、郷の中心地というのが見当がつきます。駅もそうやって見つけていく必要があるだろうと思います。

出水の市来駅はどういう所に立地するかというと広瀬川と平良川の合流点になります。この合流点に近い所に出水郡家があり、市来駅があることになります。それから阿久根も山下という所あたりは川の合流点になっています。

郷の所在地・駅の所在地については、神社の分布を2万5千分1図を利用しながら求め、おおまかな見当をつけた上で1万分1図で小字を探していく。それから現地に行って遺物の散布状況を見たら案外つきとめられるのではないかと思います。そういうことを出水に行ってから2ヵ月の観察で気付いた次第です。

英福駅は、さっき云ったように阿久根市山下付近だろうと思います。網津駅は、網津がそのまま地名に残っています。まだ地図の上でも現地でも検討はしておりません。桜野駅は市比野でしょうね。それから田後駅というのは薩摩郡家に近い所を考えなければいけないだろうと思います。薩摩郡家は隈之城

にあるれいめい高校の裏山一帯ですから、あの辺で田後を探すとなると、そして川の合流点なんてことを考えると、向田あたりがやっぱり田後を探す場所ではないでしょうかね。川内の方々は、どのように見ておられますか。

木場 平佐に比定してあったですね。

平田 平佐ですか？

木場 しかし、あんまり国府に近いから間違いだろうということです。

平田 近くても構わないのではないですか。川を越えるわけですから。

木場 平佐でどうだろうかと云われて来ましたが、藤井先生が平佐じゃあんまり近すぎるということです田代あたりじゃなかろうかと云っておられます。

平田 田代(たじ)というのは、どこですか？

木場 横脇の田代です。

平田 横脇の？

木場 田代。今の、空港道路沿いなんですが。

平田 そうしたら桜野(市比野)駅とはどうなるのですか？

木場 市比野は間違いだということです。田代が田後の間違いじゃなかろうかということです。

平田 それでは蒲生へはどう出るわけですか？

木場 蒲生との間に、市野々という所がありますが、ちょうどそこを通っている。それでちょうど具合がいいのではないかということですが。田代にもちょうど駅のある所は馬頭観音さんがおいやった。太宰府歴史資料館の後藤さんという人と一緒に調べた時に、市野々にも田代にも探した場所に馬頭観音がありました。周辺を見ると川があり、水田とか水とか草とかが揃った場所でした。

平田 ああ。

木場 阿久根、市来は云われた通りだらうと思いますが、田後が問題です。

平田 まあ、田後は……。

木場 ふつうの本には、平佐と書いてある。

平田 平佐ですか？

木場 はい。

平田 いずれにしても、川内市内にあることは間違いないでしょうね。

木場 まあ、そうですね。田代が田後の音に近いのじゃないかということ。ちょうど昔の駅路に当る所ですかね。空港道路というのは駅路に沿って作られたようなものだという。あれは最短距離を通っています。

平田 ああ、そうですか。

木場 空港道路が出来る時に、大体の想像をした駅路のところを通っていると、そう云ったことを後藤先生は云われました。

平田 田代というのは、どこになりますか？この地図では。

木場 田代は此處。ここから市野々に抜ける。

平田 しかし、蒲生はここでしょう。空港道路はどう通っているのですか。

木場 空港道路からちょっと入ったところです。

平田 蒲生から新留崎(にいりとうが)を通って。

木場 そうそう、新留崎。

平田 新留崎を通って市野々に出る、この道だらうと思うのです。

木場 新留崎を通るのが一番の最短距離。

平田 百次(ひき)から、横脇、市比野を通って。

木場 百次は通らんですよ。

平田 百次は通らん？空港道路が通らんだけであって、これが自然じゃないかな。

木場 いや、それは山田の方を通っている。

平田 空港道路はこっちを通っている？

木場 今の空港道路が昔の駅路に一番近いのではないかと云われる。

平田 この道を通るのですか。昔の薩摩郡家がれいめい高校の付近ですからね。ここから真っ直ぐ

西の方に行けば薩摩国府。駅路と郡家がどうつながるのかな？

薩摩国の古道を考える場合、江戸時代の旅行記が参考になります。高山彦九郎や頼山陽も来ているし橋南溪の旅行記もあります。島津家久がのぼった時の旅行記もあります。江戸時代までは大体、川内から阿久根を通って、野田、出水。そして水俣に出る。これが薩摩街道ですね。

大隅国の道は大口から水俣に抜ける道ですよね。この道は西南之役の時、辺見十郎太の率いる薩軍がこの道のあちこちで大激戦をやっています。水俣の奥の深川ですか、仁主駅の比定地とされる所です。肥後国駅馬に、水俣の次に仁主というのがありますね。仁王木という地名が深川あたりに残っていて、そこだらうと云われています。(後記:仁主を人吉に比定することも考える必要がある)。

一般的には、佐敷、水俣、深川、久木野、大口へ抜けるルートというのが大隅道です。だから大水駅をこっちのルートに求めなければいけないのじゃないかと思うのだけど。それで今日は小園さんが見えていませんが、彼が提起した大隅国と日向国をつなぐ道は駅路でなくてもいいわけで、郡と郡を結ぶ伝路であってもいいわけです。大隅国と肥後国を結ぶルートは大口を通っていますから、大口か栗野あたりに大水駅がなければいけないと思います。大隅国から日向国に抜ける場合、真幸、夷守とつながってもいいわけです。むしろ、そっちの方が日向国府と結ぶ場合、直線道路になりはしないかな。

先程、鹿児島神宮のうしろに宮坂というのがあることを話しましたが、これが駅路になるのです。宮坂と蒲生と、どう結んだのかよく判りませんが、溝辺の空港道路に並行して石原三文字から横川・栗野そして大口に抜けるこの道が大隅国と肥後国を結ぶ最短距離になるわけです。日向国に抜けてもわりに近いし、肥後国に抜けても近い道になります。

だから大水駅は菱刈郡大水郷に求めるのが自然だと思います。

それから、もう一つ大事なことは、桑原郡に八つの郷がありますが、その中に稻積郷というのがあります。ここに稻積城が置かれたと考えられます。また、稻積城に和氣清麻呂が流されて来たとも考えられます。これは溝辺の高屋山陵近辺に求めるべきではないかとも考えます。高屋山陵近辺というのは大隅国府にもつながる重要なポイントになるし、薩摩国にもつながるポイントの位置にある。肥後国に行く道のポイントにもなるし日向国に行く道のポイントにもなる。そう云った所に稻積城がなきやおかしいということです。

先程の宮坂をのぼって行ったら、空港のそばの高屋山陵あたりにたどり着いて、さらに石原三文字に着きます。石原三文字から蒲生の方に下って行けば、大隅国から薩摩国へつながる道になるだろうと思います。駅としては記録されていないけれども、稻積城という重要な中繼地があったのじゃないかなと思います。そこでつなげば、ちょうどよい距離になります。大隅国府とは十数キメートルで、ちょっと近いですけど。まあ、どう考へても大水駅は伊佐盆地あたりに考えなきや仁主・水俣とつながらないわけです。

青柳 今の説明への反論ですが、一つは大水駅をどこに求めるかという問題。大水駅はやっぱり国分になればおかしいと思うのです。というのは、いくら国府に駅がなくてもいいと云ってもあんまり離れているといけないし、それから都城と国分を結ぶ道は通山を通ると思うのです。この道は大隅半島側の大隅郡とか肝属郡の郡家とつながる、それらの郡家のわりと近い所を通るのじゃないか、と思うのです。そういう伝路と合併した形で、どうしても道が一つあるのではないかと思うわけです。蒲生駅と通山村近くにある駅とを結んだ場合、その間に一つ駅

がないと陸路では結ばれないということです。蒲生駅との間が40キロ程度になってしまふということ、必ず国分平野にあると思うのです。

平田 いや、国府にもあって、それがイクオール大水と限る必要はないのじゃないか。

青柳 だけど、実際は二つしか書いてないわけでしょう。蒲生と大水しか。蒲生駅を当てたら、その蒲生駅が今度は足かせとなって、駅が三つ必要になって来るわけです。大水駅を他の場所に持っていくと。僕も困っているのですが。

平田 ああ、そういうことか。

青柳 はい、どうしても。太宰府と大隅国府は、薩摩国とほぼ同じくらいの距離で結べるのですから地形的には水俣のところから東に行くのも西に行くのも大体同じくらいの距離ですから、同じくらいの距離で大隅国府と太宰府の間も、薩摩国府と太宰府の間も結ばれていたと考えてもいいのじゃないかと思うのです。その道は、仁主から南下して祇答院あたりに一応「高来駅」を置いて、それから蒲生に降りて行くより仕方がないなと思ったわけです。プリントに書いた経路はその考えに立ったものです。

平田 それは質問しようと思っていたのだけど、高来駅を仁主駅と蒲生駅の間に置いていますが、これはどういうことですか。

青柳 場所的には、あそこじゃないかなと思うのです。仮屋原という所があるでしょう。薩摩町じゃなくて祇答院町になるかな、宮之城の方から薩摩永野に行く道の中間ぐらいの所にあります。湯田のちょっと南の方になりますけど。水俣から蒲生の方へ抜けて行く道がわりに真っ直ぐ走りますから、その辺に当てたらいいんじゃないかと思ったのですけど。

平田 蒲生から？

青柳 ともかく蒲生から山を越えて行ってこの辺になります。この辺から抜けて行ってもいいのじゃ

ないか。あの辺は地形的に高いけれどもわりに平坦ですから、なんとか通れるのじゃないかと思ったのです。

平田 蒲生から北上して水俣へ抜ける場合でも大口を通った方が近いのじゃないかな。現在でも蒲生から北へのぼって塗を通って大口へ抜ける道があります。大口から水俣へと考えたら、このルートの方がベター。そのルートも考えられないことはないのだけれどね。

青柳 僕が云いたいのは、要するに大水駅というのは国分に置いた方がいいのじゃないかということです。無理せずに。

藤浪 初歩的な質問ですが、駅というのは国府と国府との間に置くわけでしょう。そうじゃないのですか。

青柳 一応、駅を三十里ごとに置くと思うのです。平田 国府と駅と合致させたのが本来だけど、後には別にさせているわけです。だから国衙に駅がないものもあるわけです。国衙イクオール駅と考えると足らなくなるから、国府には当然あったと思ってもいいわけです。

藤浪 どこを起点とするか。もし大隅国府から薩摩国を向いた点だとすれば、大水駅を国府の向うに置くのはちょっと変ですね。薩摩国府へ向かってみると——。

平田 薩摩国府とつなぐのは、大隅国府と蒲生と樺野、田後、薩摩国府があれば充分なんだよね。

藤浪 国分から先だとすると？

平田 先だとすると、前回の小園説のように大隅大川原に島津駅との間の駅を置かなければならなくなり、それが大水駅という理論になるわけですね。水俣とつなぐのであったら、ちょっと遠いけれども国分の次は大口あたりに置いて、そして水俣につなぐか、仁主につないで佐敷に出るルートを考えるかだと思います。

池田 仁主というのは人吉という意味ですか。平田 仁王丸という所が有力な比定地です。人吉にもって行った、もう一つ駅が必要になります。八代までちょっと長いのじゃないかな。（後記：仁主＝人吉説も検討の要あり）

青柳 仁王木という地名が地図に載っていました。平田 仁王木という所か。

青柳 二十年ぐらい前の古い地図に仁王木とありました。

平田 水俣の奥だろう。恐らくそこだろうと思うけど。

池田 水俣と大口の間は、頬山陽なんかも通っていますかね。

平田 通ってるでしょうね。

池田 あそこに駅があるんですよ。

平田 ああ、そうですか。それと大水を大隅国府だとすればね、高来は薩摩国府にならなきゃならないことになる。あそこは高城郡衙の所在地だからね。

青柳 英祢駅をどこに置くかということですね。

平田 英祢駅は阿久根市の山下だろう。

青柳 さっき云われたあれはどうですか。東郷の北の天神説は。北の天神に当てる説は。

平田 藤川天神にね？

青柳 藤川天神からですね、出水の方に三里半で抜けられるって出ていたですよ、何かに。どういうコースを通ったか知らないけど。

平田 要するに、真っ直ぐ山を行く道がある。

青柳 はい、ありますよ。そうしたら網津を川内に当てる、田後を市来あたりに当てる——。

池田 網津は、網津という地名が昔からあるよ。

平田 網津は網津。しかし網津から阿久根は海岸を行かなきゃいかんわけですね。

池田 そうです。海岸沿いで——。

青柳 あのあたりの地形をいうと、海岸を通った

からと云って楽に行けるとは限らなくて反って道が

けわしい。山の方を越えた方がいいのじゃないかなという感じです。英祢駅が藤川天神の所にあるというのを追求して行っても面白いなと思ったわけです。飽多郷というのが高城郡にありますからそれと英祢駅と結びつかないかなと思うのです。

平田 ああ、なるほどね。

青柳 そうしたら距離的に少し楽になるから南の方を通るという説にだんだん近くなっています。

平田 しかし飽多郷というのがどこにあるのか判らない。一説は、あの辺に役田(やだ)という地名があるので、それに結びつけられていますけどね。英祢駅は莫祢院があるから動かんでしょうね。

木場 高来駅というのが一番最後にあるけど、必ずしもその順序じゃないでしょう。

平田 ああ、並んでいる順序ですね。

木場 これは高城(き)のことじゃないかと思うのですがね。

青柳 大体99%は順序通りになっていると思います。例えば、芭蕉の奥の細道は出羽に出る古代の道で、中山道ががずっとあっちまで行くんですね。奥羽の方まで。古代のその道を芭蕉が奥の細道で、ずっと通っています。昨夜それにしたがって古代の駅伝路を見て行ったら、順序通りで理解出来ました。他の地域でもそうだったし、さっき眺めた出雲国でも一応順番通りになっていたし、順路どおりに見ていくのがいいと思うんですけど。それがひっくり返ったりするのは、時代が変って歴史的な事情でひっくり返っているのじゃないかと思うんですけどひっくり返っている例としては播磨国で須磨駅と芦屋駅がひっくり返っていますね。そういうこともあるけど、それは後の時代に駅が移転したとか、政治的な事情とかで入れ替ることがあるんじゃないかなと思います。大抵は順序通りに見ていくのがいいと思います。

平田 うーん、でもね。

青柳 高来と高城を何故結ぶのかなと僕は思うのです。「高」という地名はどこにでもあるし、何故結びつかねばならないのか、判らないのです。

平田 ああ、高来駅のこと。

青柳 「タカ」という地名はどこにでもあるでしょう。「ク」のところも「城」でなくて「来」が書いてあるし、何故結びつくのかなと思うのです。結びつける必要はないでしょう。網津駅とか田後駅とかが近くにあるのだから。

木場 網津と田後を直接結んだ場合、遠すぎるのじゃないですか。その順序通り行けば。

青柳 今までの説明でも網津と川内の中はそんなに遠くないし、田後と川内の中も近すぎて大変だと云ってわざわざ伸ばすくらいだから、高来を高城に結びつける必要はないと思います。

平田 ああ、なるほどね。しかし高来は今まで高城に比定されている。これについては疑問は出ていなかった。ここに薩摩国府もあったので。

青柳 検討してみて、おかしいなと思ったのです。

池田 網津と高来とは、そんなに距離はないですね。

平田 うーん、どれくらいだろうか。

池田 まあ、せいぜい2km。

平田 10kmは超えますよ。川内川沿いに行くのと山を超えるのとは、方向が違いますけど。

池田 それはそうですけど。現在の網津を考えた場合ですね。

平田 うーん、網津は。

木場 網津というのは今の佐山トンネル付近。まだちょっと向うの方だと思うけど。

池田 うん、あの村近。

木場 佐山トンネル付近に、何か関係した地名があるはずですが。

青柳 佐山トンネルというのどこですか？

木場 国道3号線にあるトンネル。

平田 薩摩国の駅路の場合、この高来の位置を延喜式の順序通りに考えて櫛野の次としたら、櫛野の次はどっちの方に行くの？

青柳 「次」というのは蒲生の間に。

木場 そういう地名はちょっと見当たらんです。

青柳 まぁ、「タカ」という地名は。

平田 小字を探せばいくらでも出て来るかも知れないけど、順番から考えたら、これは？

青柳 僕が考えるのは1コースでなく2コースあって、一つは日向国から太宰府に向う道を結んでもいいと思います。ともかく一つ使えばいいな、と思います。大口の辺に薩摩国を少し認めて、そこに置いても構わないと思うのです。

平田 奈良時代はあすこは菱刈郡で、大隅国だからね。

青柳 もうちょっと駅伝の基礎的な事情というか、国府に駅は必要か必要でないのかというような勉強がまだ足りないような気がしてたんです。薩摩国の国府のそばに駅があるのに、何故大隅国(の)の側に駅は必要でないのか。それを何故考えないのかというのが僕の疑問です。今までの考え方では大隅国(の)の国府を一応駅の代りに考えていたところがありましたでしょう。それは『鹿児島県史』以来ありましたので。

平田 3.にも書いてあるように、本来国府にも駅があった、と。国府の人々の負担が重くなるので、これを離すようになったと云われているわけです。大隅国府にも薩摩国府にも駅があったとみなしてもいいのじゃないかな。大隅国府の場合は「馬草田」という地名が残っているし、薩摩国府の場合は「日駒」という地名が残っています。しかも薩摩国府の所から高城郡衙もあったと思われる遺物も出ています。「高木」と書いた墨書き土器が出土しています。だから高来駅は川内高校付近にあったと解釈出来るわけですよね。それで、川を隔てて田後駅。だから

近くてもいいのじゃないかな。あの時代、川内川を渡るのは大変だったと思うよ。だからね、薩摩国の高来駅は国府と同じ場所だったとみてもいいと思う。

青柳 先程の地図で北の方を見ると、大分あたりの事情がよく判らないのですけど、長崎の方を見ると、あのあたりは国府はないのに一応駅が置かれて、駅路があるわけですね。唐津から長崎の近くに出てそれから島原に出る。それから舟で肥後の方向へ渡る道と、有明海の北部を筑前に戻る道とがあります。一応九州の場合はすべての郡家に行きわたるように駅路あったんじゃないかなという気がするのです。地図を描いて確かめられたら、そういう結論に誰でもなれると思うのです。とくに北九州の場合については、そのようなことに気付かれるはずです。

一応、全部の郡家にゆきわたるような形で駅路を作ったのじゃないか。大宰府というものが九州にあって、それぞれの国府と補完し合う形で九州の行政を行なったから、どうしてもそういう形になって行くのじゃないかなと見た時に、薩摩国・大隅国(の)の駅もやっぱり郡家をカバーした方がいいのじゃないかなという気がしたわけです。それが南の方を通るという説で、僕は一時あきらめていたのですけど、市来・郡山を通るという考え方には、大体、100%あきらめていたのですけど。調べてみたらそういう神社があるので、もう1回勉強し直そうと思っているのです。

平田 うーん、だからね。市来とか日置郡とか川辺郡とかへ連絡する郡伝路という記録にない道はあったと解釈していいと思うんだよ。

青柳 それが駅路であったとみたいのですけど。

平田 ふーん。青柳 それで最近思ったのですけど、薩摩国十三郡の全部に郡家があったのかどうかというのも非常に気になったのですけど。その辺はどうでしょうか。もし一つ一つ作っていったら財政的な負担は誰が

するのかということも問題になると思うのです。隼人十一郡と云われていますが、郡家は三つ四つじゃないかなと思うのですけど。

平田 それは、どうだろう。一郡一郷というのは隼人の地の特殊性によるものだろうから、一郷でも郡を創らせたとみなきゃいけないのじゃないかな。

青柳 そうですか。日置郡というのがあるけど、すべて「院」になっていて郡の痕もないのですよ。その辺の事情がやっぱりあると思うのですけど。

平田 「院」というのは「郡」に近い存在だからね。もっと特殊ですよ。そして「院」であった中世は、例えば蒲生郡司だとか加治木郡司と名乗るわけだから、郷よりもちょっとレベルが高いのじゃないかな。

青柳 ともかく隼人十一郡のすべてに郡家があったかどうかが考える必要があると思ったのですけど。

平田 それはご自由ですけど。

青柳 ご自由に、というあれですか。

平田 うん。それから、もう一つ。今後、駅路を探して行く場合に大事なこと。地名を研究する場合にも関係があるのですが、立石とか立岩とか馬立とかいう地名。花立、ノボリ立、柴立など。これらも古代の道と関係がありそうです。そこで交通の安全を祈った、そういう場所ですね。そういう「立」地名は交通路と関係があるとみなければいけない。

それから野田に十三仏という地名があります。溝辺にも十三塚原がありますね。十三塚とか十三仏も古道に関係があるのではないか。駅路のそばで祀られたことも考えられる。だからそういう地名は大事にしていかなければならない。それから道祖神や塞之神ですね。塞之神は才之神とも云い、鹿児島では申を指しますから、神社の中では日吉神社・山王の配置を追求する必要があると思います。これは古い道をつかまえる手っ取り早い手段だと思うのです。一昨日、出水でも山王社と出会いました。これ

がさっき云った古代の道路とみられる道。坂を降りた所にちゃんと山王神社が置かれています。野田には行っていませんが、阿久根の方に行くところに山王神社があるのではないですか。山王神社の分布を地図の上に落として行くという作業も必要だろと思います。

それから近世の一里塚。近世と中世と古代の道路はそうすれちゃいないだろうから、一里塚をマークすることも必要でしょう。鹿児島県の「早馬」は、牛馬の神様として変ってしまっているけれども本来は「駿馬」の神様として祀った所もあるだろうから「ハヤマ（早馬・葉山・端山）」という地名もおさえる必要があるのではないか。そういう作業をもう一度やり直して眺める必要があると思います。

そうしたら、郡家の存在もおさえやすくなるだろうし、郡家のまわりには八つか十ばかりの神社が配置してありますからね。天神、住吉、八幡とかね、まわりにいろんな神社がありますからね。そういうのをセットでつかまえる作業というのも大事だろうと思います。

納 種子島にこういうのがあります。西之表から海岸沿いに南におりて行ってちょうど真ん中へんに浜津脇という所があります。今の道路は海岸線を走っていますが、旧道は西之表から島の真ん中を通って行って浜津脇で海岸に出ます。旧道沿いの集落が皆番号が付いていたのです。一番から二十番まで。浜津脇の上方に万田(まば)という集落がありますが、ここが十六番というのです。今話に出て来た数字とか番号をたどっていけば、何か出来やせんかなというのを考えたのですが。

平田 ああ、道路番号ですね。

納 かなり面白いのがありますね。あれはどうして付けたのか。土地の人に云わすれば、もと郡役所があった所から一里ずつ数えたという。そう云えば鹿屋の町に、笠野原のところにですが一里山とい

のがありますよ。それから古江の方に行ったところに一里山というのがあるのですね。両方とも郡役所から一里ずつあるんだというふうに聞きました。十三仏も十三塚も意図的な名前の付け方ですね。東北地方に行けば一戸・二戸・三戸・四戸・五戸・六戸・七戸・八戸・九戸までありますね。番号というのは面白いなと思っています。

隈平 二月田とか六月田とかは？

平田 あれは神社の祭田でしょうけど。

青柳さん駅の想定地で馬込とか馬立とか、そんな地名を探す必要があるね。

青柳 そうですね。前回、早馬元という地名を出しましたけど、郡山の周辺で3ヵ所あって一つにしほるのは難しいというか、まぁ特効薬はないでしょうね。こういう地名がある所は駅があったというわけにはいかないです。

平田 駅家という地名が残っていれば、そのまましばりだらうけど。

青柳 あったかも知れないけど、どういうふうに変化してどういう使い方をしているかという問題ですね。駅家という地名はあったでしょうから。それがどういう地名に化けてるかということだと思いますけど。

平田 その辺には馬に関する地名というのが集中的にあるはずだよね。馬渡という地名なども、川を渡った場所でしょうからね。

納 馬ですね。鹿児島に中馬(ちゅうま)という姓がありますね、苗字が。中馬という字を書いた土地の名前はないのですか？

平田 小字ですか？

納 小字は？

平田 あるかも知れませんね。気が付いていませんが。

納 というのは、人の苗字には土地の名前が案外よく付くものですから、中馬という姓があるから、

どこか国分方面にはなかもんだろうかと、あの辺の人たちに聞いてみるんですけど、知らないという人が多いですね。

平田 中馬は、国分と東郷に多い。

納 東郷といえば、薩摩郡の東郷？

平田 ええ、そうです。何か他にありませんか？

松田 加治木にも市野があります。藤井先生の説では、市野々説。新留崎の他に、狼火をあげる「とぶひが岡」が昔あったというのを藤井先生が調べておられます。蒲生にも山奥に「とぶひが岡」という地名があって、そこが昔狼火で連絡していたのだということを聞いたことがあるのですが。加治木にも、加治木にないもかいも結び付けたいのですが、加治木にも「市野」という地名があるのですよ。

平田 ああ、市野がね。

松田 市野からのぼって行くと溝辺の高屋山陵につながりますがーー。

平田 そして蒲生ともつながるのでしょうか。あれも古道じゃないかな。とにかく、鹿児島神宮の裏の宮坂をよじ登って女子大の所に出る道。真っ直ぐ西に台地を横切る道も考えられんことはないけど、一応北にのぼってから南に蒲生の方に降りて来るのが自然だと思うけどね。高屋山陵あたりは曲者だと思うよ。

青柳 高屋山陵あたりには、ついこの前、行ってみました。

平田 何かあった？

青柳 溝辺からあがって行って野坂という所までずっと山の方を登って行きました。それから薩摩永野に越えるのは少し大変なような感じでした。

平田 薩摩永野は、あそこからどう出るの？

青柳 あそこは田中尾というのですか。金山峠の南の方です。

松田 あそこは道がいいもんな。

青柳 いいんですよ。登って行くのはいい。とも

かく、少しずつ登って行く感じで。それから先は  
判らないけど。

平田 ふーん。

青柳 山を越えるのが簡単なら、あそこはいい道  
です。

平田 山を越えて行く方が直線的で、肥後の方に  
抜け易いからね。

池田 昔の交通路は陸路だけで、海路は考えられ  
ないですか？

平田 当然海路も考えられます。

池田 ずっと昔から海路があるわけですね。

平田 はい。式の古さぬ子。えすまひあゆの  
池田 むしろ舟の方が楽かも知れん。山里一子

平田 佐敷・水俣・米之津・阿久根・西方・網津  
それから市来。ずっと舟で行けば楽ですね。三十

池田 これらは海路ですね。おせき式の東

平田 海路の記事がないから判らんのですね。

池田 昔はそれに耐える舟が出来ておっただろ  
から、舟の方が楽だったかも知れん。田平二 平野

平田 今日はあれやこれやと議論しましたが、ブ  
ラスになったことが多いのじゃないかと思います。

今日はこれで終りにしましょう。

多田 そひら元祖早。回前。ゆきヶ子テ 嘴音

コトアセのハセキ井伊の山越。おせき式の出  
ケハセが豪傑神木。ゆきヶ子ハシメのる君

コトアセの山越。ゆきヶ子ハシメのる君。ゆきヶ  
子ハシメの山越。ゆきヶ子ハシメのる君。ゆきヶ

子ハシメの山越。ゆきヶ子ハシメのる君。田平

。おせき式の山越。ゆきヶ子ハシメのる君。田平

。ゆきヶ子ハシメの山越。ゆきヶ子ハシメのる君。田平

。ゆきヶ子ハシメの山越。ゆきヶ子ハシメのる君。田平

。ゆきヶ子ハシメの山越。ゆきヶ子ハシメのる君。田平

。ゆきヶ子ハシメの山越。ゆきヶ子ハシメのる君。田平

。ゆきヶ子ハシメの山越。ゆきヶ子ハシメのる君。田平

。ゆきヶ子ハシメの山越。ゆきヶ子ハシメのる君。田平

。ゆきヶ子ハシメの山越。ゆきヶ子ハシメのる君。田平

## 大隅国・薩摩国の駅路と伝路

### I 西海道の駅馬と伝馬

別添、延喜式卷二十八、兵部省のコヒ。一

### II. ① 「日本後紀」卷十一 延暦廿三年三月庚子(廿五日)の条

「庚子 大宰府言 大隅国栗原郡蒲生駅 与薩摩国薩摩郡  
田尻駅 相去遠遠 遠送艱苦 伏望置駅於薩摩郡  
桜野村 以息民苦 許之」

### ② 天承二年(1132)の八幡正宮牒(石清水文書)

「当宮御ノ室殿 丑寅方 行三町許 於往古大路宮坂裏  
頭現八幡御名二字御石躰式基 紿奇持」

### ③ 長門本 平家物語卷四 記載の俊寛配流路

「-----鳥津の庄-----夏影、とかみ、あかさかといふ所を  
打過て、大隅の国けしきの森につき給ひ、-----正八幡宮  
の御あせりをよそから拝み奉り ----- さつまがた  
とは惣名也、とかいは十二の島をれば、くち五島は日本  
へ隨へり、おく七しまはいまた我朝に従はずといへり、  
白石、あこしき くろ島、いわうが島、あせ納、あせ波、  
やくの島とて、あらぶ、あきなは、きかいが島といへり、  
くち五島の内、少将をば三のとまりの北 いわうが島  
に捨て置く 康頼をばあこしきの島、しゆんくわんをば  
白石が島にと捨置ける -----」

(卷五)「さつまがた、房の泊りといふ所より、鹿児島、逢の湊、  
木入津、向島とも押過ぎて、鳩脇八幡崎にそぞ着き給ひ。  
それより取りあがりて、宮中の馬場執印清道と申がむと  
よどせられたり -----」

### III. 木下良「古代交通史研究上の諸問題」より抜粋

(1) 駅制：律令国家が新たに採用した中央集権的な交通制度  
伝制：地方豪族固有の交通制度を継承・再編成したもので、すべての  
郡に伝馬が置かれている。

駅馬は駅家、伝馬は郡家におかれ。

(2) 駅路 10m以上の道幅 駅馬のみが通る。

駅伝路 駅馬と伝馬が通る。

郡伝路 5~6m程度 伝馬だけが通る。

(3) 本州は国府にも駅家が置かれた。(負担軽減の意で別に  
置かれようはず)。郡家と駅家は近接した例が多い。

(4) 古代の道路は、渓谷を避けて峠路を通る。

軍事的意味——挾撃を避けるため、見通しの利く高所を  
通り、10m以上の道幅の駅路は、軍用道路であった。

(5) 幅10mの大路は奈良時代で消滅し、平安時代には、疎か  
ない。古代の駅路は、現代の高速自動車道と路線を  
同じくす例がみられる。(古代的事象の現代的回帰)。

(6) 駅館は「朱」塗り、白壁の建物。瓦葺建築もみた。

(7) 駅名の記載順は順路に従うとは限らない。

(8) 駅路関係地名——マコメ、立石、車路 etc.



平成四年六月七日

## 出雲国の駅伝路

鹿児島地名研究会 青柳俊二

「風土記」吉野裕説

東洋文庫一四五 平凡社

伯耆国

出雲國風土記によって、天平時代の出雲国の

駅路の里程を知ることができた。延喜式(兵部省)には、

「出雲國駅馬 野城、黒田、宍道、狭結 各五疋足

と記されている。(伝馬はない)

出雲國風土記は、「黒田の駅は郡役所と

同處である」と記している。

(狭結駅についても同様。)

能美郡は風土記ではなく、後の世に意宇郡から分かれたものと思われるが、郡役所はやはり駅と同じところにあつたのではないか。

⑤三〇里は何キロメートルかについて。

駅は三〇里ごとに置くよりになっていた。出雲国内の六駅の間の距離を平均すると約三〇里になり基準と一致する。

「三〇里」のキロメートル換算については、

本によて、一六七m、二〇km、二五km

とさちで迷う。

一步は六尺(一・七八メートル)

一里は三〇〇歩(五三四・五メートル) \*

(三〇里は約一六・〇メートル)

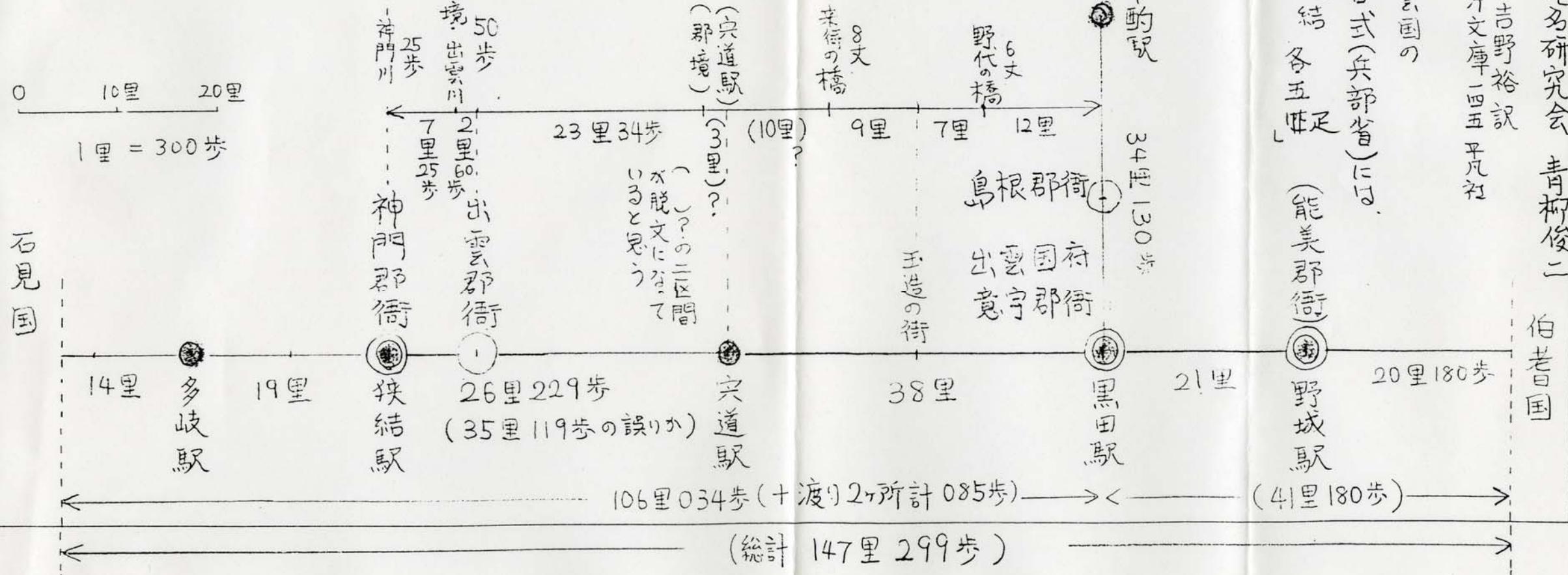
右の説によて一四七里二九九歩を換算すると

約七九・一キロメートル

山陰本線の駅間キロ程から、出雲國

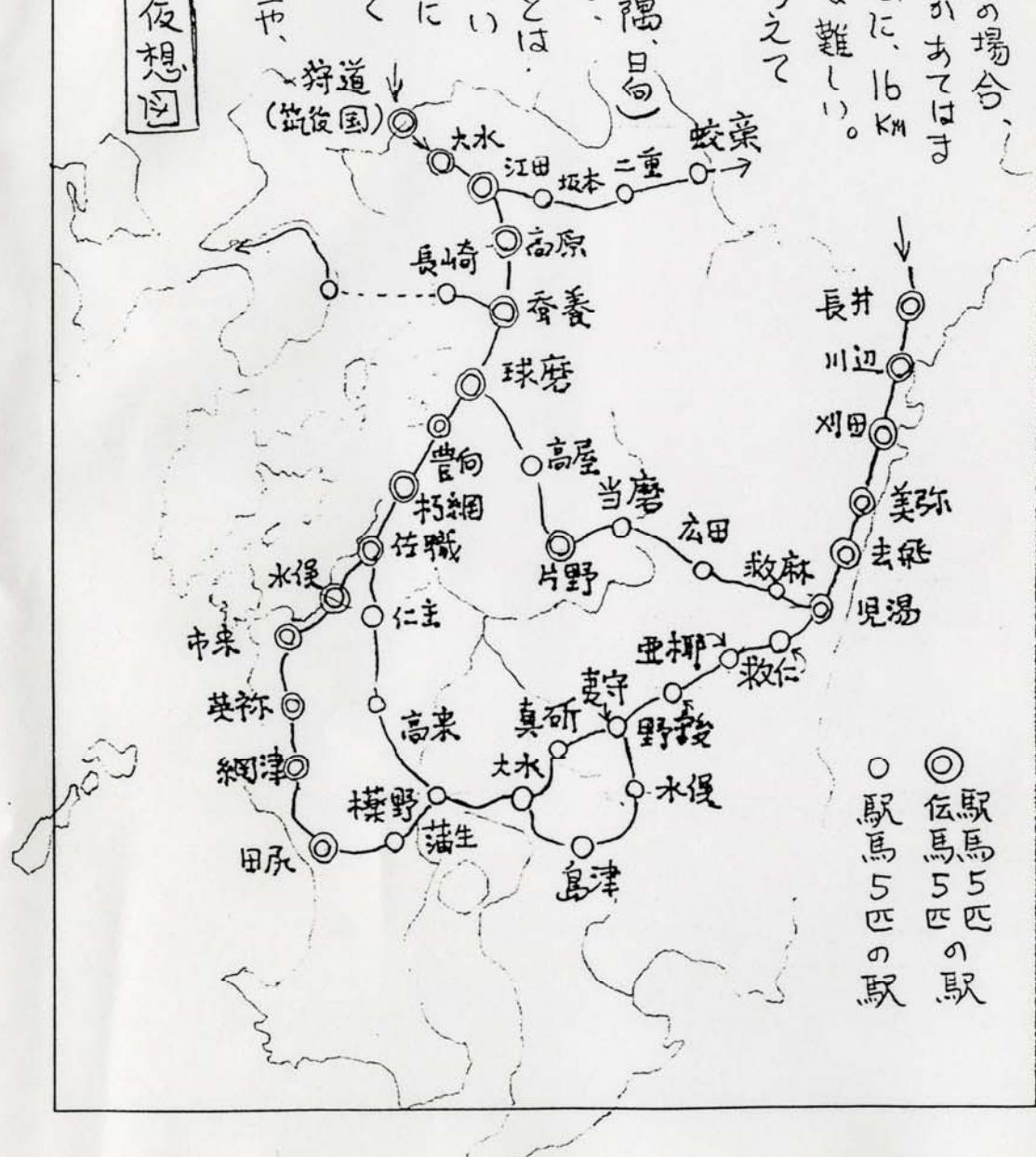
内の山陰本線の延長を推測すると、

約八〇・五キロメートルになった。



このことは、<sup>下院</sup>の発生  
島津庄寄郡<sup>よりごおり</sup>の成立  
に關係があるのかも  
しれない。

夜想

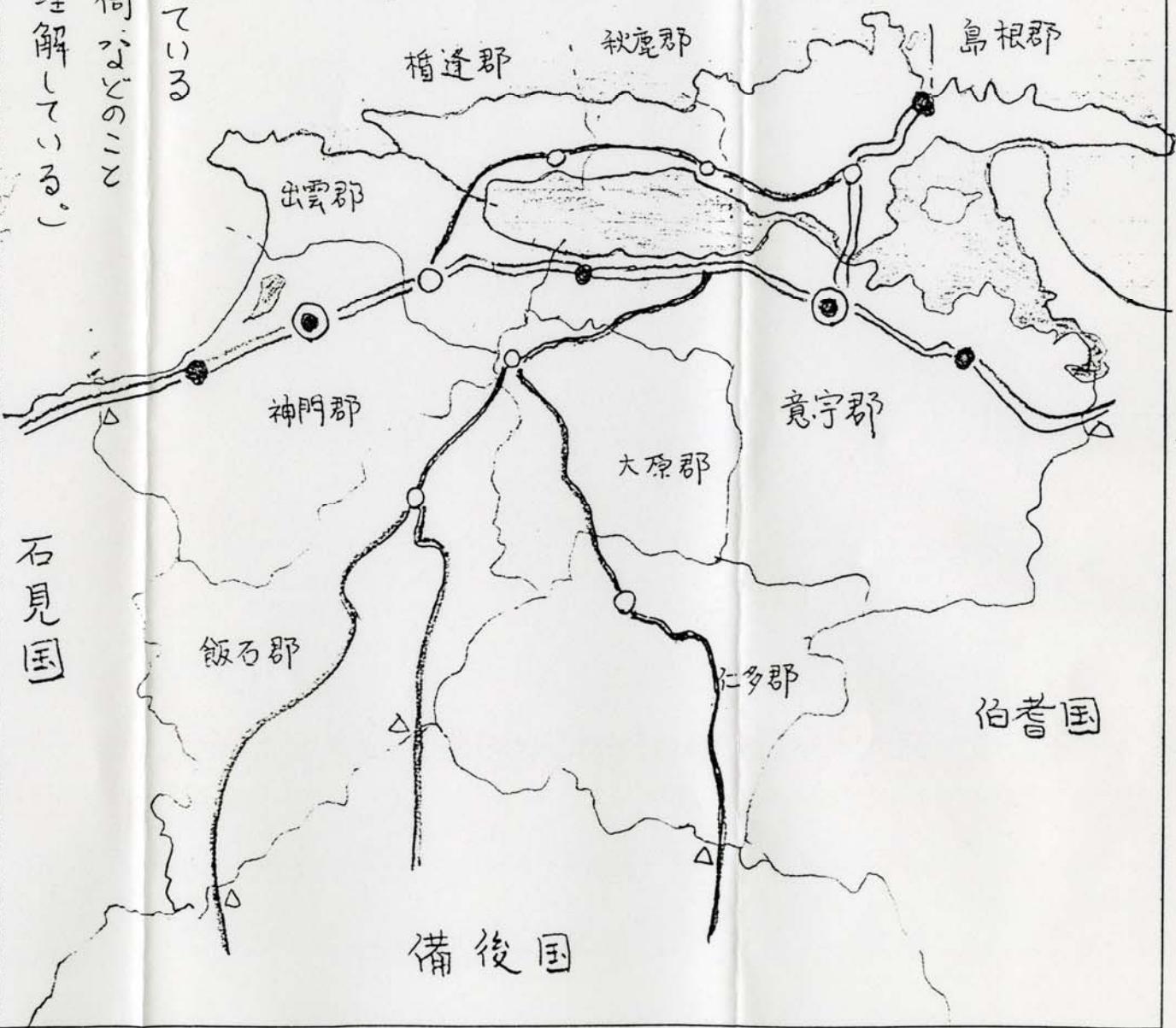


(一枚より続き) 出雲国の場合、  
三〇里=16km 説がなんとかあてはま  
りそつだが、南九州地域に、16km  
を厳密に適用するのは難しい。  
20km 程度を基準に考えて  
よいのではないか。

(駅伝と並称されている  
いわゆる伝とは、郡衙などのこと  
であると、広い意味で理解している。)

駅伝路

- △ 関所  
にある 駅
- 里程が表示されて  
いる道（伝路）



# 地名研究会報

第38号

平成5年9月5日

鹿児島地名研究会

I. 第38回例会 平成4年9月6日 於教職員互助組合会館和室

(出席者) 青柳俊二・池田信夫・市来亦久・江之口汎生・大田照夫・小川亥三郎・納栄蔵・郡山政雄・小原親英・花園正志・浜崎盛雄・肥後芳久・平田信芳・松浪由良・山口静也

II. 设藩名勝考読会 P.125 ~P.129 (計15名)

(問題となった地名および事項) 子亥神・清音と濁音(くねら・くわら、じんしゃ・じんじや)・八幡・再び神社

## 子亥神

平田 岩川の投谷八幡。これはどこですか。大谷あたりのあるのですか。先程読みなかつた子亥神。どなたかご存知ないですか。

花園 『神々の系図』という本を読みましたが、出ていませんでした。

納 去年、国分から隼人に行きましたね。止上神社の近くに「マナイタダ」という所に、高い塔がありましたね。

平田 隼人塚です。

納 あそこあたりの狩獵をしていた人たちが正月に獲物をこしらえてあそこにあげよつた、と。そして年一回、子と---

平田 亥です。

納 子亥というのは、子は、あれは何月になりますか。寅が正月、寅の前は何か、子・丑。ああ十一月か。十一月・十二月になりますね。子・丑・寅で行けば。そうならんですか。亥が十一月で、子が十二月。寅が確か---

平田 子が正月、寅が三月ですよ、子・丑・寅でいけば。

納 そうはいかんのですよ。えーと、五月がね。午が五月ですからね、逆につもってくれば。

平田 午が五月?

納 端午の節句の午ですね。

平田 ははあ。

納 あれは、五になるのですよ、五月に。逆につもってくればですね。子が確か、丑が十二月か。書いてみるにゃ判らん。

平田 寅が一月か。

納 これは季節の移り変りのことじゃないですかね。子と亥というのは、ちょうど秋から冬に変る時期ですから。何か季節に関係があるんじゃないですか。子の月というのは十一月で、これは季節で云えば冬のちょうど真ん中。そのさかんな時期になりますね。季節の移り変りを掌る神様じゃないでしょうか、これは。

平田 ああ、そうですか。

納 早く春を迎えるように、お祈りをするためのお祭りじゃないでしょうかね、これは。

平田 江戸時代は常識的な祭りだったのでしうが、消滅してしまったのでしょうかね。

納 陰陽思想から來ているものですね。

平田 恐らくそんなことでしょう。

清音と濁音: (くねら・くわら、じんしゃ・じんじや)

浜崎 先程、桑原郡というのが出て来ましたが、古訓の中で清音と濁音とはどんなふうに当てたものだろうか。「くわはら」か「くわばら」か。というのは、揖宿(いはた)が和名抄には以夫須岐(い夫須岐)と当

ててありますね。あれは「いふすき」と仮名を付けたものか、「いぶすき」と付けたものか、その辺のところを、桑原と関連して清音・濁音の関係を教えて頂けませんか。

小川 古文書は「いふすき」、清音じゃないですか。

浜崎 「いふすき」。鹿児島も「かこしま」？

小川 後世、濁音化して「いぶすき」になるわけでしょうね。大体、日本語は清音と濁音がはっきりしない。非常に混同して、どうもはっきりしない。どっちが清音でどっちが濁音なのか、つまりルーズですね、清音と濁音の区別が。

浜崎 ああ、そうですか。私どもは教育勅語というものを習ったのですが、これも「朕惟フニ我カ皇祖皇祖」と濁点を振ってないのですよ。どういうふうにして濁音には付いたり消えたりしたものか。

納 漢字が日本に入って来てからの現象じゃないのですか。

浜崎 もともとは清音で、それが濁っていった？

納 古事記、それから日本書紀ですか、あれが出来る頃までは濁音というはないらしいですね。仏教伝来以後、いろんな漢字が入って来て、その時に濁音が入って来たというのを、何の本でしたか、見ました。えーと、あれは金田一京助の『日本語の変遷』ですか。それにですね、確かに書いてありました。それから現在でも朝鮮の場合は、ハングル文字には濁音がありません。清音だけなんです。朝鮮語の場合、一番最初に出て来る音は絶対的に清音なんです。後にして来た場合はどういうふうになるのか判りませんが、音の加減によって濁音が入って来るのです。例えば金大中。キム=デ=ジュンというのですが、ハングル文字で書けば「デ」という濁音ではないです。「テ」と書いているんですね。前後の関係で「デ」になったり「テ」になったりするんじゃないですかね。

浜崎 もともと日本語は清音であったということですか。

納 はい。『日本語の変遷』にはそのように書いてありました。

小川 古代の日本語は、語頭に濁音はないですよ

浜崎 何ですか？

小川 言葉の頭。

平田 言葉の一番最初。

小川 語頭に濁音は来ないというのが鉄則ですね

納 ラ行音も来ないです。

小川 ラ行音も来んですよ。語頭にも濁音が来るようになったのは、今おっしゃったように、漢字が伝わってからでしょうね。

浜崎 ただ常識的に考えた時に、揖宿(ひますき)という字を書いて、わざわざ仮名を振ったわけです。仮名を振って「いふすき」と読めばちょっとおかしい仮名を振った意味がないじゃないか、と。そんな気がするんですよ。だから当り前の漢字は揖宿(ひますき)と読んだ。だから仮名に「夫」の字を書いたのは「ぶ」と読ませるために仮名を付けたのじゃなうか、と。まぁ、常識的に云えばですね。

小川 これは清音ですよ、以夫須岐は。清音で読むように、あれを付けたのです。

浜崎 はー。

納 現在のハ行音の場合、発音記号ではhですが昔はfが正当だったらしいですね。ゴンザの辞書を見ると、ハ行は全部fになっています。

浜崎 haじゃなくて、faですね。

納 faですね。その証拠に、人をさして「あんふと:futo] というところがありますね。h音じゃなくて、全部f音だったらしいですね。

平田 清音と濁音というのは、地域的な差もあるんじゃないかという感じもするんですが。西日本と東日本とでは、実は昨日手に入って読んだばかりですが、『みなみの手帖』67号の最初に小川先生

が「大口という地名」を書いておられます。次回にコピーして配りたいと思うのですが、よろしいでしょうか、小川先生。

小川 はい、どうぞ。

平田 大口も「おおくち」と「おおぐち」がありますね。清音と濁音とが。これも地域的な分布を調べると面白いのじゃないかと思っていたのですが。鹿児島の人は清音を使わずに濁音を使うのではないでしょうか。とくに薩摩半島では濁音が多いような気がするのです。

浜崎 今の濁音ですね。開聞神社(かもんじんじゃ)? 照国神社(てるくじんじゃ)?

平田 うん? 「じんしゃ」でしょう。

浜崎 普通、鹿児島では神社(じんじゃ)と云います。鹿屋におられる方言を研究している方は、そうは云いません。開聞神社(じんじゃ)に行きますと「じんしゃ」とはっきり仮名が付けてあります。ところが方言を研究している人は「じんじゅ」だという。辞典を引いてみると、なるほど「じんしゃ」と広辞苑などは仮名が振ってあるのです。やっぱり、鹿児島特有の発音じゃないか。照国神社なども「じんしゃ」と云っていますか、鹿児島では。

二見 「てるくにじんじゅ」

浜崎 「じんじゅ」ですか?

納 「じんしゃ」だな。

二見 「てるくにじんしゃ」と云います。

浜崎 辞典では、確か「じんしゃ」。

平田 鹿児島では「じんじゅまいおり」と云いますね、昔から。「じんしゃまいり」とは云わないんじゃないですかね。

木場 「じんじゅまいり」と云わいな。

浜崎 ああ、そうな。

平田 いわゆる標準語が広まってから「じんじゅ」というようになったのであって、基本的には鹿児島では「じんしゃ」。その区別も面白いんじゃないですかね、清音と濁音の問題は。

納 今はどうか知らんけど、指宿線の山川。あす

こは普通は「やまがわ」というでしょう、鹿児島の人は。だけど、駅には「やまかわ」と書いてあるらしいですね。実際に見たことはないのですが。駅の看板に「やまかわ」、普通は「やまがわ」。

平田 いわゆる標準語的な感覚で「やまかわ」と読ましたのでしょうか、あれは「やまがわ」が正しい。以前、この会で「やまかわ」と「やまがわ」の差異の話をしましたが、「やまがわ」は山を流れる川、または「やまんこ(山之川)」から来たもの。「やまかわ」は山と川ですよ。

納 山を流れる川ですね。

平田 はっきり違いますから。

納 苗字もそうなっていますね。中島(なかしま)ば)、山崎(やまさき・やまとざき)。

平田 それが二つ見られるのは鹿児島だけじゃないでしょうか。他県ははっきりしています。「なかしま」と「なかじま」を混同して一緒に使いませんよ。質問の最初は「桑原」だったのですが、これは「クワバラ、クワバラ」という呪文につながって来ますから、「くわばら」と読むべきでしょうね。

浜崎 桑原が最初?

平田 雷が鳴った。クワバラ、クワバラとは云わないでしょうから。

浜崎 そう云えば、呪文は仮名で書いてありますね。

平田 桑原は「くわばら」と読んでいいのじゃないでしょうか。和名抄は、ほとんど全部清音で書いてありますね。

郡山 「くわはら」「くわばら」、何と云われましたか。

平田 「くわばら」

郡山 桑原(くわら)という姓が、郡山にあります。その桑原は菅原道真の子孫だということです。その

紋章も五つの扶桑、梅の紋があります。扶桑の紋をもつ方は石工として鹿児島に来たという話です。そして、桑原の姓のある所は甲突川と川内川沿いだと郡山では云っています。

平田 それは面白い云い伝えですね。雷が鳴った時にクワバラとまじないを唱えるのは、いわゆる天神さまとつながりがあるのだからということで難のがれる呪文なんですね。日本全国の桑原という地名を眺めてみると、桑原郡とつくのは大隅国だけで、あとは桑原郷ですね。だから、クワバラと唱える呪文は大隅国の桑原郡の神社と関係があるなど想定できますよね。それを考えておったのです。菅原道真の子孫が「桑原」という云い伝えは初めて聞きました。

郡山 天神さまの紋は、五つの梅。

平田 石工のルーツを遡れば、坊さんたちになるでしょうから、その影響を受けた太宰府天神の神人たちが石工の技術を身につけて下って来たのでしょうか。

池田 川内に桑原という石屋があったですよ。

平田 ああ、そうですか。

池田 太平橋の下にあったんですよ。

平田 ああ、石屋さんが。

池田 そこに、同級生がありましたから。

木場 桑原姓は、菅原氏よりもむしろ穴生系じゃないですか。穴生は、いわゆる熊本城を築いた石工の集団。プロの集団。あれが、あっちこっちに散っているから。その中に桑原姓もあったということですね。

平田 うーん、穴生の石工ですか。

池田 いわゆる起源ということになったら、そうなりますね。

平田 此処には大工さんがおられるのですが、昔は石工の方が頭が良かったというようなことを云うんですよね。難しかった、と。石工の子供で体が少

し弱ければ、お前は石工はつとまらんから大工をやれと云われて、大工の修業をさせられた、と。近所にそういう大工さんがおられるんです。先祖は石工だった、と。祖父さんは石工だったが、親父さんが体が弱かったので大工になり、その跡を継いで大工になったというのです。石工というのは、相当体力がいったし、技術もいった。優秀な人材が多かったという話なんです。どうですか、その辺は？

江之口 それは大事にせんにゃ、機嫌を損なわないように云うておかんと。

平田 今日のところは、とりつく島がないようなテーマが多いようですが。

#### 八幡

江之口 正八幡は、やっぱり八幡でしょうね。

平田 正八幡？

江之口 祭神は、いわゆる火々出見になっていますけど、もともとはやはり八幡でしょうね。

平田 八幡神でしょうね。

江之口 宇佐宮縁起なんかを見てますと、八幡は大体主従関係がはっきりするのだけど、鹿児島神宮・正八幡というのは何か独り歩きしているような節があります。八幡が天降ったのは曾乃峯とか、それから神護景雲年間に鹿児島湾に島が三つ、神造島が出来るのですけど、それも八幡の靈験で出て来たというような書き方をしていますから。ある時期には宇佐と拮抗する、宇佐から独立してむしろ宇佐を超えるような歴史というか、何かそういう節があるのです。だから余計に祭神なんかも動いている。「マナシカタマノカゴ」とか「海神宮(抜みみや)」とかのつかみにくいような話も混同して来るのだと思います。

平田 それに、石躰に八幡の文字が現れたと訴えて出る話もありますからね。

江之口 あれは、わざわざ太宰府から検分に来ていますよね、記録でいくと。

平田 それが石清水文書に残っている論争になるわけですよ。

#### 再び神社

池田 川内では神社(じんじゃ)とは云わんようですが。

平田 「じんしゃ」というのですか？

池田 新田神社(にったじんじゃ)じゃなくて「にったじんしゃ」と、われわれは云いならわしているのですが。

納 「じんじゃ」というより「じんしゃ」というのが多いですね。

池田 川内では「じんじゃ」じゃなくて、「じんしゃ」という。新田神社に問い合わせてみますか？

(笑い)

平田 川内は薩摩国府の人たちだから垢抜けして

いるのですよ。肥後から来た人たちの子孫だから。

郡山 郡山では花尾神社が「じんしゃ」か「じんじゃ」かで問題になったことがあります。「じんしゃ」でした。

平田 此処にいる者は皆「じんしゃ」ですか。そうすると「じんじゃ」は、土俗的な発音かな？

浜崎 かごしま文庫に、方言をまとめたのが出ていますね。神社(じんじゃ)とか総理大臣(だいしん)。「だいじん」が正しいか、それとも「だいしん」か。そういうのが皆、鹿児島的な一つの方言だというふうに説明しています。

平田 清音と濁音は、分布図を作っていて、案外しばられて来るかも知れませんね。じゃー、ここで前半を終って休憩にしましょう。

## — しらいし・しきいし —

平田信芳

今日の問題提起は藤浪さんに頼んでいたのですが、彼が忙しくて出来ないということで、私がばたばたとワープロで打ってみました。いろんなことをしゃっちゅう考えておりますので、発表者が都合の悪い時には穴埋めという形でやります。本当はどんどん発表したいのですが、それも出過ぎたことですから、都合が悪い時にピンチ=ヒッターをつとめることにします。

日本の地名学も新井白石あたりから始まっているので「白石考(しろせう)」と音読みにすることにしましょう。白石(しろいし・しらいし)という地名がどういう違いになるのかということで話をしたいと思います。まあ思いつくままに、プリントにあげたような地名を整理してみました。『日本地名総覧』を用いて整理してみました。これは角川書店が各府県別に出した地名大辞典の総集編として出したもので便利な本です。「よみ」がありますし、索引にもなります

で、大いに活用できる本だと思います。その中から「白」がついている地名を引き出してみました。数はあげませんでしたが、主な「白」地名になります。

まず、白糸(しろいと)。これを「しろいと」と読む地名はありません。これは生糸、すなわち白糸(しろいと)から来ています。白河・白川(しろかわ)。これも「しろかわ」と読む地名は載っていません。それから白鷺(しらさぎ)。「しらさぎ」という地名はありませんでした。白沢(しらさわ)、白浜(しらはま)。これらは、すべて「しら」で「しろ」と読む地名はありません。

白井(しらい・しろい)、白石(しろいし・しらいし)などは二通り読み方があるようです。昨夜もテレビを見ていたら、佐賀県の白石町。餅を呑み込む風習のある所ですが、あれは「しろいし」という。鹿児島県では苗字は白石(しらい)と云います。プリントの表で●印が付いているのは「しろ」と読む所です。○印は

すべて「しら」と読む所です。そうすると白井(しらい・しづい)、白石(しらい・しづい)、白岩(しらい・しづい)、白木(しらい・しづい)、白鳥(しらい・しづい)、白山(しらい・しづい)、白水(しらい・しづい)などは二通りの読みがあることになります。それから白銀・銀(しらい)。ほとんどが「しろがね」と読みます。「しらかね」と読むのは愛媛県・福岡県・長崎県に例があるようです。このように「しら」と読むもの、それから両方のよみがあるもの、「しろ」と読むのが主流のものと分けますと、表のようになります。

次に国語辞典などでみると、白梅(しらい)・白菊(しらい)・白百合(しらい)。植物は「しら」が多いようです。動物は白犬(しらい)・白馬(しらい)・白熊(しらい)・白豚(しらい)・白鼠(しらい)というふうに「しろ」が付きます。食物は白飯(しらい)・白酒(しらい)・白砂糖(しらいとう)・白味噌(しらいぞう)・白豆(しらいまめ)と「しろ」という呼び方をする。これに対して、物は白髪(しらい)・白紙(しらい)・白帆(しらい)・白刃(しらい)・白鞘(しらい)などという。「しら」の呼び方が多い。

初めは「しろ」が先で「しら」が変形かと思って眺めていたけれども、整理してみて、どうも日本語は「しら」が原形で「しろ」が変形というような感じを持つようになりました。そうすると、鹿児島県で云っている「シラス」なんていうのは、古い本来の呼び方だったんだなという感じになったわけです。われわれは小学校の時から、小さい時から、白(しろ)というのを徹底的に教え込まれ、白(しら)は変形という錯覚をおこしていたわけです。

そこで、白石(しらい)・白石(しらい)という同じ文字を区別して読むのは、地域および時代が異なると見当をつけたわけです。普通、地名を考える場合、音が訛って変わったと説明されるわけですが、地域的に分かれて存在することは訛ったという転化説の対象にならない地名だと考えることが出来ます。とくに全国の地名を拾いあげるときに、白石(しらい)・白鳥

(しらい)とか、おやっと思うような地名に気がついたりもんですからこのような整理をしてみたわけです。

そこで、考察の1.にある「シラ」が原形で「シロ」は変化形である。その理由は、全体的に「シラ」が多いことによるわけです。そして「シロ」という地名は開拓が新しい東北とか北海道に多く、西日本はほとんど「シラ」という表現であることです。

2.は最初に説明したように白井・白糸・白川・白鷺・白沢・白浜には「シロ」地名は皆無である。

それから、3.白山は「しらやま」が主流である。これは白山姫信仰とのかかわりが考えられる。いわゆる白山(はくさん)信仰というものです。大分県と香川県が例外です。それから先程説明した白銀は「しろがね」がほとんどです。ただ白山には「しろやま」という表現もあります。

そこで、「シロ」というのは新しく日本に入って来たものとの見当がつけられる。先週、斎藤彦松先生の「鹿児島県の梵字文化」という講演がありました。その時に提示された梵字一覧を見ましたらサンスクリット語の中に「シロ」という単語が入っていました。「シロ」の正体がサンスクリット語ということも判ってきました。そうすると「シラ」が日本語であって、「シロ」は後から入って来たものと私が整理したことは的を射ていたわけです。

表を見ると、鹿児島県はほとんどが〇印です。一つだけ、白水(しらい)と白水(しらい)があります。喜界町白水(しらい)と鹿屋市白水(しらい)です。鹿屋は初任校だったのですが、白水は校内マラソンの折返し点でした。バス停留所の前で、生徒に「しろみず」と聞いて、おやっと思ったことがあります。鹿児島県でも例外的な地名です。『鹿児島県地名大辞典』でみると、この白水(しらい)は江戸時代に付けられた地名のようです。新しい「シロ」という表現が入って来た例になるわけで、白水(しらい)はこちらでは非常に新しい呼び名になります。そのように考えると

鹿児島県は日本古来の本来的な呼び方がわりと多く残っている地域だということが結論付けられるのです。新しい要素というのは長い歴史を通じてそんなに入り込まない地域ではないかということが白石(しらい)・白石(しらい)という地名を一つ一つ眺めて感じた次第です。

これだけの材料では、これくらいのことしか云えないわけです。他に小原節の由来を考えるために、「小原(ホラ)」の分布も調べております。ここには小原(ホラ)さんがおられます。鹿児島県では小原(ホラ)が普通です。「おばる」という読み方も鹿児島独特の読み方になりそうです。それはまたの機会に話をしたいと思います。「しらいし・しろいし」の違いを考えるだけでも、今日話したような分析が出来るということです。何かおかしなことがありますたら、遠慮なく叩いて下さい。以上です。

(質疑応答)

松浪 漢字が一字の場合には「しら」とは云いませんよね。「しろ」じゃないでしょうか。白黒をはっきりさせるとかいう時には、「しらくろ」とは云わずに「しろくろ」。あるいは一字の場合の方に入るかと思いますけど「白と黒」。何か下に物の名前が付いて「白～」が形容する修飾語というのですかね、そういう場合には「しら」やら「しろ」やらあるのでしょうか。

平田 まぁ、そうですね。

松浪 そういう考え方立たれるわけなんですか。

平田 そうですね、一字の場合「しらを切る」という云い方ありますね。

松浪 それもありますね。

平田 白(しろ)というのは、サンスクリット語が入って来てからの呼び名だということです。それから全部体言についていたんじゃないですかね。白いなんとか白い〇〇を、しら〇〇・しら〇〇という表現にする。例えば白い砂をシラスという。そのよう

な表現が古代の日本語の呼び名で、シロという単独の表現は色をはっきり意識するようになってからの新しい呼び名だろうなと感じたのです。

池田 重なった場合、「白々しい」という。

平田 白々しい、というのもありますね。

納 白じゃないですが、他の色。青ですね、青は日本語の場合に、いわゆる緑、緑色に近い「うすみどり」、あれも「青」と云いますね。それから空の色も「青」と云いますね。

平田 白馬を「あお」と云います。

納 どこで皆「あお」になったのだろうかと思うのですが。

江之口 色の呼び方というのは漠然としていたようです。昔は色は五つぐらいしかなかった。実際の色は多いのですけれども、それこそ単純なもので、黒の中に大体「緑」が入っているような表現です。髪のことを「緑の黒髪」と云いますから漠然としていたと思います。

松浪 虹の色は、虹は七色というもんですけれども、ヨーロッパではフランスを中心に四色らしいのです。イギリスだけが七色が多くて、六色か七色だということのようです。岩波新書に『日本語と外国语』という本があって、それにそういうことが書いてありました。時代が経つにつれて色は区別されているようで、時代を遡れば色の数は少ないようです。

納 普通は赤・橙・黄・青・藍・紫(これらをすべて音読)などとがって、それらが複合されたものがあるわけですね。

平田 分布図を作つて提供する暇がなかったのですが、この図は「白岩」を「しら」と「しろ」で分けて眺めたものです。赤で記したもののが「しら」で青が「しろいわ」です。これは「白鳥」についての分布図、赤が「しらとり」です。「しらとり」「しろとり」の両方を使用する地域もあります。これが白木郷の分布図。このように分布図を描きますと、

西日本が古い形ですね。これは「しろがね」の分布図で、ほとんどが「青」。どうも西日本の方が古い形で、東日本の方は新しい表現を用いているという感じがします。

それで、先程問題になった清音と濁音もこういう分布図で重ねてみると、何か出て来るかも知れないとおもいます。

郡山 私のところには白石(しらいし)という姓と白石(しらいし)という集落があります。それに亀甲橋(めんぱい)というのもあります。昔は石を川に並べてそれをびょんびょん跳んで渡った、と。一つは亀の形をした石の所、それと白い石を並べてあった所があったということです。白い石が並べてあった所を白石校区と、まぁ云っている。その辺に住んでいる人たちを白石ということで、白石(しらいし)でなければならぬのに、白石(しらいし)と呼ぶようになったのではなかろうか、というようなことを云っております。蒲生に「白男」という集落があるのですが、あれも「しらお」です。それで鹿児島の呼び名としては白石(しらいし)・白男(しらお)というのではなかろうかと思うのですが。

平田 白浜(しらはま)もありますね。鹿児島では「しら」が多いんじゃないでしょうか。

江之口 その「しらはま」ですが、私が興味を持っていたのは和歌山県に白浜があります。その古形は、白良(しらう)。それで以前から興味をもっていたところですが、葉書を見て面白い話があると思って来たのですけど。今日の発表で非常に興味を持ったのは、「しら」の方が古いという結論。地名を拾われての結論ですけど。実は国語辞典をみると、白(しら)を読みますと「白(しら)の変化したもの」とあるわけですね。ところが、その下に一説には古形ともいうと但し書きがしてあります。つまり白(しら)の方が古いというようなことを書いてあるわけです。今日の平田先生の結論とまぁ合致したものですが。

地名研究は面白いなということをよくよく感じた次第です。

それから同じような言葉に平(ひら・たら)というのがありますが、あれも昔は「ひら」を「ひららか」というようなことを云っているみたいです。平安時代の頃にはそういう言葉が使われていたようです。川内の宮里に「平良川(ひらあら)」。「たいらがわ」と云えばよさそうなものに、「ひららがわ」と云っています。「しら」と「しらら」、「ひら」と「ひらら」、この辺のこと。私は2例しか知りませんけどやってみれば面白いのじゃないかと思った次第です。

納 「しら」と「しらら」、朝鮮語で云えば同じ和音が二つ続いた場合は、これをひっくりめで一語になる場合がよくありますね。そういう関係はないですか。ちょっと音が違いますが、テレビの天気予報によく出て来るオホーツク海。私が小学校の頃は確か、オーツック海ではなかったかと憶えているのですが。そうですか、やっぱり。昔の仮名づかいでは「オー」、今は「オホ」。どっちが正しいのかなと以前から思つたのですよ。同じ字が続く場合には一語にするきまりでそうなっていたのではないかね。

江之口 外国語を日本語に直す時、ちょっとおかしな表現が明治時代にはありますよね。オホーツク海の例は根本的なものでなく、単なる表記の問題じゃないですかね。

納 明治時代はいろいろな表現をしていますね。

江之口 そういう地名を漢字で無理な表現をしたり、アイヌ語を漢字で表して変なものになったり、これらは表記上の問題だと思うのです。それともう一つ、私は自治体の名付け方にちょっと興味を持っているのです。現在の「読み」ですが、いわゆるデータベースそのものが、いい加減なのが実はあるのです。川内に「田海(たみ)」という地名がありますが、あれをラジオやテレビが「田海(たみ)」と

云っております。これは市役所が悪いのです。もともとは「トウミ」なんです。いわゆる番所がある「遠見」なんです。ところが「田海」と書くもんだから市役所が「タウミ」読みをしているのです。このように無茶苦茶にやっていますから、「シラ」とか、そういう微妙な問題も、元来の音と違っている部分がかなりあるということを念頭におく必要があります。

小川 「トウミ」というのは、どんな字を書くのですか？

納 遠くを見るでしょう。

江之口 えーとね、遠看。それは当て字ですけど江戸時代の文献に「遠看ヶ墨」というのが出て来るのです。ところが、いつの時代からか、田海と書くようになって、それを市役所では普通「タウミ」と云っています。

池田 遠くを見るでしょう。

小川 遠く見るですか？

江之口 そういう文献もあります。二つ・三つあります。遠見と遠看と。『地誌備考』をみてもらうと、それには三つぐらい表記があったと思います。

二見 田海というのは、いつ頃からですか？

江之口 最近でしょうね。それはちょっと確認出来ないです。『鹿児島県地名大辞典』も田海で出ています。本当は「トウミ」です。

納 鹿児島市内に「樋之口(ひぐち)」という所があります。それを最近の人は「タイノクチ」と云っているようです。もともとは「トイノクチ」。トイノクチがテノクチに变成了のを、鰐とひっかけて、タイをテということから、それでそういうのだろうなということです。

池田 鹿児島語で「テノイオ(鰐の魚)」と云いますからね。

小川 平石と書いて「ひらがいし」という所があります。ちょっとどこだったか忘れましたが。

さっき「ひららがわ」という話がありました、あれはどの辺ですか？

江之口 宮里です。それとはちょっと別かも知れませんが、隈之城に「平礼石寺(ひらいじ)」という寺があるのです。13世紀の頃の文書に出て来ます。私がつかんでいるのでは、それが一番古いようです。その他に同じ「平礼石(ひらいし)」というのが根占に一つ、熊本に一つ、大分に二つほどあるのです。それと平良(ひらう)と関係があるかどうかは判りませんけど、平石(ひらいし)でよいのに「ひられいし」。

平田 古代の薩摩郡に「避石郷」と書くものがありますが、あれは「ひられいし」と読むのが正しいことが判ってきました。「ひられいし」を平割石すなわち平たく割れる石、「ひらわれいし」が「ひられいし」に変化したと考えてたら、平礼石という表現も理解出来ます。川内川流域には板石積石室という墓制が古墳時代に特徴的に出現します。板石を平たく割れた石と理解すれば、「ひられいし」と呼んで使ったと推定出来ます。それがさらに縮小して「平石(ひらいし)」になるのでしょうかね。平石という地名を拾っていっても、やはり石の産地になるでしょうね。

松浪 「ひらら」というのは漢字で書けばどんなになるのですか。平に良？

平田 良ですよ。

松浪 良ですか？

平田 原良の良です。

江之口 明治二十年頃に『鹿児島県地誌』が出ますが、川の名前では三文字で「平良々(ひらう)」と読んでいます。それから「平羅」としたものもあります。

松浪 原良も以前は原羅と書いていますね。アイヌ語と関係があるというのを読んだことがあるのですが。冷たい水が湧き出るとか、そういう意味があるんだとか。

江之口 アイヌ語の起源まで否定するつもりはないのですけど、鹿児島のアイヌ語というのは『鹿児島地名考』というのを書かれたある所の市長さんをやつていらしゃった方があります。あれは只單に言葉を当てていくだけなんですね。実際に考察するというのでなくて、アイヌ語辞典を片手に似た音を当てているだけです。それは妥当とか当たるとか当たらぬとかいうのじゃないのです。アイヌ語でなくて、普通に解釈出来る可能性はあると思うのです。

納 古い時代ならば共通?

松浪 科学性がないということですね。

江之口 あるかも知れませんけど、これまでの鹿児島の地名をアイヌ語で眺めるというのは、研究と云えるようなものじゃないと私は思います。

納 幾分はあると云われるのでしょうかね。

江之口 あるというのは、文化の共通性とか、遺物とか遺跡とか、そういうのも対象にして論じるのならばともかく、ただ言葉だけを集めてそれで合うだとかは論外な話です。例えば川内に永利(がどし)という地名がありますが、それをアイヌ語で網を編む所だとその辞典には書いてあるのです。ところが、永利のよみは、江戸時代では「ながり」と云っています。だから、アイヌ語の説明は全然問題外のことです。何故網を編む所かという合理的な説明は全く抜きなんです。そういうこともあってアイヌ語地名というのには疑問を感じています。研究の仕方に疑問だらけです。

平田 今日のプリントは、東北・関東それから中部というふうに地域ごとに横に分けてあるのですが、○とか●とか付けてこういう分類の仕方をすると、案外見当が付いて来るという例になりましょうから今後調べられるときに試してみて下さい。『日本地名総覧』というのは日本全国の地名を眺める場合、非常に便利です。『分県地図』の中に「地名総覧」があり、すべて振り仮名が打ってあります、これ

を拾って行くのも大変な作業ですから、同一地名を比較するのにはこれは便利な本です。市町村の図書館には入っているでしょうから利用して下さい。

それからもう一つは、分布図を描いてみれば見当が付くということです。そういう方法論を理解して頂けたら役に立つのじゃないかと思います。

江之口 全巻、市町村にはないですよ。

平田 入っていない?

江之口 全部持っているのは川内市だけですが。鹿児島県もない所がある。

平田 『地名総覧』は?

小原 国分市は一応入れています。

平田 全巻入れている所はそんなにない?

江之口 ありません。それと、今話題になった平礼石も文献には沢山出て来ますけれども、『鹿児島県地名大辞典』には載っていません。

平田 現在あまり使われていない地名、歴史的にあまりマークされていない地名は、どんどん落とされていますからね。

江之口 いや、一つの文書にしか出て来ないのがあがってたかと思うと、十を超える文献がありながら項目として扱ってながったり。

平田 先日気が付いたのだけど「宮坂麓」は原稿を書いたおぼえがあるのだけどね。これは今から考えれば重要な史料で石清水文書に「往古大路宮坂麓云々」と出て来るものです。大隅国の古代の官道をおさえる重要な史料ですね。その地名を書いた記憶があるけど、それはボツにされています。鹿児島県の古代の官道で、はっきりポイントがつかめている地名はここが一ヵ所だけです。ちっぽけな地名だけど、大きな歴史的意味のある地名です。私自身もその時はまだ古代官道にかかわることに気付いていませんでしたが。

それで11月の巡査の場所ですが、また国分になりますが、前回小園先生が話された止上神社から入っ

て行く道、それから宮坂麓。これは石神社がある所です。あれから女子大に登って行くのが大隅国の古代の官道の一ヵ所であるのは間違いないのです。それから今年、奈良女子大の先生が大隅国の駅路についての論文を書いておられます。航空写真を立体的に解析して鹿児島神宮から隼人塚・浜之市に真っ直ぐに向った古代の道の跡があるとしています。そして浜之市で直角に折れるとしています。その辺を歩いてみるのもいいなと思います。また隼人町から蒲生へつながる道を探すのもいいなと思うのです。

花園 「古道(ぬみ)」という地名が小鹿野にあるのですが、あれは旧道とは考えられませんか。

平田 それも旧道ですね。古代の官道の場合、駅路・伝路・郡伝路と三つぐらいあるのです。国府と国府を結ぶ駅路、国府と郡衙を結ぶ伝路、郡衙と郡衙を結ぶ郡伝路、他の県の人たちは官道も三つぐらい考えています。鹿児島の場合は一本道しか考えないわけです。この道を主張する人、この道を主張する人、と。いろんな道を考えていいと思います。一つ一つ確実に古代の道というのをおさえなければならないと思うのです。

江之口 結局、出水は何が出たのですか?

平田 ああ、市来駅の跡。「市来」という所を発掘したのですが、平良(だいら)川の氾濫原で圃場整備に伴なう確認調査だったのです。どのトレンチからも、縄文から平安の頃までの小さな破片ばっかりが出て来ていますが、遺構そのものは出て来ていません。「市来」という地名から「市来駅」という可能性を考えて掘ったのですけど、見た限りでは遺構はありませんでした。だけど、遺物が出て来ますから全部調査せざるを得ないでしょうね。

江之口 泛濫原に出て来たのですか。

平田 こういう所なんだけどね(板書)。こっちが広瀬川で、こっちが平良川。ここに上中・下中という集落があるんですね。この間の氾濫原に市来・

上市来という小字があり、そこを掘ったのです。一段高い所、「中」という地名は曲者だと思うけど。川のそばで破片が出ている。

江之口 上から流れて来た?

平田 流れて来たのでしょうかね。それから鹿児島語でいう「お出張い」が考えられる。昔から村の皆が川原で「お出張い」、飲んだり食べたり踊ったりしたわけだろうから、土器の破片は散らばるわけよね。市来駅があったとしたら、もう一つ上の段?

江之口 何ヵ所ぐらい入れたのですか?

平田 トレンチ? 30ヵ所ぐらい入れてるよ。

江之口 それで、何も出て来んの?

平田 遺構は出て来なかった。破片だけだ。あんな所に駅家の跡があったら大変だ。洪水の度に逃げなきゃならん。

江之口 そうか。

平田 ただね、市来の近くから山に入る道があるのだけれどね。西出水小学校の百周年記念誌に修学旅行の思い出が書いてあるのですがね。大正時代の中頃ですがこの山道を登って藤川天神に下りている。それがね、朝5時ごろ出水を出て、藤川に昼頃着いてるんだよ。そして東郷に出て、東郷から川を下って川内に来る。そこで初めて蒸気機関車を見て、皆で「万才」と云っているんだよ。(笑い) そして川内から鹿児島に向かい、夕方6時頃着いている。帰りは、肥薩線で登って大口に出て、大口から紫尾越えをして出水に帰っている。そういう修学旅行の記事がある。

青柳 それは何日行程ですか?

平田 何日? 四・五日だな。それでね、明治の頃の紫尾の南側を越える藤川天神へのルート。これは古代の官道としての可能性は強いと思うよ。

江之口 あの横座峠は、くさい。

平田 そう、そう。それだ。

江之口 横座(よくら)という地名は伊達に付く地名

じゃないですから。

平田 これが横座峠を越える道になるわけだね。

江之口 「クラ」というは神様を祀った場所だから。岩倉とかも。

平田 そういう意味で隼人から蒲生あたりをどこかのぞけたらなと思います。そういう計画を立てたいと思うのですが、期日はいつがいいですか。11月のカレンダーはないですか。えーと、これは日曜、連休ですかね。これは図書館の休日。日曜日は休みじゃないのだな（笑い）。11月 3日はだめだろう。

11月23日（土）・ 24日（日）はどうでしょうか。

江之口 23日は勤労感謝の日じゃないか。

平田 そう。

二見 それは、家に居なきゃいけない。

平田 連休のうちの一日をつぶそうと思って。23日に設定して隼人町を歩きましょうか。石躰神社あたりから。

花園 石躰宮の所から上に登る？

平田 山道を登るのもきついから。

花園 朝日の方に登って行くのですか？十三塙原の方に。

平田 そっちでもいいし、海岸の方に下って行って鳩脇（波止脇）に出る——

花園 野久美田のあっちの方に出る道ですね。

平田 そう、野久美田に出るコースか、あの辺を歩いてみようかなと思うのですが。それで隼人塚の横に道路があったような気がするんですが、どう

ですか。もう残っていないかも知れないけど。

花園 日豊本線の工事の関係でだいぶ変ったとは思います。隼人塚の敷地内でも変ったそうですから、道路があの辺を通っていたことは考えられますよね。

平田 どっちに抜けるか実際に歩いてみましょう。

花園 あの辺は藤浪さんが地元で詳しいから。

平田 確実に道路の跡と判っているのは石躰神社に降りて来て、参宮橋の所を渡って大隅国府：府中へ行く道は抑えられると思うのです。それだけでなく、もう一つ海岸へ出る道が新しくあったはずですから。そういうふうにしていくつかを辿ると、そのうちに蒲生駅がどこにあるかという見当もついて来ると思うのですけど。

鹿児島県は今年から三年かけて「歴史の道調査」を始めておりますから、その資料集めにもなると思いますので、それをやりたいと思います。具体的なことは後日連絡いたします。

12月例会は藤浪さんが発表する予定です。前回、10周年記念誌を作ろうということでしたので35号の一番うしろのページに要領を書いてありますので、各人思っていることをワープロで打って下さい。

江之口さんが中心になって作って下さい。

江之口 それでは皆さん、原稿を出して下さい。音をあげるぐらいに。

平田 今日は早いですが、これで止めましょう。後片付けをお願いします。

白石考  
しらいし〇・しろいし●

H. 4. 9. 6

平田信芳

	白糸 白川 白鷺 白沢 白浜	白井 白石 白岩 白木 白鳥 白山 白水 白金	
北海道	○ ○ ○	○● ○● ● ○	●
青森	○ ○ ○		●
岩手	○ ○ ○	○ ○ ○ ○● ○● ○	
宮城	○	● ○	
秋田	○ ○ ○	○ ● ○ ○ ○	●
山形	○ ○	○ ○ ● ○● ○ ○●	
福島	○ ○	○● ○ ○ ○ ○	
茨城	○ ○ ○	○	●
栃木	○ ○ ○ ○	○ ○ ○	●
群馬	○ ○	○● ○● ○	●
埼玉	○	○● ○● ○	●
千葉	○	○● ○ ○ ○	●
東京	○ ○ ○ ○	○ ○ ○	●
神奈川	○	○ ○ ○	●
新潟	○	○● ○ ● ○	●
富山	○	● ○● ○ ○ ○	●
石川	○ ○ ○	○ ○ ○ ○	●
福井	○	○ ○ ○ ○	●
山梨	○ ○ ○	○● ● ○	●
長野	○ ○	○ ○	●
岐阜	○ ○ ○ ○	● ○ ○ ● ○ ○	●
静岡	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ● ○	●
愛知	○ ○ ○ ○	○● ○ ○● ○	●
三重	○	○ ○ ○	
滋賀	○	○ ○	
京都	○ ○ ○	○ ○ ○	○●
大阪	○	○	●
兵庫	○ ○ ○	○ ○ ○ ●	●
奈良	○	○ ○	●
和歌山	○ ○ ○	●	

	白糸 白川 白鷺 白沢 白浜	白井 白石 白岩 白木 白鳥 白山 白水 白金						
鳥取	○	○						
島根	○	○● ○						
岡山		○					○	
広島	○		○	○ ○	○ ○	○ ○		
山口	○		○ ○ ○ ○ ○					
徳島		○ ○				●		
香川		○			● ○●		●	
愛媛	○	○					○	
高知	○	○ ○	○ ○	○ ○				
福岡	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○○●			○●	
佐賀	○		○● ● ○ ○ ○					
長崎		○	● ○● ○ ○● ○ ○				○	
熊本	○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
大分		○	○● ○ ○ ○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
宮崎		○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
鹿児島	○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
沖縄	○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

(考察)

- シラが原形で、シロが変化形である。(原則1)  
理由: ①全体的に○が多い。②歴史的に開拓が新しい東北・北海道に●が相対的に多い。
- 白糸・白川・白鷺・白沢・白浜などに、シロ地名がない。
- 白山はシラヤマが主流(白山姫信仰とのかかわり?)。愛媛・大分のシロヤマは例外的。
- 白金・白銀・銀はシロガネが大半を占める。京都・愛媛・福岡・大分にシロヤマが見えるのは何故?「銀」の存在を知った時代に、シラからシロという発音の変化があった。
- 鹿児島県の地名のよみ方は、その呼び名の主流・標準的なものが多い。

(地名のよみは、角川『日本地名総覧』で分類した。)

# 地名研究会報

第39号

平成5年12月5日

鹿児島地名研究会

I. 第39回例会 平成4年12月3日(日)

(出席者) 江之口沢生・大田照夫・小川亥三郎・小川秀直・納栄蔵・長谷川順一・花園正志・平田功美子・平田信芳・二見剛史・松浪由安・山口静也(計12名)

II. 豊藩名勝考読会 P.129 ~ P.134

(問題となった地名および事項) 郡域と自然地形、嘆きの森、二之宮、曾於紀行、駅と八幡  
郡域と自然地形

平田 問題にしたいことはありませんか。

二見 始良郡の形成過程というのを何か図で示すことは出来ませんか。

平田 始良郡というのは複雑ですね。

二見 鹿児島というのが、ずっと桜島までひろがっているようですね。

平田 それは解釈の仕方だと思うのです。来年の2月6日に鹿大史学会があるので発表しようと思っているのですが。薩摩国と大隅国の中で歴史的変遷の判りにくい地域が二・三あります。薩摩国では祁答院・宮之城付近が判らないですね。大隅国では高隈から鹿屋あたりの所がよく判りません。大体、郡域は自然地形によって左右されます。昔の出水郡というのは紫尾山から西側の方ですね。高城郡は、川内川から北になります。薩摩郡は川内川の左岸、そして冠岳に限られている地域。それから日置郡というのは薩摩半島を縦断する山地の西側の方、その南の方が阿多郡ですね。川辺郡というのは東シナ海に面した地域。頬咲郡・揖宿郡・給黎郡・谿山郡・豊島郡というふうに、大体自然地形に限られていると見ていいですね。そうすると最初の豊島郡というものは鹿児島湾の奥全体だったと思うのです。そして桑原郡を設置する時に、天降川から東の方を豊島郡に、西側を桑原郡にした。現在の隼人町・溝辺町・

加治木町・帖佐・蒲生町、これらあたりは桑原郡になります。桑原郡から始良郡というのが出来るのは島津氏が完全に薩・隅・日を握った時に郡の呼び方を変えた結果だと思います。明治になってから桑原郡が消えて始良郡がひろがって行くわけです。だから始良郡の変遷というのは非常に面白いと思っています。

江之口 もともと始羅郡は鹿屋の方でしょう。

平田 あっちだと思います。

江之口 和名抄の始羅でしょう。

平田 その始羅郡がよく判らないのだけれどね。というのは、大隅郡が消滅したことによって一層判りにくくなったり。大隅郡というのは鹿児島湾の東の方、例えば垂水とか、大根占、根占。鹿児島湾の東サイドだったと思うのです。ところが大隅郡の範囲を示すのに厄介な記事があるのです。風土記逸文に大隅郡串ト郷とあるわけです。串トは串良と思われるの大隅郡の範囲を串良まで広げなければならないことになる。その辺が理解を困難にさせているわけです。それから豊島郡は現在の国分市あたりがその中心になる。現在は山を越えた向こうが曾於郡になっていますが、あれはどう考えても日向国南諸県郡と理解した方がよいと思う。よく判らないのは、肝属郡と始羅郡の範囲です。始羅郡は吾平町とか鹿屋市大始良という地名が残っていますから、あの辺だと

思いますが、あの辺の歴史的勢力の入れ代りというのがよく判らない。一般的には郡というのは自然地形に左右されたよび名だと思います。その次の単位の郷のことですが、郡はいくつかの郷から成っているわけです。郷を探す方法として2万5千分1図で神社のマークを拾ってみました。そうしたら、神社の印が8つから12の固まったグループが存在することに気付きました。それが1郷あたりの神社の数で、それが1郷の範囲を示すと考えたわけです。これは今整理中です。2月6日に発表します。

### 嘆きの森と二之宮

江之口 この嘆きの森を歌枕としたもの、後の方はともかく、前の方は此處の歌なんですか？

平田 それは判りません。嘆きという地名は作ればいくらでも出来るでしょうし、投木の神事などをやる所はいくらもあるでしょうから。大隅国の国司たちが宮中で宣伝して、なげきの森という歌枕を作った可能性はあると思います。

江之口 この清原元輔という人物は肥後の藤崎宮の文書にも出て来るのですが、実際には確認されていません。

平田 清原元輔が肥後に——。

江之口 その地元との関係がですね。藤崎宮の文書には出て来るけれども果たしてそこに居ったのかというのは確認されていないのです。それと嘆きの森という歌枕は、もう少し有名なのがどこかにあったのではないかね。

花園 どこか、神戸でしたかね。

平田 ああ、そうですか。

江之口 そうですね——。

花園 はっきりしたことは云えないのですが何で読んだことがあります。柳田国男の本に出て来たような気がします。

平田 ああ、そうですか。こっちが宣伝しすぎたということだろうか。（笑い）

藤浪 どこにも書いてないですからね。  
平田 ここだと宣伝した方が勝ちかな。  
藤浪 歌枕であれば、そこへ行かなくても出来るわけですよね。

平田 それは、そうです。

藤浪 イメージで作っていますから、この時代は、江之口 それと、これが二之宮だというのは何かひっかかるのですけどね。二之宮というのは薩摩國の場合は加茂久利ですよね。

平田 薩摩国はね。

江之口 加茂久利は延喜式に出ていますよね。嘆きの森というのは古い例があったとしても、文献にはちょっと見えないようなんです。二之宮という社格、神社の格付けからすると相当大きいようだけど、近くにはそういう神社は見えない。守公神社の方がむしろ大きいような気がするけど。

藤浪 守公神社は総社やど。

江之口 だから、そっちの方が大きいのですね。あまり名が出て来ないのが、二之宮にどうしてなったのか、ということ。

藤浪 そこらあたりは判らん。古い時代のことは判らん。

平田 それは判らんな。

江之口 大穴持神社だと、延喜式に出る神社はいくらでもあるのに。

平田 ああ、あの辺にかたまっているけどもね。ある時期の大隅守が、一之宮は正八幡宮、二之宮はここだと決めたら、二之宮ということは定着するではないかな。

藤浪 二之宮のはっきりした記録はないけれども古いことを類推するものに、あそこから出たという漢代の鏡があります。それから、これは仿製ですが海獣葡萄鏡があるのです。そういうことからすると、いいのじゃなかろうかという気がするわけです。

江之口 蛯児と大隅正八幡の縁起にも、何かそう

いうような関係があるし、それから大隅宮というのがこれには書いてあるみたいですが、それがはっきり確定していないようです。大隅宮というものが石清水文書にも何度も出るみたいですが、何かまだ不明のものがあるみたいです。

### 曾於紀行

平田 132ページの上の5行目に曾於紀行というのが出て来ますが、誰が書いたものか、どなたかご存知ないですか。

江之口 これはね、県立図書館にあると思います。

平田 ああ、そうですか。

江之口 はい、これは江戸——。

平田 江戸時代のものだろうけど。

江之口 新井白石じゃなくて、本居宣長。その辺じゃないかな。そんなもの。

平田 本居宣長ならば。

江之口 本居宣長じゃ時代が合わないね。

藤浪 誰が書いたのか、書いてないから。

平田 この時代の人には常識だったのでしょうかけどね。

### 駅と八幡

平田 最初にかえって石躰神社。旅人が石を1個あずかって行って2個返していたのが、現在は安産の神様になって同様に1個もらって行って2個返すというようなことになっています。これに書いてある旅人が持って行くというのが一番自然でしょうね。ここを昔の官道が通っていたから、旅人が旅の無事を祈願する場所としてふさわしい。この前現地で説明しましたが、あそこが宮坂麓になります。天承二年(1132)の石清水文書に「往古大路」と出て来ますから、大隅國の駅路があれから鹿児島女子大の方にあがって行ったのは間違いない。史料として抑えられているわけです。

これは現在まとめていることですが、大隅國・薩摩國の駅路について駅と神社との関係を眺めると、

不思議なことに八幡と結びついているわけです。例えば、大隅國府と結び付くのが大隅正八幡、薩摩國府には新田八幡が付いています。蒲生駅には蒲生八幡があります。それから水俣駅と英祢駅の間は市來駅となっていますが、これはちょっと問題があると思います。水俣と英祢(阿久根)の中間には出水駅が出て来なければならない。出水郡衙と無関係に駅路が通っていたとは考えにくいからです。そうすると出水には箱崎八幡というのがあります。英祢駅のそばにも八幡神社がありますし、綱津にも八幡神社があります。大隅國・薩摩國の駅・郡衙・國府には八幡神社が付きまとっています。後からのものでしあが八幡信仰が根強いようです。八幡をもとに追求していくは、大水駅は大口市の郡山八幡の近辺が有力になります。大口に大水駅を設定すると、大隅國府との間が距離があきすぎることになるという難点が出て来ますが、ちょうど中間に栗野があり、そこに有名な八幡があります。勝栗神社のことです。これらを考えると、大隅國・薩摩國の駅は八幡神社の存在と結びついて来ると考えた方が自然のような気もします。

出水市武本の「市來(イケ)」という小字。これは平良川のすぐそばの氾濫原で、駅を考えるには条件が悪いようです。出水の中心地は出水郡衙の地で、延喜式の駅名「市來」については出水駅の誤記もしくは脱漏を考えた方がよさそうな気がします。南九州の駅を考えてみると、例えば島津駅は都城市に発展しているし、大隅國府は国分市に、薩摩國府は川内市になっています。英祢駅は阿久根市になっている。そうすると、出水にあった駅は出水市に発展していかなければならない。駅の所在地はその後の政治・経済の中心になっているわけですから、市來という小字をもとに市來駅を解釈するのはおかしい。どんなに小さくとも大字として残っていて然るべきだと思うのです。株野駅は大字、蒲生駅は蒲生町

ですしね。そのようなことで八幡と結びついた駅説を出していこうと思っているところです。

藤浪 一つ一つの八幡の創設のことですがーー。

平田 創設というのは、皆古いからね。

藤浪 古いけど、やっぱり、いろいろあるから。例えば宇佐八幡系とか石清水八幡系とか、正八幡が関係しているとかあるから、ある程度それを抑えたらしいのじゃないですかね。古代の駅制に結び付けるのであれば。

平田 宇佐八幡か正八幡に結び付くのでしょうか。大隅国の場合。

藤浪 石清水八幡は、平安時代、徐々に全国の国府に置かれるわけですから、そこら辺も抑えておいた方がいいのじゃないかな、と思います。

江之口 八幡はですね、川内にも新田八幡があるわけですが、全部神領です。莊園。そこの鎮守としてやって来る。例えば勝栗神社。これは正八幡の四所若宮の一つなんです。鹿屋、吉田それから栗野と四所若宮の一つで、皆、正八幡の神領があった所です。それから荒田庄には荒田八幡があります。新田八幡系統では益山庄があり、それには加世田の益山八幡があります。全部宇佐か正八幡か。新田が少し持っていますが、莊園には、皆、八幡が鎮守として祀られているのです。それから宮崎県：日向国ではわりと早い時期に、あれは 900 年ぐらいに宇佐八幡が神領：莊園を開発しているのですが、そこに大体八幡が祀られているようです。道との関係はともかくとして田圃のよい所を持っている所になります。

平田 庄園は桁はずれに離れた所に開かれるわけではないので、郡衙や庄園の近くを駅路は通っていると見なければならない。そう云った所に八幡はあるということです。

江之口 それと、もう一つ。神社というのは維持・管理には莫大な経費がいります。宇佐宮の場合は九国と二島が支配するという形になっていますね。

いわゆる全部の国から費用を徴収する。それから、正八幡は日向・大隅・薩摩の三国の支配。新田八幡は薩摩国だけの支配ということで費用の分担をしなければいけないのですけども、その費用は、皆、庄園から出るようになっています。ところが実際に調べてみると、私は宇佐神宮をずっと追っているのですが、やっぱり、なかなか費用を出せなかったりして、訴訟沙汰なんかが結構あつみたいです。それで例えば宇佐は三十三年に一回造営を、いわゆる伊勢の遷宮みたいにして少しづつ建て直しをするのですけど、それが引き伸ばしになったりして、集まるべきものが集まらなかったりしています。だから八幡というのは、何と云いますかね、錢の集る所。神社の費用を集めめるための、事務所みたいなーー。

平田 出先機関か。

江之口 まぁ、そういう所ですね。鹿児島支店・川内支店というような役目をになっていたようです。

平田 そう云った意味では地方・地方の拠点。大袈裟に云えば中核都市と云った性格があると思う。

江之口 駅というのも、そう云った所をにぎるわけですからね。

平田 そう云った所を駅路は必ず通っている。歴史的に重要な土地は駅が近いと見なければいけないのじゃないか。大隅国・薩摩国の場合、駅とか政治的な中心地に必ず八幡の影が見えるものだから、これを結び付けて行った方が早いと考えたわけです。そうした場合、薩摩国の市来駅も、日置郡の市来に新しいけど鶴岡八幡があることが目につく。市来駅を日置郡に引っ張って来ると、市来の次は鹿児島の荒田八幡が浮かびあがる。荒田八幡と蒲生八幡の距離を考えると、大体いい位置に配置されているなと思うのです。大隅国・薩摩国駅路の場合、出水駅が脱けているし栗野駅が脱けていると考えることが出来る。鹿児島（荒田八幡）は駅路でなく、これは伝路であってもいいと思うのだけど。鹿児島もクロ

ーズ=アップさせてもいいなと思ったりもします。折角ですからスライドを見せてもらいましょうか。

#### 国分市・隼人町の史跡（スライド）

花園 先に出した方が良かったかなと思うのですが、一通り簡単に紹介します。ご存知の方も多いのじゃないかと思いますが、準備して来ましたので、出してみます。これは鹿児島神宮です。次は石肺宮です。

平田 これは、宮詣りですね。

花園 これは石肺宮の境内になります。酉の日が参拝客が多いようです。私が行った時は、ちょうど酉の日で境内には沢山人が居ました。右手の方が、福山町の松下病院長が建てられた卑弥呼神社になります。

次が石肺神社境内にあります高千穂宮跡の碑で、神武天皇の皇居跡だと裏側の説明に書いてあります。

次が卑弥呼神社です。

先程の覺藩名勝考にも出ておりました樟樹です。古い枯れた根株が右側の下った所になるようです。鳥居の左側の方にちょっと見えているのが、西郷隆盛が日当山温泉に湯治に来たときに宿としていた竜宝家を移したものです。これはその説明板です。

これはご存知の大隅国分寺の六重塔ですが、実は七重塔だったと隼人町郷土誌に出ております。

藤浪 七重塔で出てましたか？

#### 方後郷について

私に与えられたテーマについて話をします。そこに「方後」と書いてありますけど、「カタシリ」という読みだと云われています。私自身は、そう読むのかどうか、詳しく究明はしておりません。以前から話をと云われて別のことを考えていましたが、与えられた課題がそのタイトルです。それで考証というより、忙しい合間で調べたことを発表する形に

花園 五重塔ですか？

平田 康治元年のもの。

花園 康治元年壬戌十一月六日、というのが二段目に、こちら側から云うと向う側の方に彫り込んであります。

藤浪 東側の方。

花園 こちら側です。それからこれが守公神社。現在は祓戸神社と云いますが、大隅国衙の所にあった總社だろうと云われています。

これは止上神社の近くにある、もう一つの隼人塚になります。隼人の首塚。

平田 こっちが本家本元なんだけれどね。

花園 これは近くから写したものです。これは、隼人塚。

次は宮浦神社です。延喜式の中に出で来ます。境内に二本見えています銀杏の木ですが、これは現在鹿児島県の指定文化財になっています。

次は大穴持神社。オナンジサアと云っています。

これは国分市上井にあります韓國宇豆峯神社でございます。

これは西の方から見た姫城の城です。右側の方を国司岳と呼んでいるようです。

この中央の高い所が国分の新城です。現在、城山公園になっています。以上です。

藤浪三千尋

なろうかと思います。

隼人町の西側に「カタシリ」という地名が出て来るので、これがいわゆる和名抄に出て来る鰐蛇郡の「方後」という郷名と何か関係があるのでないかとの推定のもとに話をしたいと思います。先程も桑原郡とか鰐蛇郡の話がありました、境界の設定というのは非常に古い時代ですので難しかろうと

思います。それを論究するのが目的なんですが、とても論究というところまで参りません。それで『旧記雜錄』に載っている史料とか『続日本紀』の記事について話をしてみたいと思います。

まず幡多郡・桑原郡の境界ですが、今まで、ただ漠然と考えていました。それで、延喜式と和名抄を調べてみました。和名抄というのは嵯峨天皇の流れを汲んだ源順という人が編纂したらしいのです。その序文によると、嵯峨天皇の次が醍醐天皇であり、醍醐天皇の内親王：勤子内親王のために編纂したものだということです。醍醐天皇が亡くなられて勤子内親王が非常にめいっておられる時期に、こういうのを読んでさしあげたとのことが書いてあります。

延喜式が出来たのが、延長5年(927)。内容は和名抄に引用されていると書いてあります。どの程度引用されているか、私は両者を比較していませんのでただ書いてある通りに申し述べます。承平年間(931~937)に和名抄が成ると書いてあります。

延喜式の区分で一つ、ある程度想像がつくのは先程も出て来ましたが、神社の位置関係です。桑原郡の中にある鹿児島神社というもの。これは大社で出ていますが、現在の鹿児島神宮：正八幡宮に比定出来ます。それから大穴持神社と宮浦神社。大穴持神社は国分市広瀬にあります。宮浦神社は福山町にあります。国分の山を越えた東側にあるわけです。韓国宇豆峯神社は国分平野の東のはずれにあります。これらはみな幡多郡になります。

それで桑原郡と幡多郡の境界が問題になるわけですが、国分市と隼人町の間を流れる天降川。一番うしろに隼人町の地図を付けておきましたのでそれを見て下さい。現在は天降川がまっすぐ地図の中央を山手の方から流れていますが、以前は見次の上の辺からやや右下の方に流れて、野口~福島・広瀬の辺を蛇行して流れていたことが判っています。古い地図にもそのように描かれています。

この前、巡査の時に集合した参宮橋付近から、寛文年間に川筋を引き直しています。ですから、延喜式の桑原郡・幡多郡の境界を考える場合には現在の川筋を考えてはまずいのではないかと思います。

それで地図を見て下さい。大穴持神社はどう見ても幡多郡内に入っています。韓国宇豆峯神社は「宇豆門」という所に神社の印がありますが、それが韓国宇豆峯神社になります。それから見次のやや左上方に鹿児島神宮があります。先程の平田先生の話に、境界というのは自然の山とか川によるだろうということでしたが、私もそういう要素があるのではないかと思います。

問題とする「方後」は和名抄では幡多郡に入っております。後々私どもが知る鎌倉時代とか戦国時代の「カタシリ」という地名は、全部桑原郡に入っております。幡多郡方後郷というのが果たして旧桑原郡の「カタシリ」なのかという一つの問題点もあるわけです。簡単に錯誤というか錯覚というものでは片付けられないような気もしますが、和名抄関係の本を読んでみると写本等がいくつもあって、写す時点で間違えたということもあるやも知れない、ということです。私はそのところをクリヤーしていませんので何とも云えないわけですが、そういうことも確かに書いてあります。入れ違いになつてかも知れないということです。

それで方後郷が「カタシリ郷」ということであり、幡多郡と桑原郡が入れ違っていると仮定すれば、これから申しあげる桑原郡の「カタシリ」という地名に結び付いて來ると考えているわけです。桑原郡と幡多郡の境界の移動については、先程読んだところに(慶藩名勝考 P.130)のっておりました。

幡多郡に近く薩摩国が入って来ておって鹿児島という地名がそこら辺まで来ているのではないか、というのは白尾国柱の説だろうと思います。隼人町内に鹿児島神社という鹿児島の地名が付く神社が何故

あるのですかと、よく聞かれるわけです。その解説には非常に難儀するわけですが、一応こういうのを引いて昔の人はこのように考えていたと説明するわけです。鹿児島という地域が隼人町の辺まで広がっていて、鹿児島神宮に鹿児島という名が残っているのだというような説明は、考えとしては非常にやり易いわけですが、実際はそれよりも複雑な感じがします。

桑原郡、始羅郡あるいは始羅郡というのは、東の方に寄っておった鹿児島から分かれたのではないかと書かれておりますし、それが大隅国に入れられたと書いてありますが、桑原郡の内容自体もよく知りません。いろんな史料から、ある程度類推するだけです。

それで、桑原郡にある「カタシリ」という地名について資料をもとに説明します。N0.2に入ります。それじゃないかと推定されるもの。これは平田先生が国分高校七十周年記念誌に書いておられます。もともとは旧記雜錄にあります。例の蒙古が攻めて来た時、北九州に防御するための石垣を造ります。その時の割り当て文書が、国分駅そばの守公神社を掌っていた調所家の文書にあります。石築地役配符と呼ばれるものです。これに桑東郷と桑西郷とあります。いわゆる桑原郷が東と西に二分した結果じゃないかと思うのですが。その桑西郷に内村・内山田それから尖尻と書いてあるのです。そして(賢尻)が書いてあります。これも平田先生の推察じゃないかと思いますが、尖尻の次に「小浜」が出て来ます。

と云いますのは後に出て来る文書は「固尻・小浜」とか「賢尻・小浜」とかですね、ひつ付いた形で出て来ます。ですから、「尖」という文字の意味からみて固い字義になるのかなと思ったりします。まだ辞書のこまかい意義を引いてはいませんが、固尻・賢尻としても間違いないと思います。内村・内山田は現在の神宮の周辺ですので、今の私どもの隼人町

の西半分ぐらいに当たるのじゃないかと思います。これが建治二年(1276)に出て参ります。

次に3枚目の下の方、台明寺文書。チェックしてあるとごろに「固尻四段」と出て来まして「宮永名経田」と書いてあります。この宮永名というのを、どのようにとらえるのか、そういうのも一つの大きな問題なんですが、それを調べる時間を持ちませんでした。鹿児島神社の修繕なんかをする時に負担を各郷に割り当てたものの中に「宮永社役支配状」というのが出て来ます。「社役」のことです。これも旧記雜錄に出て参ります。保延元年(1135)の文書に出て来ます。例えば桑西郷という郷の下に、宮永と書いてあります。この「宮永」という地名の正体を突き止めねばと思います。台明寺文書にも「固尻」というのが出て来ます。今、私が問題にしている桑原の方に入る「カタシリ」になるのかどうか、信憑性が出て来ると思うのですが、同じ文書に「青木」という地名が出て来ますが、現在、小田に青木神社というのがあります。何か関連があるのかなと思つたりもします。これは重富名になっていますが確實なところは突き止めておりません。ただ文字が出て来ただけで、そうだろうと無責任ですが云つております。いろいろ順を追つて拾つて行かなくてはいけないのでしょうが、充分調べてはいません。

次に、戦国時代になると「カタシリ」という名がよく出て来ます。N0.3に小字図を出してあります。小字図の左の方が、いわゆる樺山氏が支配していた長浜城です。生別府城が最初の名前ですが、ここを島津氏の家老筋にあたる樺山氏が治めています。大永元年(1521)に都城の樺山という所を治めていた人たちが、ここに移つて来ます。これは島津氏が段々幡多郡：今の国分地区とか、肝属・大隅を支配する一つの手順のための配置です。大隅国と薩摩国の中間に当たる此処が要ですので、こら辺を抑えるために配置したと思います。その時に、樺山玄佐と

いう人が此処の城主なんですが、日記を残しています。『玄佐自記』に「大永元年五月十日、堅利小田かりやにふる雨を過し云々」という文章が出て来ます。それが「堅利」です。

それからこの樺山氏と争った、国分の方を支配していた本田氏。もともとは島津氏の初代が鎌倉から鹿児島に入って来る際の先鋒役として来た人たちで重臣として重んじられていましたが、国分を治めているうちに主家に背くようになり争うようになるわけです。その本田氏は天文十七年(1548)に島津氏から征伐されます。それがNo.3の左下の方に小さく書いてある本田紀伊守という人です。敗れて都城：庄内の方へ逃げてしまいますが、そのところの文章にも「小浜・堅利之社家領云々」というのが出て来ます。その右の方、入来家臣田中氏蔵という文書に「坪付」とあって「大隅之国堅尻名之内、一ヶ所春毛ノ門、四反 はるけ田、一反卅 なかやま、卅かに田、卅 井手の下」というのがあります。この坪付の中に出て来る小字名が上の字図を見ますと、残っているようです。例えば「はるけ田」というのは、その字図の真ん中ぐらいに斜線を引いておきましたが、「春花田」というのが残っています。それから「蟹田」というのもその右側の方に残っています。「なかやま」というのは、野久美田に中山神社があります。何か関係があるのじゃないかと思っています。はっきりした小字がここに二つ出ております。この辺を「カタシリ」というのじゃないかと思うのです。

これは地元の人間が考えることなんですが、その小字図の真ん中にある「破戸脇」ですが、この間の巡査の時に食事をした三島ドライブインの山を「渴山(カシマ・カヤマ)」と俗に云います。そのやや下に、「田尻」という所があります。カタシリの「カ」が脱けたのではないかと思うのです。ここは田圃などありそうな所じゃないのです。それから、地形的に

見ますと、渴山と書いてあるところから大体斜めに山の稜線が通ります。その右側の方はいわゆる大山野(カシマ)です。先程の本田紀伊守の文章の「小浜・堅利之社家領」の上の方に「奥之洲大野原」と「奥之洲西郷」とありますが、ここが「ウノバイ」で大野原になります。それから上の方に「上西郷」と「下西郷」という所があります。ここら辺が関連があるんじゃないかなろうかと思います。

これは全くの類推なんですが、「郷」があってもおかしくないというようなことを感じ始めました。隼人町も平成元年度あたりから発掘を始めまして、段々地下に眠っている遺物などが明らかになってきました。さっきの「春花田」の所あたりも縄文時代以降の遺跡などが沢山発見され、遺物も出てきました。私はまだ見ておりませんが、春花田の近くの森田の辺で礎石を伴って遺構が出ているということです。また鉄道線路沿いに「松木園」ところがありますが、此処では古墳時代から平安時代の遺物が相当出ています。例の湖州鏡、北宋・南宋時代の鏡。それから白磁の完形品も出ています。鉄剣、それに墨書き土器も出ました。「備」という字じゃないかと思いますが、あとは読みません。それに小字や苗字に「白拍子」とか「地蔵原」とかの名前があり、正八幡宮の細工所などがあったのではないかと推定しているわけです。坏などがまとまって出たりします。

それから松木園の上の方に「岩神」という大きな石があり、そこが昔から正八幡の神様が誕生した場所だと云われており、古代人が祀っていた場所じゃないかと思います。また、春花田の上の方に、踏切からぐるっと回った竹藪のところですが、石がごろごろしております。昔からドルメンのある所だと云われています。それと春花田の辺には貝塚もあります。楠元という所です。猪の骨とか犬の骨とかが出土しました。何か祭祀的な感じがします。

先程の平田先生の神社の話に関連しますが、西側

に中山神社というのがあり、これが東の方を向いています。それから青木神社が南の方を向いています。それから鍋島神社が北面しています。あと、東の方がどこにあるのかよく判りません。富隈の住吉神社あの辺になるのか。もっと国分寄りになるのか。あるいは此処に山王という字名が見えますね、右の方に。此処に山王社があったのじゃなかろうかと思います。もう一つは、この前見ました伽藍神社もあるんですが。(編集者後記：山王社は西に向って拝むのが通常で、東向きの建物になる)

そういうわけで、これらの神社を結ぶ交叉点の付近が「大野原」です。大野原は未だ発掘はしておりませんが、何か大きな遺跡がありはしないかと思ったりもします。入来町の藤井先生は、国府がここに移転した時期もあったのじゃないか、新国府(シンゴフ)ということで類推をされていますが、まだ遺物が発見されていません。今後、ここら辺を注意して調査したいなと思っています。ここには「高城(カミタガヨウ)」という地名なんかも出て来ます。

それからもう一つ、例の隼人の反乱の時、この生別府城が山城として重要じゃないかと思っているのです。奴久良城というのがありまして、十三塙原の空港の端の台地、弓削ヶ丘に比定する説があるようです。あれは『鹿児島地名考』を出された小幡先生が云われていることですが、私はむしろ下場の生別府城がそれにふさわしいと思うわけです。まだ未公開ですが、奈良時代のものじゃないかと思われる蔵骨器がこの山の中から出ております。

平田 ああ、弓削ヶ丘と並んでね。

藤浪 ええ、場所的にもそのような場所じゃないかと思います。これは全くの私の類推ですので論議して頂ければと思います。今まで東側の国分の方だけが注目されていましたが、西側の方もおいおい判って来つつあるところです。

以上、ただ「カタシリ」という文字のみにとらわ

れまして、関係のある資料を切り抜いて説明しました。和名抄の方後郷につながるかどうか、そこら辺はちょっと弱いのですけれども、あらましを述べて責任を果たしたいと思います。

もう一つ、云い忘れたことを付け加えます。No.2の資料です。「カタシリ」という地名が消えかかって来る時代ですが、天文十七年に本田氏が負けて逃げる時までは「小浜・賢尻」というのがあるのですが、その前の天文十一年に島津貴久公が本田紀伊守が云うこときかないもんですから、手なづけるために領地を少し与えるわけです。それが2444の史料ですが、「大隅国之内小浜名六町、同城村怒久見田十式町、西郷八町、小田名六町」と、いきなり「怒久見田」というのが出て参ります。小浜と小田の間にですね。小浜・賢尻と出て来そうなんですが、怒久見田というのが出て参ります。私は野久美田(怒久見田)の出身だから、以前から野久美田という字はどこから来たんだろうかと思っておりました。これもただ文字が出て來たので繰り返しましたが、旧記録に樺山氏が居た所の辺に「怒久水田」というのが出て来ます。怒久見田・怒久水田は地名の発生に何か関連がありそうな漢字の使い方だなと思いました。野久美田には「弘法大師の井戸」というのがあります。弘法大師が来て杖でついたら水が涌いたという云い伝えがあります。夏は冷たく冬は暖かい「ヌクミズ(温水)」が涌いているわけです。それは中山神社のすぐ下にあります。ここが昔の旧街道のところなんです。ここからも古い石斧などが出ております。いわゆる村の中心地だろうと思います。よく云われる「前田」という地名も、ここから発祥しています。井戸の付近が、うちの村の発生の場所じゃないかと思っております。

ちょっと云い忘れたので補足しておきます。天文年間に賢尻と野久美田という地名が入れ代っているような気がしているわけです。以上です。

(質疑応答)

平田 どうも有難うございました。ちょうどこの辺に住んでおられるので、一番関心のあるテーマだと思ったのです。何なりとご質問をお願いします。

二見 地図に1・2・3・4・5と番号がありますが。

藤浪 それは以前に使った番号で、今日の説明に関係のないものです。

平田 私の見解を補足として出します。1枚目の左側に和名抄が掲載してあります。その下の段に○印がしてあるところが桑原郡と幡多郡です。方後のところにサイドラインが二本入っています。これは幡多郡に入っていますが、私はこれを桑原郡に入れるべきだと思うのです。桑原郡の2行目に広田というのがありますが、これは「広西」の間違いだと思います。

そうしますと、延喜式の神社に大穴持神社というのが出て来ます。これは広瀬にあるわけです。これから広瀬は幡多郡にあったことが判ります。それで広西と方後が入れ代っていると解釈をすれば、広西は幡多郡になるし方後は桑原郡に解釈出来ると私は思っているわけです。

二見 その方後を特定させるためには、この辺の地名を全部漢字でかためてみるとどうですか。

平田 まぁ、意味からみて「カタ」というのは、新潟とか山形も同様でしょうが、「潟」ですよね。湿地帯。ラグーン。

藤浪 さっき云いました大野原辺が縄文時代：海進時代の「海」になるわけです。海がこの辺に来ているわけです。岸がだんだん後退して行くわけですから古い海岸線は鎌島神社と書いてあるこのラインらしいのです。三国名勝図会の大穴持神社付近の絵図を見ますと、よく判るのですが。

二見 ああ、浜の様子とかね。

藤浪 ええ、ここら辺はほとんど干拓地ですから

二見 中島という島があったのですかね。

藤浪 えー。

平田 それは、あったでしょうね。

藤浪 この鎌島にしても、だんだん海が後退していく過程で干潟になっているんじゃないかと考えます。

花園 ちょっと、よろしいですか。私は今ここに名寄帳を持って来ただけですけれども。今、大穴持神社のことが出て来ましたが、大穴持神社の北の方に後(がく)という所があります。その名寄帳です。二・三年前の文化祭の時に、これを展示してもらいたいとのことで持って来られたのです。文化十三年(1816)のもので「隅州桑原幡多郡国府郷福嶋村」と書いてあります。何故二つも郡名が書いてあるのだろうかと、最初は疑問を持ちましていろいろ調べてみました。小字の名前がずっと出て来ます。田園の名前ですね。先程の地図で申しますと、福島のちょっと右下のところに上小川とありますが、その「川」という字のところ。その辺に「砂ヶ町」という小字がありますが、そこは幡多郡に入るのではないかと思います。先程、藤浪さんから川筋を変えた説明がありました。昔の川筋は福島の辺で分かれていたのじゃないか。その辺で幡多郡と桑原郡との境界があったのじゃないかと考えるわけです。

藤浪 それは何年ですか。その名寄は?

花園 文化十三年。

藤浪 文化十三年なー。

平田 それなら境界が相当入りこんでるね。

二見 昔の川の跡というのは、どうやって判るのですか。

平田 「川跡」という地名が残っているから。

藤浪 小字が残っています。川原(カワハ)とか川原(カワラ)とか。

納 大穴持神社は、どっち側にあるのですか。西側ですか、東側にあるのですか?

藤浪 古い川筋で云えば、ここから山手に向って古い川筋の左側になるのですね。

平田 こっちの方に流れているのだけど、これでは広瀬は桑原郡に入ってるな。

藤浪 ここに海岸線があります。現在は真直ぐになっています。もとはこちらに流れていた。この辺が広瀬。ここに大穴持神社とあります。

二見 ああ、こっちが。

平田 川から云うと、桑原郡に入るべきだけど。

藤浪 川はこうなってますからね。この辺が暴れてるわけです。

二見 大穴持神社は、今はどっちに入るのですか

平田 延喜式では、大穴持神社は幡多郡に入っているのです。

藤浪 幡多郡に入ってるのですね。もともと大穴持神社は海岸の方にあって、不便だから上にあげたと云われます。

平田 そうだな。もっと南の方にあったでしょうね。海の中に。

二見 現在の隼人町と国分市の境界というのは、いつ頃画定するのですか。川じゃなくて何かいびつな形になっているけど。

平田 入りくんでますね。川の向うに畠があったら、渡って耕していたのでしょうから。そういう所有関係によって出入りがあるようですよ。

二見 相当激しいですね。

藤浪 国分市の方が、そこはいらないと云えばすっきりするのだろうけど。

村上 境界が決まっていない所もあるんじゃないですか。

二見 ああ。

平田 江戸時代は、桑原郡の国府郷と幡多郡の国府郷があった。現在の隼人町は国府郷だったわけだから。

藤浪 江戸時代の境界もですね、同じ国府郷の中でも、一方は桑原郡に入る、一方は幡多郡に入るというふうに書いてあります。小浜とか野久美田は、もちろん桑原郡の方に入っておりますけれども。

二見 ついでながら、大路というのは地図でいうと、どの辺になりますか。どこを通るのですか。

平田 この前歩いた所。石躰神社から登って行く道です。

二見 この地図で教えて下さい。

藤浪 石躰神社から女子大の方に登って行き、立岩、馬立から北に向かい、恐らく石原三文字あたりで蒲生に出る道と栗野・大口へ行く道とに分かれるのでしょうか。

二見 往時の大路というのは、現在工事をやっているこの道なんでしょうね。

藤浪 女子大の前。

二見 こういう所に大路があったというのだな。

藤浪 あったのでしょうか。

二見 昔はこんな正確な地図じゃないわけだから

平田 それはそうでしょうけど。それでは今日はこれで終りにしましょう。





一大永元年五月十日、堅利小田かりやにふる雨を過し、  
〔大永一年也〕「父入道」  
次之年廣久西郷江栢へ移り、宗築をかりやへ移す、か  
る程二老病といひ、入道六拾六才二而彼所

〔時久生代〕相向而彼所ニおひて

去行、拔忠兼様奉行衆之内、本田次郎左衛門尉と云惡

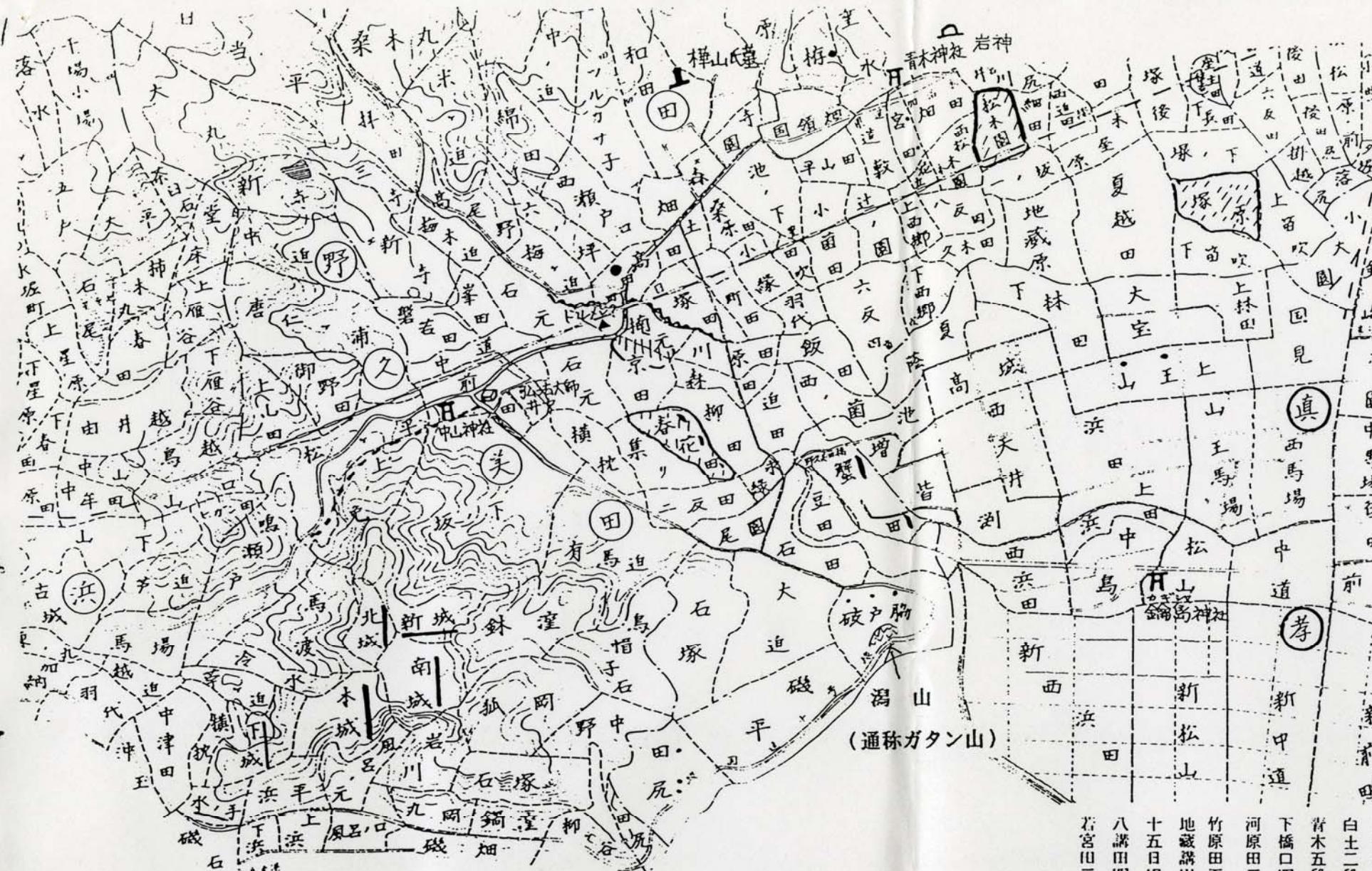
者有て、大隅曾於郡地頭を領しけるが、おくほ・河北

うす崎・持松を望取、其打替横瀬四町・帖佐・春毛

・餅田、其外爰かしに拾八町を合せ、彼四ヶ所知行す、

〔本田次郎左衛門カ〕、「以下末ニ載ス」

桃山にのみならず、惡逆諸人歎之、「以下末ニ載ス」



小浜・野久美田・小田 小字図

十五町ニ而可致御奉公御懇意之處に、紀州又々起逆乱  
北原・禪答院・加治木へ云合、終不叶清水没落ス、探  
清水へ日新様被成御座、伊集院和州地頭ニ而源木を賜、  
又五郎・谷山の山田を給、其折桜山へ奥之洲大野原、  
奥之洲西郷之中道を堺に給る、小浜・堅利之社家領如  
御約束之折進す、四足所望之折、若腹を切延ニ者、以  
被成御返進、今度之爲忠節、追方へ田中半坂、敷根方  
持、今之上井方、下村方名被下、日新様生別府へ御光  
儀有之、改生別府之名を長濱と被仰下、

正応四年(一二九一) 鎌倉時代

『入來家臣田中氏蘿』

坪付

大隅之國堅尻名之内

一ヶ所

春毛ノ門

四反

はるけ田。

一反卅

なかやま

卅

かに田。

卅

井手の下

以上

畠地六反

惣以上八反

天文拾七年卯月廿六日

忠朗

本田紀伊守

常樂會田四段小河、智能、姬木、聖西入道寄進、公事無之、  
玉丸八段宮水名田、佛阿弥陀佛井ニ妙阿弥陀佛寄進、御配  
秋原五段糸丸耗田、真悅房寄進、公事無之、

竹原田五段重武内、國體御所作動之、智因用途升之、但

上通渡五段重武内、國體御所作動之、智因用途升之、但

満副五段重武内、國體御所作動之、智因用途升之、但

下通渡五段本名上同、加治屋土佐公委、上通渡同、

満副五段重武内、國體御所作動之、智因用途升之、但

固尻四段宮水名田、永海委託阿弥陀佛寄進、

造花田三段恒次、委託阿弥陀佛寄進、公事無之、

副柳五段宮水名田、智得名、石集御房忌日、公事無之、

白土一段重武名、内楊房寄進、智因用途升之、但

青木五段重武名、智得名、若葉御房忌日、公事無之、

下橋口四段重武名内、清正、宗房田所寄進、在國免、

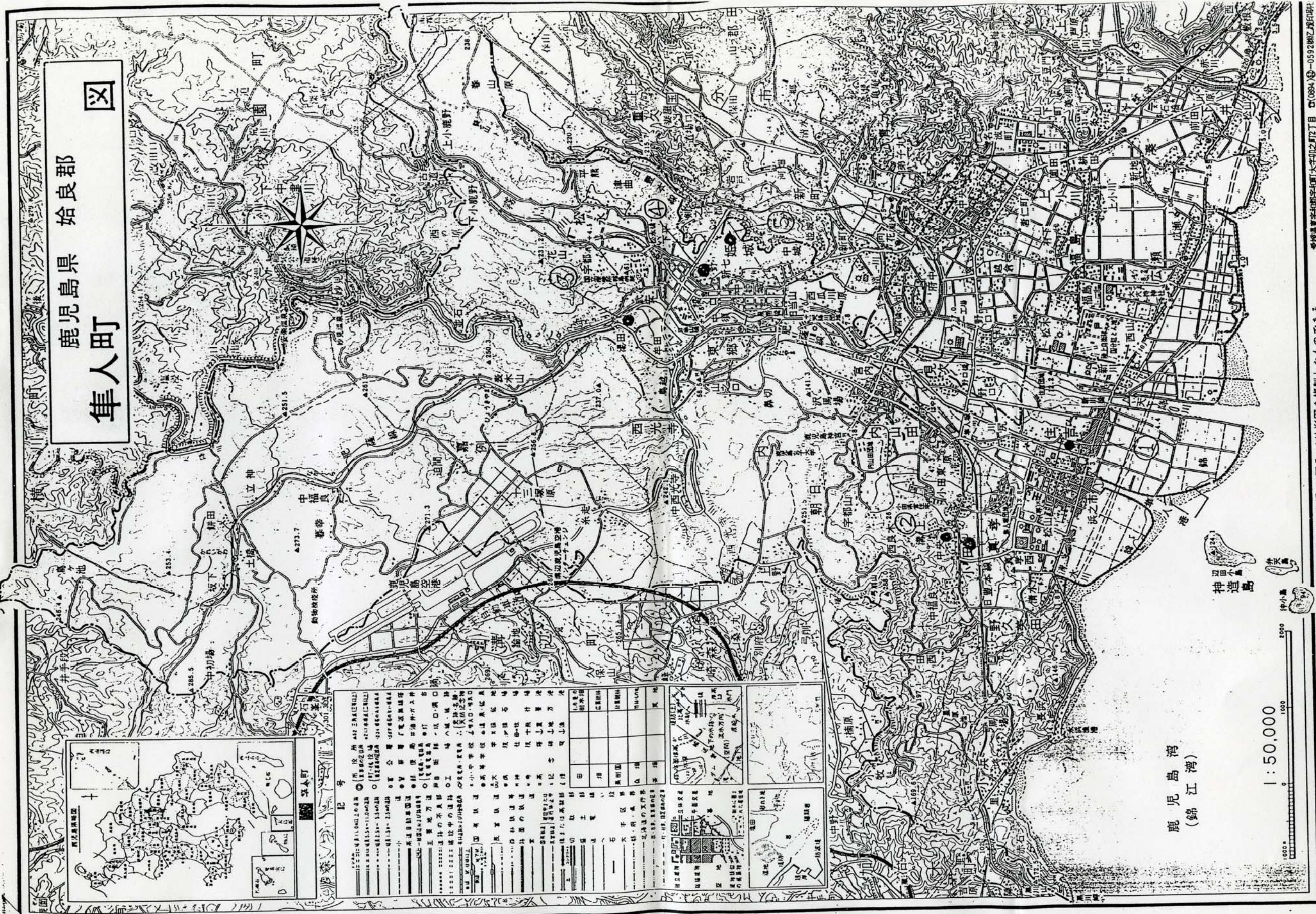
河原田二段弟子九名、國策、西阿弥陀佛寄進、真性ノ祖母、  
十五日田一丁二段内恩德名、行祐寄進、一丁恩田、

竹原田五段主丸名、内明房寄進、公事無之、今者宇彌田、  
八講田四段任田、智得名、真智御房寄進、在國免、公事無之、

若宮田二段任田、智得名、若葉御房寄進、公事無之、

隼人町

郡良始縣島兒鹿



## 宮坂麓～鳩脇巡検

鹿児島地名研究会

I. 日時 平成4年11月23日（土）

場所 隼人町歴史資料館・宮坂麓・隼人塚・伽藍神社・野久美田橋・鳩脇

（参加者） 荒田義国・石塚正規・市来亦久・市来政哉・江之口汎生・小野義博・小原親英・谷口純男・鶴丸俊正・肥後芳尚・平田信芳・藤浪三千尋・二見剛史・鉢之原矢七・本田潔・山崎盛隆

（計16名）

### 隼人町歴史資料館での趣旨説明

平田 今日は去年に引き続いて国分平野の巡検をするわけですが、去年は大隅国府：国分の方を中心になりましたので、今年は隼人町の方の話をします。

今年の三月、『鹿大史学』に小園先生が「大隅国の駅路について」という論文を書かれました。長門本平家物語に俊寛が流されて来る道が詳しく書いてありますが、それをもとにして考えた論考です。俊寛がどういう経路を通って流されて来たかというと、都からの逐一は省きますが、伊予国から豊後国に上陸し、さらに舟で南下して日向國の大淀川河口あたりに上陸、山越えて島津荘：都城に来ます。都城からは夏影・赤坂・止上と通って、景色の森に来ております。今日の集合場所：参宮橋の所で説明すれば景色の森はすぐそばに見えたのですけど、景色の森からこちらに向かって大津の渡し、恐らく参宮橋のあたりに渡しがあって、そこを渡った。そこからの道が参道と一致していたか、平行していたかは判りませんが大体道がこの辺を通っていたと考えられます。（以下は隼人町歴史資料館の航空写真をもとに説明）

ここが参道。ここが日豊本線で、これが肥薩線。ここにいわゆる隼人塚があります。ここに、南北の真っ直ぐの道が認められます。この道がくさいなど思います。というのは、景色の森、その次は正八幡宮を右手に見て鳩脇に出ます。鳩脇というのは清水（みず）にあります。鳩脇から舟で木入（喜入）に行

き、そして坊津に出ています。坊津からいわゆる鬼界ヶ島：硫黄島に流されています。坊津が最後の出発地になったのは川辺郡司千竈氏がそれにかかわっていたからとみられます。千竈氏はのちに鎌倉の御家人になりますが、それ以前から川辺郡司としていわゆる十島を支配しており、そこに島流しになつた人たちを送る役目をになっていたと思います。長門本平家物語に書いてあるこれらのルートは長門本にしか出て来ないのだけど、ある時期の大隅国の大道路を示しているものとみなされます。段々大隅国の大官道が明らかになって来るようです。

鹿ヶ谷の変は1177年ですから、800年以上前の話になります。俊寛たちは島津駅（都城）から入戸を通って国分平野に出て来たようです。入戸はこの地図ではどの辺になるかな。まだずーっと上ですね。そして、この川（手籠川）と並行して下って来たとみられます。この道ですね。こっちの方を通って、景色の森すなわち府中にたどり着いている。府中というの、大体鎌倉時代から国府に付けられる地名ですから、ここが大隅国府であったことは間違いないのです。

史料的にみると平安末の文書に「武安」という地名が出て来ます。武安は霧島病院付近に現在でもその地名が残っています。これは松永川です。松永川から始まる松永用水路というものが、ずーっと府中まで流れています。そして、松永用水路の原型というものは、中世には出て来ています。武安

の説明に「国衙に引水口」という記事が出て来ますので、ここから水を引いたのだなということが史料的にもうなづけると同時に、16世紀初め大隅国衙がここにあったことを示します。そして大永七年といふと1527年ですが、清水城主本田董親と正八幡宮が争います。昨年、大河ドラマで「足利尊氏」がありましたが、これと同様のいわゆる宮方と武家方との争いです。本田董親は武家方です。宮内の留守殿すなわち留守氏、守公神社の調所殿、これらが宮方すなわち公家方になります。その争いで武家方が守公神社を焼き、鹿児島神社を焼き払っています。その時のこと記述した文書に「国衙守公神社」という言葉が出て来ますし、「こう（国府）の殿」も逃げたという記事がありますから、史料の上から当時ここが大隅国府であったことは動かないのです。そして、その頃が大隅国府の最後になります。16世紀はじめに大隅国府は完全に壊滅します。

私が此処を大隅国府だと主張する理由の一つは、ここに守公神社があること、さっき述べた「国衙守公神社」という史料もあること。それから東南の方に国分寺があるし西南の方には隼人塚があります。こちら（西北）の方には鹿児島神宮、そしてこちら（東北）の方には台明寺という寺があります。鹿児島神宮は弥勒寺。台明寺と国分寺。こっち（西南）に国分尼寺があれば、四方の守護がきちんと揃うわけです。その意味で此処に大隅国府があったことは間違いないと思います。

ただ大隅国府というのは、何度か焼き払われています。例えば720年の国守楊侯史麻呂が殺されるいわゆる大隅隼人の反乱です。その時も捲き込まれたと思います。それから島津庄を開かれる頃になりますが、大宰大監から下向して来て島津庄を開いた平季基が大隅国衙を焼き払った史料も最近注目されるようになりました。

大隅国府は、和名抄では桑原郡にあったとなつて

いるのです。天降川を境にして鷹嶽郡と桑原郡に分かれるわけですが、この府中が鷹嶽郡にあったか桑原郡にあったか疑問になって来るのですが、まあ鷹嶽郡にあったとみてよいでしょう。桑原郡にあった国府は別に考えなければいけないと思います。これはまだ謎です。どこかに桑原国府を考えなければならぬのですが、これは未だ判りません。

それから、今日のねらいにはもう一つあります。そこにも康治元年（1142）の仏像があります。これは藤浪さんが見つけ出したものです。大隅国分寺石造層塔には同じ年の康治元年壬戌十一月六日の銘が入っています。その十年前の天承二年（1132）、大隅正八幡宮が大隅国府・大宰府を通して中央政府に訴えた公文書があるのです。どういう訴状かというと八幡宮の丑寅の方角、ちょうどこっちになるのですが、約数町のところに石躰が現れたという内容です。大きな石が割れて、その中に「八幡」という文字が書いてある、と。だから、こちらの方の八幡が正統だということを訴え出たわけです。宇佐八幡と正統争いをするわけです。そういう争いの史料が石清水文書の中に残っているのです。その中にこんな文句があるのです。「往古の大路、宮坂の麓に石躰が現れた」と。そうすると、此処が石躰神社です。宮坂というのは、ここから鹿児島女子大学に登って行く道になります。これが昔の大路。大路は駅路だったということです。

二見 十三塚原の方に行くのですか。  
平田 それはまだ判りませんけど。これは重要な史料だと思うのです。「往古大路宮坂麓」という地名が出て来ますから。宮坂の麓から真っ直ぐ東に行けば大隅国府です。大隅国府につながるこの駅路は、大津の渡しを通って宮坂に来る。そして女子大の前を通って立岩（たていゆ）・馬立（また）のルートに出て来たことは間違いない。従来は鹿児島県の駅路を求める場合、蒲生駅とか市来駅とか網津駅とか、

そういう地名だけ出て来て実際はどこも抑えられていなかつたわけです。この宮坂だけは線で出て来たわけですから非常に貴重な場所だということです。

それで考えなければならないことは、昔の大路ですから、1132年には駅路ではなくつていたということ。そうすると海岸の方の道に変つたのかということになる。浜之市から鳩脇、さらに長浜の方に出なければならぬ。しかし、海岸を通る道はあまり考えられない。昔は川を渡るのが面倒なので、山手を通るのが普通なんです。それを考えると鳩脇という所は海を舟で行く出発点だったことになる。

鹿児島神宮がここです。ここに隼人塚があります。隼人塚の後を通って真っ直ぐ小田の方へ抜ける道があります。この山道の方が古道としてはいいのじゃないかと考えます。今後、追求していい道だと思ひます。

さっき云った入戸の方を通って来る道。この道は俊寛たちが通つて来たということで、確かな面もあります。これがどこで川を渡るのか。重久に渡つた方がいいのでしょうか。ここにも真っ直ぐの道があります。昔の官道というのは案外真っ直ぐだったようです。

古代の官道の幅は大体12m。そして、ちゃんと構が設けられている。九州の方の官道は、まだ報告書は出でていませんが、新聞記事によると、筑後国府辺の官道が幅7m.ぐらい。やっぱり真っ直ぐの道路です。薩摩国あたりになると、7m.になるのか5m.になるのか。それはとも角として、奈良・平安時代の道は大体真っ直ぐに作られただらうと思います。

そういう意味において、景色の森からここまで、俊寛たちが真っ直ぐ来たことは確かですね。景色の森からこちら側に渡つてこの道を通つたことが考えられます。今日は此処を歩かなければなりませんが、大体この線が江戸時代までの海岸線です。そうすると、平安時代の海岸線というのは、ここで一段高く

なつていると思うのです。鹿児島高専の南側の道路、恐らくこれが平安時代の海岸の道路だったと思うのです。今日はこの道を歩いてみようかと思っているわけです。

二見 俊寛が追われたのは何年ですか？

平田 1177年。宮坂麓という記録が出て来るのは1132年です。その頃はもう昔の大路と呼ばれるわけですから、道が変つたと思うのです。

二見 東に出るのですかね。

平田 その辺は今後の課題ですけども。要するに大隅国府は鷹嶽郡の国府だったと思うのです。桑原国府はどこにあるのか判りません。もう一つ探す必要があると思います。

？ 桑原は、まだずっと向うの方でしょう。

平田 桑原郡は、この天降川から西で、横川・溝辺・隼人・加治木。それから帖佐・吉田・蒲生も入ります。桑東郷・桑西郷もそうですね。桑東郷は隼人町に東郷という地名があります。桑西郷が消えてしまったのですね。その桑西郷から、西郷という苗字が出て来ます。それが西郷さんの先祖だと思います。現地に出る前に、何か質問はありませんか。

二見 大隅国府というのと、鷹嶽郡の国府というのはどういうことですか。

平田 大隅国府が贈於郡にあった時代と桑原郡にあった時代とがあるのです。二つを考えなければならぬのは、和名抄に「久波々良國府」と書いてあるので桑原郡にあったことは間違いないのですが、色葉字類抄は桑原国府と曾於府を併記、拾芥抄は贈於郡に国府があると記されているのです。国府が動かず、昔の天降川・手籠川はこのように流れていたはずですから、ここからが桑原郡であれば郡界の移動ということで解釈できるのですが、桑原郡であった時代もあり贈於郡であった時代もあると解釈出来れば全然動かずに済むのですが、色葉字類抄に二つ書いてあるので別々だと考えざるを得ません。

? 川の流れはこっちに来ていたわけでしょう。

平田 こうですよね。

? 1600年代に現在のように流れを変えた、川筋直しがあったと云いますから。

藤浪 しかし川筋は、さっき集合した所から真っ直ぐに引いてるはずですから、こっち側は變ってはいないと思います。

平田 ここから引いている?

藤浪 参宮橋から真っ直ぐ引いていますから川の問題はあまり考慮しなくともいいのじゃないですか

平田 最初はやっぱり幡多郡にあったと思います。一時桑原郡に移った時期があり、それが和名抄に書かれている。そして、こっちに帰って来ると思うのです。

藤浪 藤井先生の説: 真孝(新国府)説、あれはどうですか?

平田 あれは「新講經免田」に由来すると、九大の大学院の学生は否定した論文を出しています。もし真孝にあったとしたら、どこに国衙を求めるかだよね。

藤浪 まあ、台地はうまい具合に——。

平田 広がっているわけだよね。そして、その後の山は弓削丘。あれは太宰府のうしろの大野城の山とよく似ているしね。

それから、もう一つ古代の駅路のこと。国と国とを結ぶのが駅路です。それから国府と郡衙を結ぶのが伝路です。駅馬と伝馬とがありますが、これがダブっているものと全然別の場合とがある。それと郡と郡とを結ぶ郡伝路というものと、その三通りを考えなければいけないです。從来鹿児島の歴史家は駅路も伝路も一緒にして、あっちだ、こっちだと考えて来たのです。

それからもう一つ、大隅国での重要な問題点は、大隅国府の近くに、和氣清麻呂が流されて来た、恐らく流されて来た場所だと思うのですが、稲積城と

いうものがなければならないのですね。桑原郡には稲積郷というものがあります。これは稲積城と関係がある郷名だと思うのです。その稲積城がどこにあるのか、というのが問題だと思うのです。今まで牧園に和氣清麻呂が流されて来て、稲積老という老人に世話になったというのが通説です。和名抄を見る限り、牧園は明らかに仲川郷(中津川郷)ですから、稲積郷とするにはちょっと問題があります。

7世紀の末に鞠智城・三納城・稲積城を修理したという記録が『続日本紀』にあります。そのうちの稲積城と三納城は、どこにあるのかまだ判らない。鞠智城は現在大がかりな調査をしています。その頃の政治情勢から考えると、隼人を抑えなければならぬ時期ですから隼人を抑えるための重要な城が稲積城であり三納城であったと思うのです。三納城は、日向国府: 西都に近いところだと思います。逆説的に云うと、三納城から日向国府が発達して行ったと思われるし、稲積城から発達するものが大隅国府であったと考えられるわけです。そのように解釈出来れば一番よいのですが、そう簡単にはいかないのが現実です。稲積城がどこなのかまだ判りませんが、この近くにあるのは間違いないと思っています。溝辺あたりに稲積城があれば都合がよいのですが、大隅国府、稲積城、そして大水駅とつながったら、大隅国府と大水駅の間が開きすぎていますから、うまくつながるのだがと思ってはいるのです。溝辺町か隼人町あたりのどこかに稲積城の跡がないかなと思っています。

二見 稲積城というのは、年代はいつ頃?

平田 7世紀末です。

二見 大体の位置としては山の方に——。

平田 当然、山ですけどね。現在、鞠智城を発掘しておりますから、それと似た形態ではあったと思うのです。

二見 溝辺城の支城というのが何ヶ所かあると、

聞いたのが子供の頃の記憶になっているのだけど。

平田 長々と話をしました。今から歩きましょう  
石躰神社(宮坂麓)

平田 さっきの話の続きをしますと、八幡の本家争いで宇佐八幡と大隅正八幡が争うわけです。宇佐八幡の神人たちが密命を帯びて大隅正八幡を焼き払いに来ます。その十三人の密使たちが逃げる時に追いつかれて殺されますが、それが溝辺の十三塚になるわけです。その時、干していた大根葉(ケンガ)に火をつけて鹿児島神宮を焼いたので、溝辺の人たちはそれ以来、大根葉の干したものは食べないようになったという云い伝えがあります。これは溝辺郷土誌に書いてあります。

二見 十三塚の原型は残しとけばよかったです、今になって悔まれていますよ。現在は一ヵ所にまとめてありますけど。

平田 そういう伝説にしても、豊前国からやって来た密使たちが通って来た道が、この宮坂であったことが考えられる。

二見 そう思いますよね。あの辺に立ってみれば

平田 馬立から向うに登って逃げようとしたわけ

でしょうね。

二見 どっちを登ったか? 朝日の方? それとも神宮裏の方?

藤浪 上に出る道であれば、ここを通っている。

平田 この道を通ってあがるだろうな。

藤浪 逃げ帰るとすれば、ここだろうと思います

平田 この道は昔の駅路になるわけです。元気があればここから歩けばいいのですが、それは女子大の先生たちにお任せします。馬立から先にどう行くか。蒲生の方に行くのか、石原三文字まで行って下って来るのか。それとも、まだ先まで行くのか。石原三文字まで行って下って來るのが自然かも知れません。そうしたら、石原三文字の近くに稲積城があれば都合がいいことになるのだけれど。

? 蒲生と市比野の間があまり遠いから、その中に駅を置いてもらいたいと申請したということも

平田 それは田後駅と蒲生駅の間です。

? 田後だったですかね。樺野駅が出来たのは。

平田 田後駅と蒲生駅の間に樺野駅が出来るのです。蒲生から市比野のルートを探すのも一つの仕事でしょうし、蒲生から大隅国府に出て来る道を探すのも一つの仕事になります。昔の大路ということはこの道が蒲生駅につながっていたと考えるのも一つの解釈でしょうし、大水駅につながっていたとみるのも一つの解釈です。

二見 昔の道は起伏があったのでしょうか。

平田 川を渡るよりも山の尾根を通る方が早いのです。また、シラス台地の場合は崖っぷちを通って行くのが一番早いわけです。昔は川を渡るのにどうしても浅瀬を知ってなきゃいけませんからね。石躰神社の説明はこれくらいにしましょう。此処はお宮詣りをする場所ですね。石を一つ持つて行って、安産した後、二つ返すのです。石躰から「イワタ」に訛って岩田帯が出来たなんてのは、隼人町郷土誌に書いてあったのかな。(笑い)

藤浪 讀藩名勝考は、お産のことは触れてなくて戦争に行く時とか旅行に行く時に石を持って行くというようなことが書いてあります。藩主のお供に石を持って行ったとかですね。お産は近頃になっての話です。

平田 駅路に沿った宮坂麓だから、旅の時に石を持って行く可能性はありますね。

? 安全を祈願する——。

二見 どこの石を持って行くのですか?

平田 此処(拝殿のうしろ)ですよ。此処の石を持って行って、用が済んだ時に一つ足して返す。

隼人塚

平田 藤浪さんが地図を準備されました。ご利用下さい。現在居る場所は、此処です。日豊線と肥薩

線が書いてありますから。

藤浪 塙小路(ラコス)というのがあります。

鉢之原 どこですか?

平田 塙小路とあるでしょう。

鉢之原 塙小路な。はい、はい。

平田 それと、山跡。ここに「山跡」という地名があるから、松下先生はこの辺に邪馬台国があったとして卑弥呼の銅像をもって来たわけです。故事つけは故事なりに卑弥呼の銅像をもって来た理由があるのです。山跡(ヤト)という地名を利用したのです。塙小路は、ラチコウジと読むの、ラチスッという?

藤浪 ラチコウジと云っています。

平田 ここからずーっと南に下って行って、高専あたりで西の方に折れると思うのです。そして山王馬場・山王上を通って、高城。タカジョウ、タカギかな。これ(皆淵)は、カイブチかな、ミナブチ?

藤浪 皆淵(ミナブ)と云います。

平田 皆淵を通って、川に出て来る。

藤浪 これは清水川(ミガカリ)。

平田 この清水川の西に破止脇(ハトツ)。破止(ハト)というのは、いわゆる「港」。ここから俊寛たちは舟出して喜入に向かうわけですね。喜入は木入津と長門本には書いてあります。山王は日吉山王社ですが、猿が神の使いになります。猿は家畜の神様ということで山王神社は駅路とか伝路には必ず出て来る神社のようです。山王という神社が出て来れば、その近くに道路があったということになります。この字復元図は大事なことを示しているようです。

江之口 山王信仰が全国に広まるのは12世紀頃のようです。それ以前は日吉からあまり動いていないようです。川内の高江に一つあるのですが、あれが鹿児島県で一番古いようです。山王田という地名が出て来ますが、1180年頃です。それが鹿児島県で一番古い「山王」です。ある程度のさばをみて1000年

頃に入って来た信仰だろうと思います。

藤浪 台明寺も、日枝神社ですね。

平田 あれは入りから大隅大川原へ抜ける道の南側になります。

藤浪 日吉神社は天台宗とも結びついてます。

平田 そうですね。それは史料的に整理する必要がありますね。一息ついたら次へ移動しましょう。もう12時前ですよ。

江之口 正八幡の別当寺はどこにあったのですか

藤浪 別当寺は宮内小学校の所。

平田 別当寺は弥勒寺。鹿児島神宮の階段を降りて、すぐ左側。

山崎 鹿児山というのは、遠いのですか?

藤浪 鹿児山は、その辺。此処から向うは鹿児山

山崎 平地ですか?

藤浪 平地ですよ。

山崎 山地じゃないのですか。

藤浪 山と云えば獅子尾。鹿児島神宮のうしろの山だという人もいますが。

平田 塙小路と小田・野久美田へ抜ける道との交差点に隼人塚があった可能性があるね。そしたらこれは一つの信仰の対象だったと思わなきゃいけないのじゃないかなあ。浜に行く道と山裾を野久美田の方へ抜ける道の交差点が、この隼人塚の位置だということです。

江之口 この塔はどっちかというとお寺ですよね神仏混淆があったにしても、あんまり。

平田 これは本来正国寺にあったものです。『三国名勝図会』には正国寺跡に五重塔二基と四天王像があると書いてあるから。

以後、歩くのが勞一杯で二々豆となり組織的に説明は出来なかった。

伽藍神社→清水石橋(野久美田橋)→破止脇。

破止脇で解散。

# 地名研究会報

第40号

平成5年12月5日

鹿児島地名研究会

I. 第40回例会 平成5年3月7日(日)

(出会者) 青柳俊二・池田信夫・上野亮史・小川亥三郎・小川秀直・江之口汎生・大田照夫・  
納栄蔵・木場武則・小原親英・鈴木順一・能勢正之・肥後芳尚・平田功美子・  
平田信芳・二見剛史・松田誠・山口静也(計18名)

II. 讀藩名勝考読会 P.134 ~ P.138

(話題となった地名および事項) 河伯と陰陽五行説・踊・犬飼・桑原郡八郷・神社(じんじゃ・じんや)

## 河伯と陰陽五行説

納 問題点があったら出して下さい。細かい字で  
書いてあるところは、何か新しい時代の作り話の  
ようです。調子がいいですから。

納 河伯というのは、ガラッパのことですか。

平田 カッパ(河童)です。

納 ガラッパが悪さをするから、女人を犠牲に  
するというかーー。

平田 そういうことをしていたわけですね。雨が  
降らん時に雨乞いのために河童を祀っていて、若い  
娘さんを犠牲にする、ということ。そういう惡習を  
清麻呂がただしたということです。

納 そうであれば、いろんな土木工事でーー。

平田 ああ、人柱ですか。

納 土木工事の時に、人柱として入れるという話  
がありますね。あれと似たようなものですか。

平田 江之口さん。川内川の人柱の話と結び付けて、どうですか?

納 これは陰陽道から解釈出来ないのですか?

平田 何でですか?

納 その頃すでに陰陽は入っていたわけですね。

平田 人柱のことはよく知らないのですが、どなたかご存知ないですか。——むしろ、納さんの方が人柱とか陰陽とかに関心がおありのようですから

今までお聞きになったことを説明して頂ければ有難いのですが。

納 陰陽道から云った場合、普通すべてのものは  
木・火・土・金・水に分かれるのだ、と。人間の場合  
は「土」になります。そして、三極と三老、相生  
・相克というものがあります。木・火・土・金・水  
の場合、水は木を生み、木は火を生み、火は土を  
生み、という流れがあるのです。相克というのは、  
土は水を克する、制するということ。人間は土です  
から水を克する。水を堰止める、そういう力がある  
から人柱を入れるのだ、という説明を聞いたことが  
あります。

平田 ああ、木火土金水。  
納 木火土金水の流れを相生(そうじょう)と云います  
木は火を生む。木と木をこすり合わせると発火する  
と。発火すると灰になって土になる。その土から金  
が生まれ、金から水が生まれる、と。そういう流れ  
が陰陽道にあるのです。それともう一つ、相克と  
いうのは、土は水を制する。土は木に克される、と  
いう流れもあるのです。そういう陰陽道から出て  
来たのじゃなかろうかと思ったのです。  
平田 ああ、そうですか。どなたか、他に関係のある  
あることをご存知ないですか。私はさっぱり判らない  
のですが。まあ、人柱の話は江戸時代まであった

でしょうね。

納 それから、特に漁船の人々は上左衛門ですかいわゆる——。

平田 水死人？

納 水死した人たちに出会えば魚がよく取れると継起をかつぐらしいですね。豊漁だと云いますね。そして、その死体をあげるにはしきたりが、難しい儀式があるらしいのです。

平田 はー。

納 そういうのは地名と関係ないのですが。

#### 早鈴神社・踊・犬飼・安楽

平田 早鈴神社は小浜にあります。島津義久が雨乞をしたと云われている神社です。踊郷、本城の名前が踊城であったので、踊という、と。犬飼、中村明蔵氏は「大伴氏と犬飼という地名とは関係があるのではないか」と云っておられます。136ページにて来る可愛湯。これは可愛山陵などの影響で後から付けた名前です。安楽というのは安樂寺領と関係があるのかなと思います。太宰府天満宮関係が安樂寺、それから宇佐八幡系統が弥勒寺です。鹿児島県には安樂とか弥勒という名前があちこちにあるようです。

桑原郡の8郷

平田 稲積というのは、桑原郡に8つの郷がありますが、その中の一つだと思います。大原・大分・豊国・答西・稲積・広西・桑善・仲川の八郷になります。桑原郡に関係する現在の町村をあげてみると吉田町、昔の吉田は大隅国所属でしたから。蒲生町、始良町、加治木町、隼人町、溝辺町、横川町、牧園町。桑原郡の範囲に現在自治体が8つありますから8郷と8町とうまく対比出来るわけです。大原郷は吉田町に大原という地名があるから、これは結びつく。これらの中で一番豊かな所は帖佐か加治木辺と考えられますから、帖佐か加治木あたりが豊国郷になるでしょう。広西は鰐喰郡方後郷と入れ代っていると思います。これ（方後郷）は隼人町だろうと

見当がつきます。広西は日分市広瀬だろうと思ひます。仲川は牧園町に中津川という大字があります。大分郷は、宮田ヶ丘に瓦窯跡が数基ありますから豊後国から来た人たちが瓦の技術を伝えて移り住んだと考えると、始良町あたりになる。答西郷というのは始良町山田に、当歛(トウ)町という地名があります。山田も一つの独立郷と見れば、始良町山田になるわけですね。ただし、歛町というのは畠の単位でもあり、問題を含みます。それから桑善郷。これは隼人町日当山あたりだろうと考えられます。稲積郷は残りの溝辺から横川あたりに落着いて来そうですここ（稲積郷）に稲積城があったと考えなければならぬと思うのですが、まだ探し出せていません。牧園町に稲積伝説があって、稲積老という人がいて牧園に和氣清麻呂が流されて來たという考え方が一般的なんですけれども、仲川郷を牧園に当てるわけですから稲積郷は宙に浮く形になります。その意味でも稲積郷は大きなテーマだと思います。

それから、もう一つ考えていることですが、この例会で駅路のことを何度も取りあげてきました。大隅国には大水駅と蒲生駅の二つしかなく四苦八苦させられているわけですが、大水駅はやはり菱刈郡大水郷と結び付けなければいけませんので、大口を考えざるを得ません。大水駅は大隅大川原だという小説説が出て来ましたけど、私は大口説をとります

去年の巡査で行きました「往古大路宮坂麓」いわゆる石肺神社の所から溝辺の台地にのぼって、横川を経て「大水駅」に出る道が考えられるわけです。それから石原三文字・高屋山陵あたりで加治木の方に下って来る道、蒲生への道がある。また、栗野に出て真幸に出る道も考えられる。そうなるとこの辺に稲積城があって大隅の隼人たちをにらんでいたと考えられるのじゃないかと思うのです。ここに稲積城があれば大隅国にもつながるし、薩摩国に抜ける道もある。こちらに出れば日向国に行くし、大水駅

を通って肥後国にも抜けられる。そういうルートの上に稲積城というものが7世紀末にあったのではないか。稲積城の位置はまだ判らないのですが南九州にあったと考えるのが意味があるのではないか、と考えます。

二見 石原三文字からどういうふうに越えるのでしょうか。ダムのあたりですか。

平田 現地をよく知らないので。

二見 あそこに昔から、とにかくあるのですよ。高松城というのがあって。

平田 その辺は今後歩いて確かめたいと思います

二見 馬立から石原三文字に行く途中に高屋山陵とは別に溝辺城と云っている所があるのですね。他にも山城が四つぐらいあると思うんですけど。竹子にも一つ山城がある——。

平田 溝辺に限定しなくてもいいわけです。溝辺と横川あたりにですね、何かいい山城がないかなど思うのですけど。

二見 見晴らしのよい高松城あたりじゃないかと気もしますけど。

平田 二見先生は溝辺の方ですから、暇な時に探して下さい。3月27日・28日、国学院大学の木下良教授に2日間つきあいました。10日ばかりの計画で

九州の駅路を回るのですが、その中の2日間薩摩国と大隅国をつきあつたのです。その時に蒲生駅の候補地とされる下久徳の禁中という所がありますが、そこを見ました。これは一昨年、奈良女子大学の武久義彦教授が航空写真を解析して見当をつけられた所です。表面に遺物の散布も見られますし、蒲生駅の可能性は大きいと感じました。大隅国の中は段々線となつたつながって来るのではないでしょうか。その時、新留峰にも登りました。禁中はつぶされてはいけないと思って、昨夜、蒲生の町長さんに手紙を書きました。

今年の歴史の道の調査は、大隅国になっています

から、その時にまとめたいと考えています。

#### 神社(じんじゃ・じんじゃ)

平田 以前例会の席で浜崎さんが「じんじゃ」か「じんじゃ」かという問題提起をされました。それをプリントにまとめてみました。私が持っている『廣辞苑』（初版）は昭和30年に出了のですが、これを引くと全部「じんじゃ」になっています。息子が持っている第二版。昭和51年に出了のですが「じんじゃ」に全部變っています。私が持っている『廣辞苑』はすべて「じんじゃ」なんです。「あたごじんじゃ（愛宕神社）」「ひえじんじゃ（日吉神社）」、そんなものまで全部「じんじゃ」となっていますから「じんじゃ」という表現があったと思うのです。県立図書館で歴史辞典・大百科辞典・国語辞典、あるだけのものを全部調べましたら、現在はすべて「じんじゃ」になっています。理由は『日葡辞書』に“J i n j a”とあるから「じんじゃ」。私の持っている文政九年（1826）の『節用集』をみると、これまた「じんじゃ」です。『日葡辞書』に“J i n j a”とあり『節用集』にも「じんじゃ」とありますから、「じんじゃ」じゃなくて「じんじゃ」というふうに変えられたということが理解できます。

そこで「神(じん)」と読むものと「神(しん)」と読むものとに分けてみました。そうしたら圧倒的に「神(しん)」が多いのです。「神(じん)」は、神社・神宮・三種神器・神武天皇・崇神天皇・神功皇后とすごいものばかりです。それから怪神・鬼神・水神・天神・風神・雷神などです。（2）は、「神(しん)」と読むものです。

「社(しゃ)」と読むものは神社と総社しかありません。「社(しゃ)」と読むのは会社・官幣大社・郷社・社会・社説など、プリントにあるようなものです。「社」を離れて「じゃ」と読むものを引いてみると（4）になります。兄者・行者・隠者・王者・

問者・冠者・検者・信者・選者・表者・尊者・点者  
・忍者・貧者・夙那・論者、何じゃもんじゃ、何か  
あーじゃ、こうじゃと云つてますが（笑い）、(4)  
の「じゃ」を眺めると、これはどう見ても室町頃に  
流行った言葉だなということが判ります。

鹿児島県では普通「じんしゃ」と云います。照國  
神社(てるくにんしゃ)とか諏訪神社(すわんしゃ)と。ところが  
全国的にみると辞典で「神社(じんじゃ)」に強制的に変  
えております。鹿児島でも「神社詣(じんじゃおり)」の  
場合は「じんじゃ」と云つておるようです。一般的  
には鹿児島では「じんしゃ」。「じんしゃ」という  
表現はこのように整理してみると、やっぱり古い言  
葉であったと判ります。『広辞苑』に「じんしゃ」

が残っていたのも偶然ではないなと思うのですが、  
力づくで「じんしゃ」が「じんじゃ」に変えられて  
いるということが、こう云つた整理をして明らかに  
なって来ます。

去年の夏、浜崎さんが問題提起をして、方言では  
「じんじゃ」というのではなかろうかということ  
でしたが、鹿児島だけに「じんしゃ」という表現が残  
っていたと云えます。総社が現れて来るのは鎌倉時代  
から室町時代ですから、それ以後に「社(じゃ)」と  
いう表現が出て来たと解釈出来るようです。

前半はこれで終つて、小川先生に譲ります。5分  
ぐらい休憩しましょう。

## 提(さげ・さけ)という地名について 付、幸毛郷

小川亥三良

サケ・サゲという地名について説明します。付け  
たりとして幸毛郷についても、その後で説明します。  
地図が3枚と写真のコピーが2枚あります。まず、  
地図の説明をして途中で随時写真の説明もします。

1枚目の地図の(1)鹿児島県熊毛郡中種子町大字  
坂井中田の提(せ)という地名。これは集落で、この  
坂井という所は海拔120mから140mぐらいの高原的な  
地形になっており、ここから国道を南下すると急に  
落ち込んだような盆地が現れます。そこが中田とい  
う所で、盆地の底にはかなりの平地があります。田  
園もあります。全体が中田ですが、中心集落を特に  
中田と云い、その周辺に小さな集落があります。提  
(せ)という集落もその一つです。この提(せ)とい  
う所は海拔90m、くらいの所で、海岸の0m.と比べると  
90m.の落差があるわけです。提の付近までは流れも  
ゆるやかですが、提に来ると急に流れが急になつ  
て来ます。流れが早くなり、そして狭く細長い谷間を  
形成します。この提という所は谷川の上流に当つて

いるわけです。写真はAの①、左の方に道路が出て  
いますが、これは坂井から中田に下る坂道をちょっと  
と下った所です。向うにはっきりしませんが集落が  
あります。右側の写真に、橋があります。橋の向う  
が提(せ)という集落です。川は「くはま川」、橋は  
中田橋(ゆだい)です。川は左から右の方に向かって  
流れおり、やがて谷になります。

次の(2)、曾於郡志布志町大字四浦提口(せくくち)  
という集落があります。此処はその図でも判るように  
左と右が山になっており、山に挟まれた細く狭い谷  
があります。その谷を川が流れおり、川の出口に  
提口があります。つまり谷川の下流にあるわけです  
提(せ)は谷川の上流にあります、これは谷川の下  
流にあります。

いずれにしても、両方とも谷もしくは谷川があり  
ますので、この「提」という地名は谷川もしくは谷  
に関係があるのではないかと思われます。

その地図に「昆」という字を書いた變った地名が

あります。これは昆砂ヶ野(ひしゃの)と読みます。  
藩政時代には、この辺りは鷹の多い所であったそ  
うです。ビシャゴという鷹のことだそうです。ビシャ  
ゴというのは海岸で魚をとて食べる鳥ですが、最  
近はめっきりいなくなっています。昆沙子島(ひゅ  
こじま)という島などがあったりしますので、ビシャゴ  
説はやはり当っているのではないかと思うのです。  
しかし海岸から非常に遠い 15km.もあるような所に  
昆砂ヶ野という土地があるのは大変珍しいことのよ  
うに思ひます。ビシャゴはミサゴというものが本當  
の名前で、九州では訛ってビシャゴと云います。

(3) 姶良郡加治木町大字西別府提水流(せがる)。現  
地ではサケという清音で、サゲという濁音ではあり  
ません。この点が最も注意されるところだと思ひま  
す。地図を見て頂きますと、山という字が右の方に  
書いてあります。この山の一隅は左の方に突き出た  
台地であります。もともと宇曾木川はこの台地に  
突き当つて急に流れを変えて曲って流れています。  
宇古川と書いてありますが、ここが旧河道であ  
ったわけです。いつの頃か知りませんが、トンネ  
ルを掘削して現在では真っ直ぐ流れるようになつ  
ています。トンネルは100mたらず、70m ぐらいでし  
ょうか。これは岩をくり抜いて出来ています。この台  
地の表面はシラス台地ですが、底の方は岩盤になつ  
ております。この岩盤に突き当つて川が真っ直ぐ  
進めないで急に曲つたので、こういう地形になつた  
のであります。この提水流という集落は旧河道に  
沿つて出来ております。それで「サケ」は川の流れ  
によって抉られ裂けたような谷間になっているから  
「サケ」というのではないかと思います。

それから「水流」ですが「ツル」はツラナルから  
来ていると思います。つまり集落は旧河道につらな  
っている、沿つているということで「水流(ツル)」と  
いうのであろうと思います。写真はAの上から2番  
目の左、(3)加治木町提水流という写真になります。

下の方に田圃があります。これが旧河道。宇古川で  
あります。現在の川は旧河道よりも4~5m下を流れ  
ています。その写真の右の方が黒く曲っていますが、  
旧河道の崖であります。手前から向うの方へ台地  
が突き出しております。

次に地図の2枚目の(4)鹿児島郡吉田町字佐多浦  
提水流(せがる)。これの「サケ」という清音です。現  
地ではサケヅルと清音で発音しております。此処は  
思川の上流が流れおり集落は山の裾にあります。  
前方にはちょっとした田圃があります。この川を  
遡つて行きますと、上流は深い谷間になっておりま  
す。「サケ」は裂けから来ていると思います。つまり  
川の流れによって抉られ裂けたような地形になつ  
ておるから「サケ」というのではないかと考えられ  
ます。ツルはツラナルの意味であります。ツラナル  
には2種類あります。平行にツラなっているもの、  
例えば「川のツイ(カツイ)」という言葉があります。  
川に平行になっている道路を「カワツイ」と云い  
ます。これは「川のツル」だと思います。今一つ  
芋ヅルのように次から次へと先から先へとツラな  
っているものもあります。平行にツラなっているもの  
は先にあげた加治木町の提水流です。これは旧河道  
に平行にツラなっている。吉田町の提水流は谷間の  
先の方にツラなっているものです。この二つの提水  
流から類推しますと、濁音のサゲは清音のサケが濁  
音化したものであると考えられます。写真Aの④。  
集落の写真は見つかりませんでした。右の方に谷間  
の写真が出ております。上流はこのように狭い谷間  
で谷川が流れております。

(5) 姶良郡姶良町大字木津志上提ゴチ(かんせだち)。  
ここは谷間の集落で、後郷川の上流に沿つた狭い細  
長い谷間です。そこに上提ゴチという集落がありま  
す。上提ゴチのゴチは川内(カサ・コサ)の訛ったもの  
です。コウチは河谷地帯の意味であります。東橋と  
いう橋がありますが、アヅマと読みしております。

これは戦後の地名で上提ゴチとウシトンコッという二つの集落が合同して東公民館を作っております。写真はAの(5)。一番下のものです。左の方は上提ゴチの集落であります。橋は東橋(あずま)です。

次に(6)姶良郡姶良町大字木津志字下提(しもぢ)。これは上提ゴチのすぐ下流の谷間の水田のある所であります。写真はAの(6)。一番下の右ですが、この正面に見える田園のある付近、それから右の方に黒っぽく長く横たわっているのは、これは川であります。この辺は下提です。やはり谷間であります。遠くに見えるのは上提ゴチ、左の方に見えるのはウシトンコッであります。

次に2枚目の(7)揖宿郡喜入町大字一倉字提原。提原(ひきら)は台地で畑になっていますが、その端に谷があります。ヒサキ原は引裂原(ひきわり)の意味であると思います。引き裂いたような谷に沿った台地であります。写真はB-⑦。その白いのは菜の花畠であります。私が行った時はちょうど菜の花が咲いておりました。そういう台地であります。向うの方に谷があります。右の方に杉の木の生えた所がありますが、ここが深い谷になっております。その谷に沿った所が提原(ひきら)です。

次に地図の(8)薩摩郡東郷町大字山田および大字南瀬、字提ヶ原(くねぬい)という所があります。ここは大字山田と大字南瀬の両方にまたがっています。クサゲという言葉は、ヒサゲがフサゲになりそしてクサゲに訛ったものであると思います。ヒシャクをクシャクとも云うし、煙がクスブルをフスブルとも云うようにH音はK音とは交替することがまま見られます。ヒサゲというのはヒッサケの意味、引裂けたような地形ですからヒッサケというのであると思います。写真はBの上から2番目になります。提ヶ原そのものは緩傾斜した野原で、畑でありますが左の方に黒い森があります。森の左の方が谷川になっています。右の方の写真は提ヶ原の谷川、山田川で

あります。そこは抉られて岩が露出しております。

次に3枚目の(9)川内市高江字打提。これはウッサゲと読んでおります。ここは左に300m、右に200mの山がありまして、それに挟まれた大きな谷間になっております。谷底を小麦川という川が流れております。字打提は、そこに点線で示してありますが、そういう山の斜面から川に達する崖が打提であります。それでウッサゲは「打っ裂け」の意味で、打っというのは強意の接頭語で、喜入町のウッサキ原がヒッサキ原であったのと同様であります。写真はBの上から3番目、⑨川内市高江字打提。このように深い谷間になっております。右の方を見て頂きますと、打提の谷底を流れる小麦川があります。橋は山神段橋(やまじんばし)と云っております。

次に(10)熊毛郡上屋久町大字小瀬田字提ヶ野(ひの)。小瀬田小学校の右の方に小さな川がありますが、これを遡ったところに字提ヶ野があります。この辺は岩はありません。土の緩傾斜地であります。字提ヶ野は谷に挟まれた台地で、ススキの生えた野原であります。残念ながら写真はありません。

以上のことまとめ、結論といたします。第一にサゲ・サケという地名のもの形は清音であったということです。第二、この地名は川の流れによって抉られて裂けたような谷間があるということです。つまり、水による侵食作用を示す地名であると思います。

次に、サケとサコの相違はどうかというと、サケには必ず川がある。サコ(迫)には川がある所もあるが、川のない所もあるということです。サコのサは狭いという意味の「サ」。コは場所を示す「コ」ではないかと思います。写真Bの右の一一番下。迫の一例で大口市篠原字釜ヶ迫。ここは川がありません。川によって出来た地形ではなくて、村の地形がすでに迫になっておるのだと思います。釜ヶ迫とか鎌ヶ迫などと書いたものもありますが、地形が鎌に似ています。

いるので「カマドが迫」の意味ではないかと考えております。しかし別の解釈もあるかも知れません。今のところ、そのように考えています。

次に幸毛郷について説明します。一番上の地図に天長元年以前と書いて、種子島の図が出ていますが、熊毛郡は北の方、能溝郡は南の方にあると考えられます。というのは中種子町に野間という地名がありますので、これをとって野溝郡にしたのではないかと言われておりますので、野溝郡は南の方、熊毛郡は北の方であろうと思われます。屋久島は益久郡と馴謨郡とからなっております。益久郡は今日の上屋久町、馴謨郡は屋久町に当るのではないかと考えられます。上屋久町に益教神社がありますので、そのように推定しております。

次の天長元年以後という地図がありますが、種子島は熊毛郡、屋久島は馴謨郡であります。下の方でみると、「天長元年多袖島を停め大隅国に隸す。能溝を熊毛に合せ、益久を馴謨に合せ、四郡を二郡と為す」ということで、ずっと来ておったのですが、明治29年、馴謨郡を熊毛郡に合併して、現在は熊毛一郡になっております。

和名抄には三郷が書いてあり、熊毛郷、これは註があり久末介となっていて発音が判りますが、あと二つは判りません。大日本地名辞書には「幸毛郷今詳かならず、サキケと読むにや」とあります。阿枝郷については「今詳かならず、或は云ふ、南種子村に平山あり、阿枝山の上略にや」。これは日本地理志料の説で、この説が当っているのではないかと思います。それにしましても、古代の郷名の付け方は現代の常識では判りません。意外なところがその起源になっているようです。

益久はこの字の通り読むと「ヤクク」になりますが実際は「ヤク」と読んでおります。同様に幸毛も字の通りに読むと「サキケ」になりますが、これは「サケ」と読むのがいいのじゃないかと思います。

中種子町提は、もとの形は清音のサケでありますから提(サ)は幸毛郷の遺称地ではないか。少なくとも中種子町が幸毛郷であった時代の名残ではなかろうか。幸毛郷という郷名の意味もこれによって推定出来るのではなかろうか、と思っている次第です。

(質疑応答)

平田 どうもありがとうございました。サケとサコ。鹿児島県に多い迫(サ)という地名との差異。似たように裂けた地名だけど、サケには必ず川があるがサコにはない場合が多いということでした。さらに種子島の三つの郷、熊毛・幸毛それに阿枝。幸毛郷がちょうど熊毛郡の真ん中に出て来ますから中種子町が比定地になって都合がいいわけですね。何か質問がありましたら出して下さい。加治木町とか薩摩郡東郷町それから高江などの地名は、近くに住んでいる方が多いようですので遠慮なく意見を述べ下さい。

肥後 2番目の志布志町四浦のビシャゴ島について。ビシャガ野が15kmぐらい海岸から入った所ということでしたが、ビシャゴ島というのは海岸線の近くですか？

小川 島は、私もよく判らないのです。ビシャゴ島という島があるというのは本に書いてあります。これはやっぱりビシャゴがおった島ではないかということで、文字からみて、この両方は同じ意味ではなかろうかと推察しているところです。

肥後 ビシャガ野は海拔いくらぐらいの所ですか。高いですか。

小川 そうですね。末吉に近い、高い所です。われわれが考えている15kmというと、非常に遠いように思いますが、何千kmも飛ぶような鳥がいますので鳥にとっては、ほんの一つ飛びということかも知れないと思われるわけです。(笑い)

江之口 「提」という文字だけをここでは扱っているのですが、同じような地名は他の文字でもある

ということですね。

小川 そうです。

江之口 ここでは「提」だけを扱ったということですね。

小川 そういうことです。他に「酒」という文字を当てた地名もあるようです。

江之口 いつも小川先生は現場を抑えておられるので、ただ感心するばかりです。

小川 この地名は他の所にもまだあるようです。加世田の辺にも「提谷」というのがありますし、全部調べたわけではありませんので。10ヶ所ぐらい調べると、大体推察出来るのではなかろうかと思った次第です。また一齊に調べたわけでもありません。最初に調べたのは中種子町の「提」でした。これは昭和35年に調べたものです。今から33年ぐらい前ですかね。当時、種子島に住んでおりました。こちらからわざわざ出掛けて行ったのじゃなくて種子島に居たから調べたということです。

平田 中種子町の「提」。この辺が歴史的に見て中種子の中心地と考えられるわけですか。

小川 ここは中心地じゃないですよ。

平田 ああ、そうですか。

肥後 南種子に近い所。

小川 南種子に近い所でして、ここから幸毛郷という地名が起こったかどうかというのは甚だ疑しいのですけど、ただ少なくとも中種子町が、昔、幸毛郷であったということの名残ではないか、と。

平田 地名が残ったという解釈ですね。

小川 そういうふうに考えた方がいい。此処から起きたかどうかということは、ちょっと疑問です。

二見 (3) と(4) が、同じく提水流ですよね。加治木町のこの辺はよく通るのですが、「サケズイ」という所、ここは何か共通点というがありますか。水流という地名は。

小川 水流という地名は多いのですが、私はツラ

ナルという言葉から来ているのではないかと考えております。川にツラなって平行にある道路を「川ンツイ」と。「カワンツイ」は「川のツル」だと思います。そして、両方とも裂けたような谷間があるということが似ているわけです。

二見 これを「水流(ツル)」と読ませるところが面白いですね。

小川 水流でなくて「鶴」と書いたのもあります。

池田 川内にも「水流」があるんですけど。大島水流だと上水流だとかが。全部、私の近所ですけど。川内川の縁を云います。

小川 加治木町の提水流は岩をくり抜いて、トンネルが出来ております。いつ頃出来たのかと聞いても土地の人は判らんと云います。明治・大正の頃であれば記録しているはずですが、判らんというのは江戸時代の末期じゃなかろうかとも推察しております。と申しますのは、この宇曾木川の下流に300m.ぐらいありますか、やはり岩をくり抜いたトンネルがあり、そのトンネルで用水路を作つて200町歩ぐらいの水田を開拓したということが加治木郷土誌に出ております。そんなことで江戸時代であったかも知れないと考えております。それで、よく串木野の金山の人たちを頼んで来て工事をしている所が多いようです。大口あたりにもそういう所があります。

二見 加治木町の提水流みたいな本格的なトンネルじゃなくても、くり抜いた水路はあの辺には沢山ありますね。うちの辺もそういうのですから。上流からずーっと似たような水路がありますね。先程、説明されたように同じ頃に作ったものですね。

池田 さっき話を出しましたが、たまたま地図があります。ここなんです。大島水流というのは。

平田 大島水流。ああ、その地図ですか。

池田 小字があるのです。

平田 9年ぐらい前でしたか、本田先生が吉田町の提水流を「ヒシャゲヅル」と説明されたことが

あるのですが。

小川 吉田町の提水流ですね。これは、いつの頃でしたか。慶長の頃でしたか。16代の入来重定でしたか。藩命が下るのです。それで、一所持の人が皆鹿児島城下に屋敷を作つて、そこへ移れという命令が出たわけです。非常に急な命令でありまして、早速鹿児島城下に屋敷を建築にかかったのですが、それが出来るまでの間、吉田の提水流に一時居ったことがあるそうです。入来院家の系図の中にヒサゲヅルに一時移るということが載っているということが本田先生の説明で判りました。ヒサゲは度々申したように「ヒッサケ」から來ていると思います。

小園 志布志のところの説明で、ビシャゴは鳥の名前だと云われましたが、これも解釈はヒッサケでヒッサケ島・ヒッサケ野と読めるのではないか読みようによつては。ビはヒに読み、シャガはシャケに読み——。

小川 そうですね。実は、私も最初はそのように解釈しどつたのですよ。おっしゃるように。

小園 その方が、全部が同じような解釈になりますね。

肥後 しかし、島がありますからね。

平田 ビシャゴだな。

小園 鹿児島でいう「島」は、小さな地域をいうのではないですかね。

肥後 小川先生の話では、海岸の「島」です。

小園 海岸の方ですか。

肥後 海岸であれば、ビシャゴは「鳥」。

小川 ビシャゴというのは。

肥後 ビシャゴというのは垂水にもあるのですね  
小川 はい、ありますね。

肥後 800いくらでしたか、山があります。私が四回目の例会に発表しましたけど。

小川 ああ、そうですか。

肥後 山の名前です。そこに演習林があるんです  
そこビシャゴが棲んでいて、鹿児島通いの船にた  
またま止まることがあるんですね。昔は多かったの  
です。それが止まれば縁起がいいと昔は云つておつ  
たそうですけど。

小川 最近は全然見かけない。

肥後 県下に、ビシャゴの名前の付いた字名が何  
ヶ所かありますね。

平田 阿久根の沖にあるんじゃないですか。

肥後 海岸にはあると思います。

平田 話はつきないと思いますが、時間がありま  
せんので、今日はこの辺で。

平成5年度から、会費のあり方を変えさせてくだ  
さい。毎回参加される方には負担となります  
が、出会の時に千円出すという方法です。1年・2年と  
出会せずにいると会費もとどこおり出にくくなりま  
すので、そんなことがないようにしたいと思います

それから今度の土曜日、3月13日(土)12時  
からKKBの番組に「石橋にかける情熱」とかいう  
ものがあります。私も出て来ますので、お暇な時は  
見てください。

1.

提(さげ、さけ)という地名について

付、幸毛郷

小川亥三郎

(1) 鹿児島県熊毛郡中種子町大字坂井(さかわ)の提(さげ)

提は谷川の上流にあり  
写真あり。

### 中種子町提付近略図



(2) 鹿児島県熊毛郡中種子町大字坂井(さかわ)提付(さげんべ)

提は谷川の下流にある

鬼砂が野(びしゃがの)。  
鬼砂子島(びしゃごじま)

写真なし

### 提口付近略図



(3)

姶良郡加治木町大字西別府提水流(さげづる)

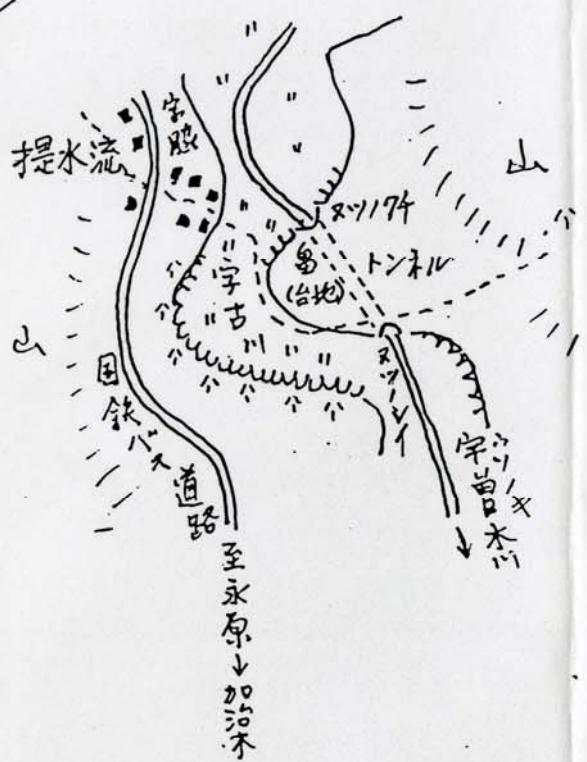
宇曾木川は元は旧河通(古川)

古川)を流れていたが、いつの段  
かトンネルを掘り込んで直行  
するようになつた。トンネルは  
長さ七〇m位。提水流は落  
は旧河通に添つていて、  
水流は下から流れ込んでき  
る。

写真あり。

N

### 加治木町提水流付近



2.

## (4) 鹿児島郡吉田町大字西佐多浦 提水流(さよどり)

上流は深谷向、  
堤主流は「裂け」

から来てくる、川の流れによって、え

ぐられ、裂けたよう

な地形になつている。

水流は、「うねる」の意

で、平行に運びる

②芋づるのよみに

次がうねに運びる

と、「うねる」の意

法音のサゲは清

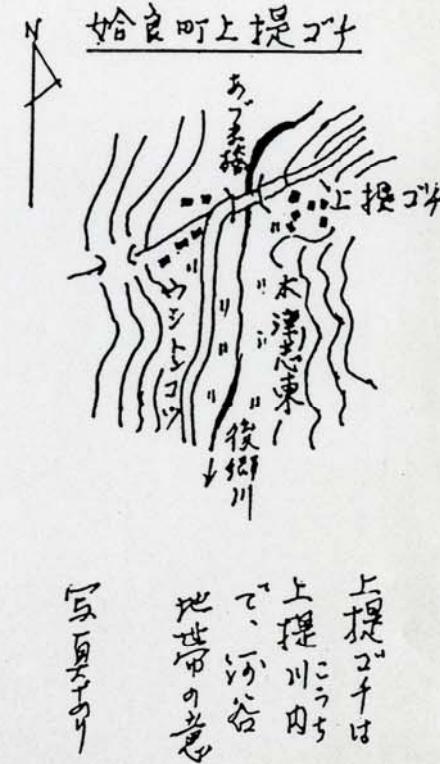
音サゲが浊者

化しておき、

写真あり



(6) 姶良郡姶良町大字木津志室下提(くわさ)



(5) 姶良郡姶良町大字木津志上提コツ(くわさ)

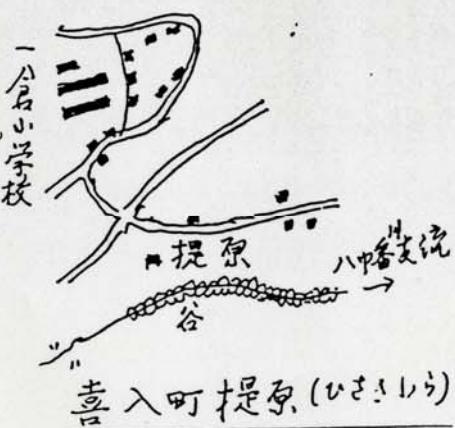


(8) 薩摩郡東郷町大字山田・大字南瀬(ひざみ)

吉田町 提水流

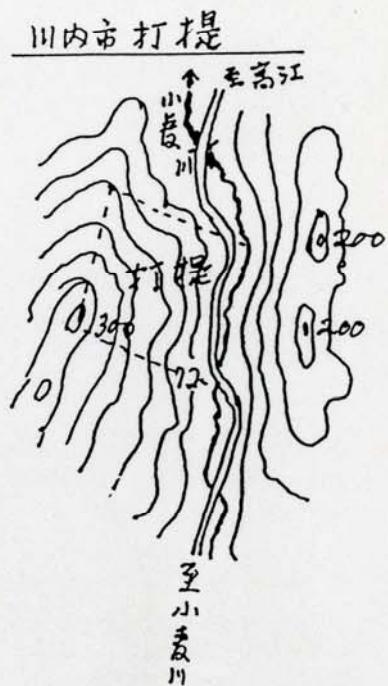
## (7) 指宿郡喜入町大字一合谷(ひとくわ)提原(ひさしり)

へいさしきわら



3.

(9) 川内市大字高江字打提(うさぎ)

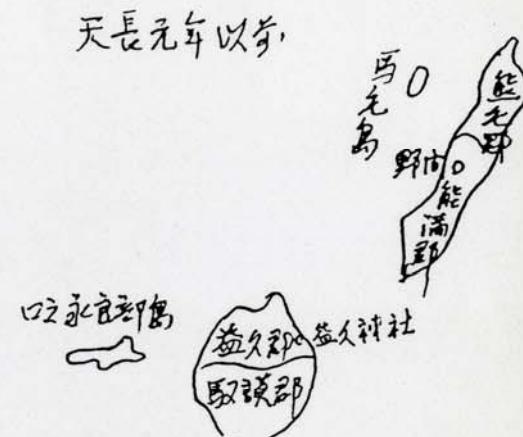


N

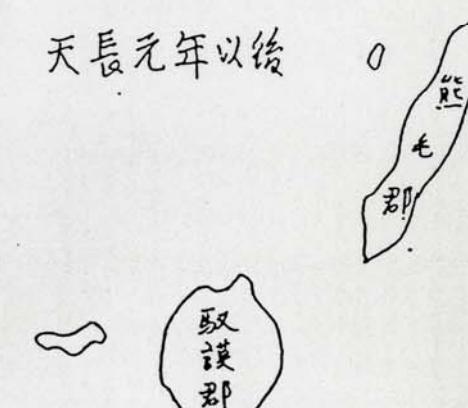
打提(うさぎ)は打引(ひき)の意で、「打」は  
強き持頭語、喜入町のヒサキワラは引(ひき)を  
の意であるとの同様、写真あり

付、幸毛郷

写真あり



天長元年以後

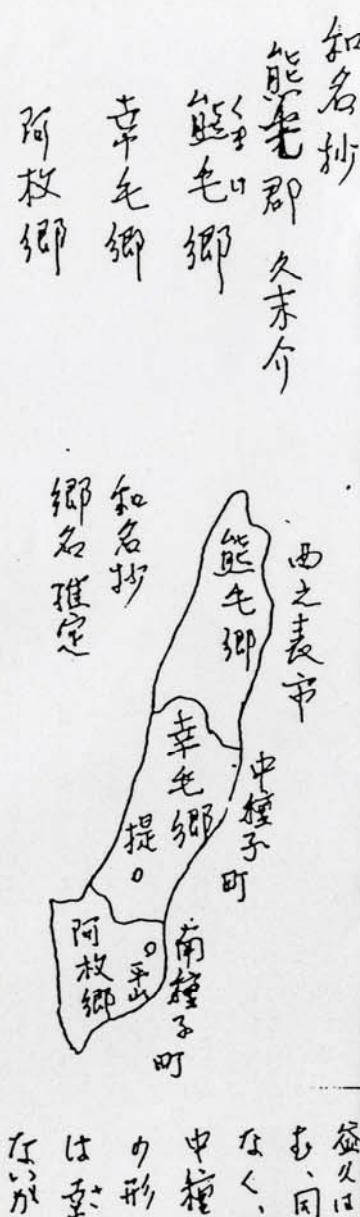


宇提ヶ野は、谷にはまかた台地、ススキ  
の生えた野原。写真なし

○○サケとサコ(追)と相異 写真あり

天長元年多袖島を  
停め、大隅國に隸す。  
能満を熊毛に合せ  
益久を取謨に合せ  
四郡を二と爲す

明治二十九年取謨郡と  
熊毛郡に合併す



益久は益久びり万く益久と読  
も、同様に幸毛は幸毛では  
なく、幸毛と読み方があり  
中種子町提へさせは、元  
ウ形はサケであるから、提  
は幸毛郷の遷称記では  
なが

大日本地名辞書

幸毛郷、今詳ならず、サケと読むにや  
「阿枚郷、今詳ならず、或は云ふ、南種子町に  
平山あり、阿枚山の上駒にやと  
ひらやまと、阿枚山の上駒にやと」

和名抄

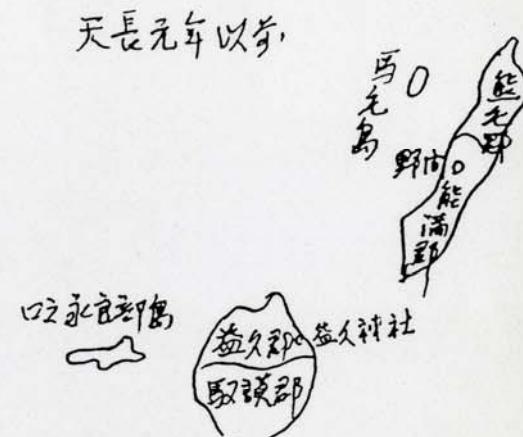
郷名推定

和名抄

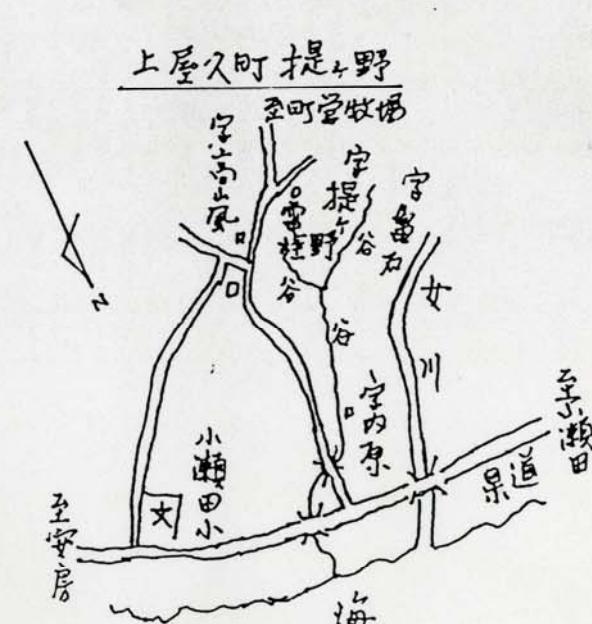
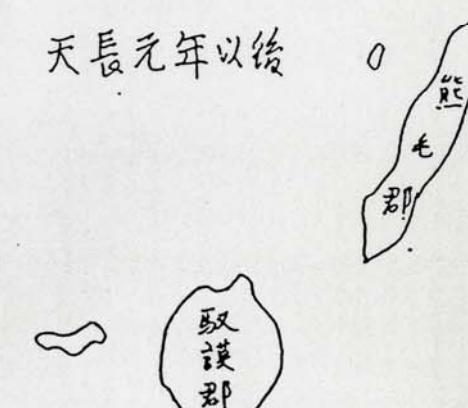
熊毛郡 久末介

熊毛郷

阿枚郷



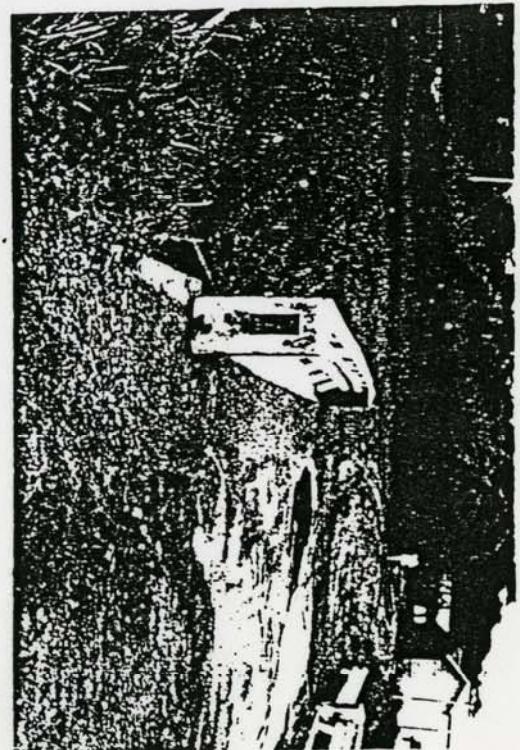
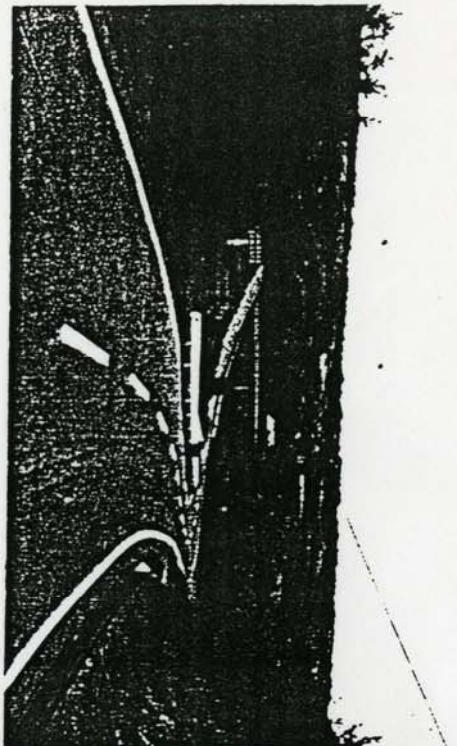
天長元年以後



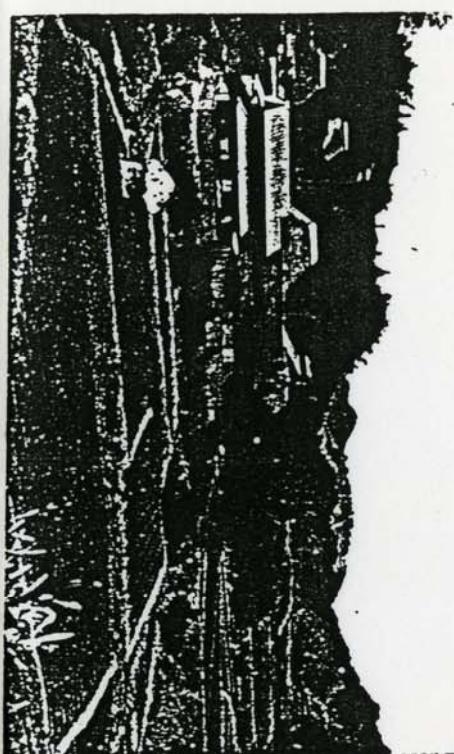
(10) 熊毛郡上屋久町大字小瀬田字提ヶ野(うさぎ)

A ① 中種子町田

中種子町提(横川向)集落、川邊(砂州)、中田橋。

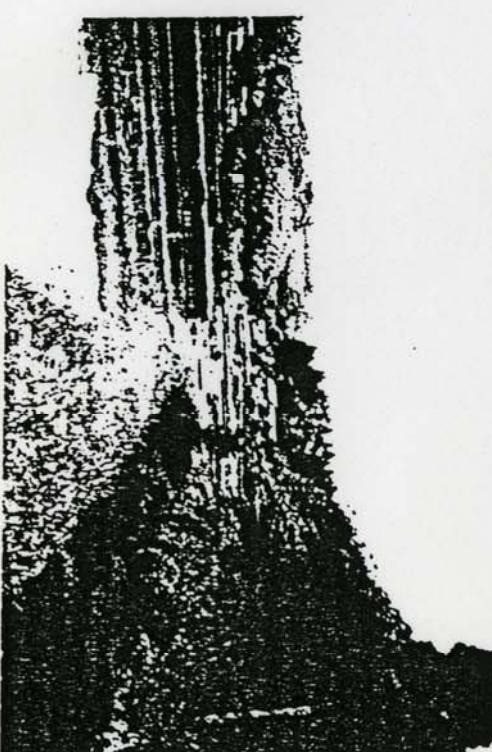


③ 加賀木町 提水流集落、水田川空右側、旧河道。

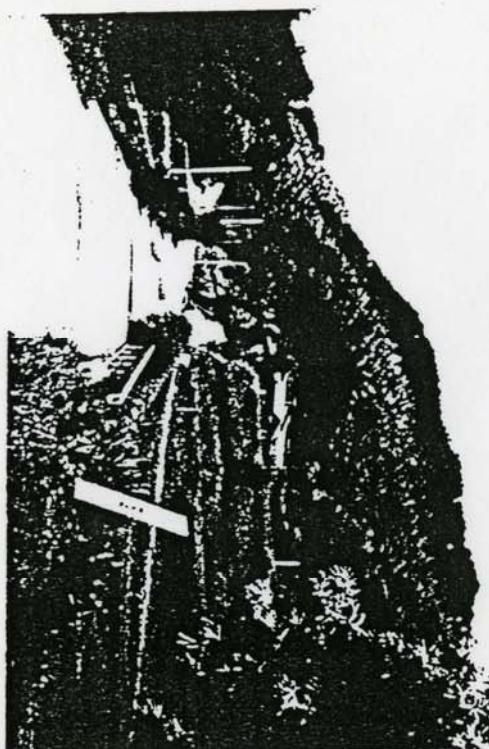


吉田町 提水流 上流 公園。

(4) 吉田町 提水流集落、集落の写真。



④ 稲良町下堤、遠山川河川上提エアード構築。

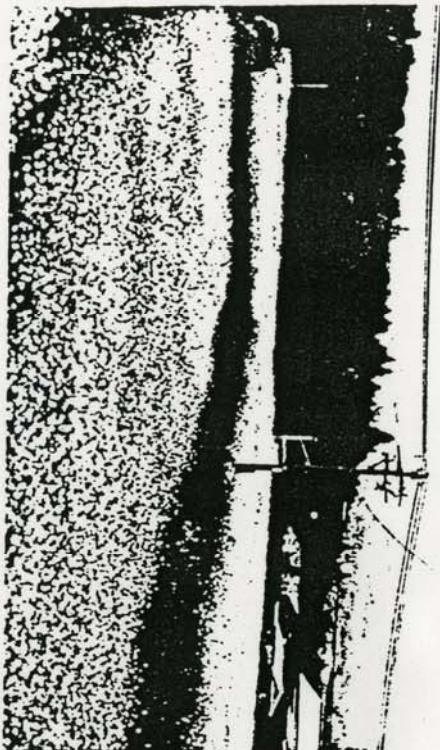


⑤ 稲良町上堤エアード構築、構造がよく不満。

① 喜入町字堤原(川辺町)、草の花

字堤原の端に折り谷。

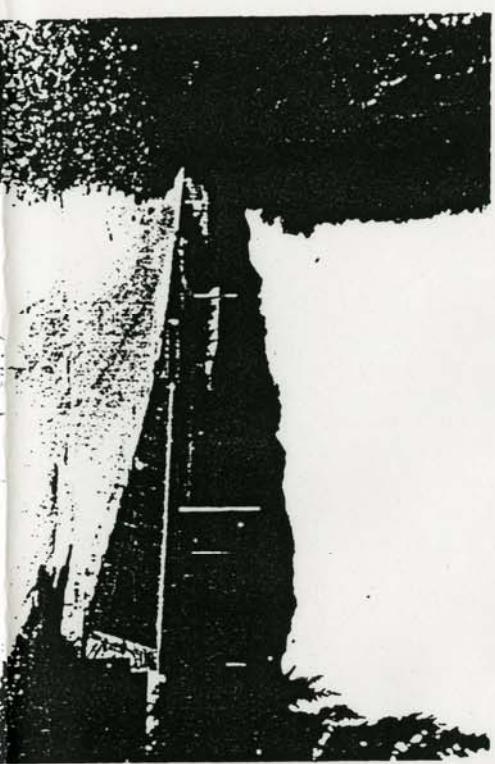
B



⑧ 東御町字堤原(川辺町)



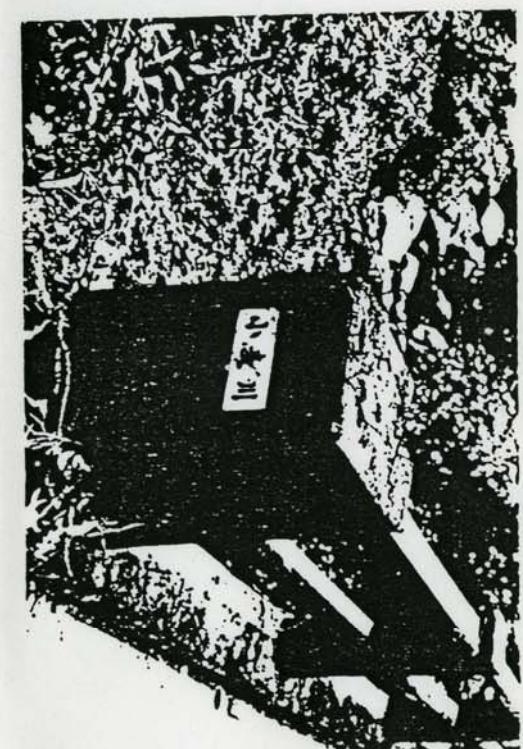
提原の谷川(山田川)



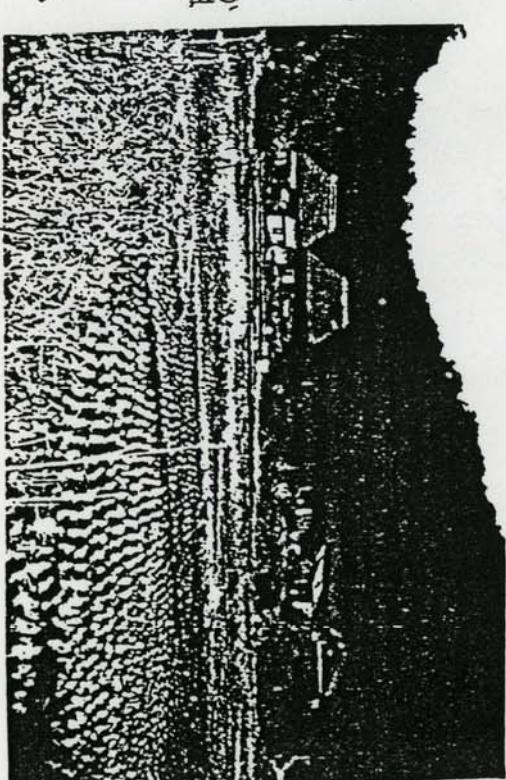
⑨ 川内市高江の字打提(川辺町)、崖の谷



打提。谷底を流れる小葛川。



追一-131. 大口市横瀬の字答込。川辺町



⑩ 上原町小瀬田字堤原  
写真なし。